熊本県文化財調査報告第237集

小　枝　遺　跡

一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００７

熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education , Kumamoto Prefectural Office

小枝遺跡の発掘調査について

小枝遺跡は球磨郡あさぎり町深田（旧深田村）にある縄文時代後期（約3,000～4,000年前）～古代・中世（約600～1,300年前）の遺跡です。

小枝遺跡は、熊本県が新しく道路をつくろうとして、みつかった遺跡です。道路をつくると遺跡が完全にこわされてしまうので、発掘調査をして遺跡の様子を記録することになりました。このように、道路や建物などをつくろうとするところに遺跡があって、その遺跡がこわされるかもしれないときには、発掘調査をしなければいけません。これは、「文化財保護法」という法律で、決められています。

小枝遺跡からは、昔の人が住んでいた跡がみつかりました。地面を掘ってつくった家の跡（竪穴式住居跡）や、昔の人のとおった道路の跡、赤色の土器を焼いた跡などがみつかりました。

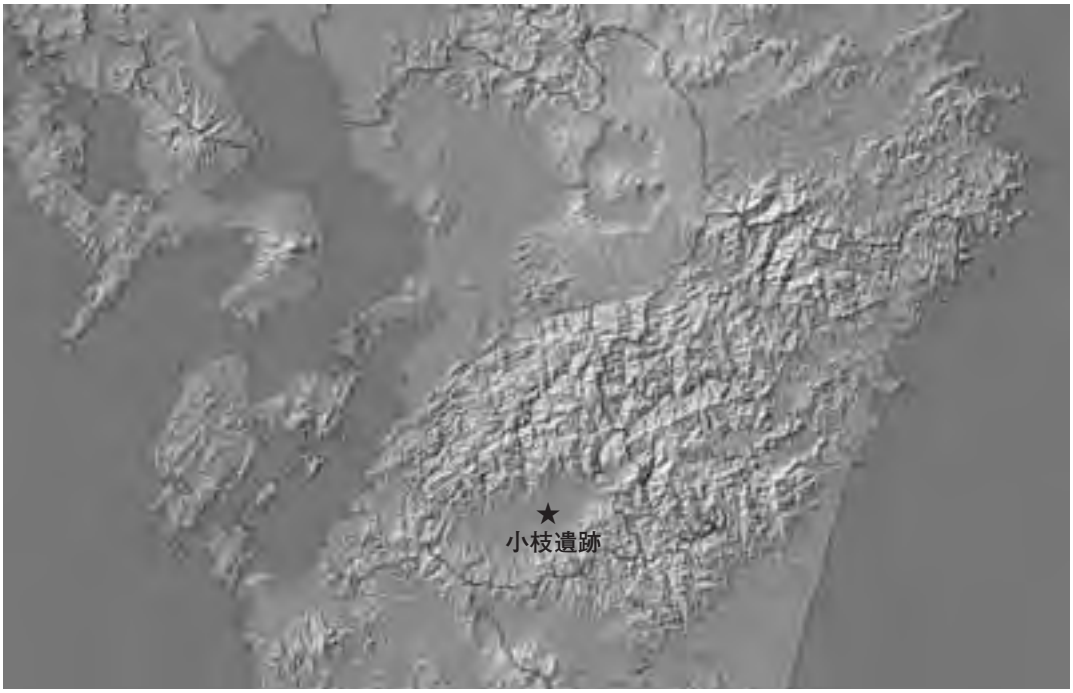
また、土でつくった皿や甕（土器）、石でつくった道具（石器）などたくさんの道具がみつかりました。土器は、食べ物をもりつけたり、水をためておいたり、食事をするときなどにつかわれました。また、文字が書いてある土器もみつかりました。これは魔よけやおはらいにつかわれたものだと考えられます。石でつくったやじり（石鏃）は動物を捕ることにつかわれたもので、石の斧（石斧）は土を掘ったり、木を切りたおしたりすることにつかわれました。とくに小枝遺跡では石のやじりがたくさんみつかりました。ここに住んでいた人たちは、イノシシやシカや球磨川の魚を捕るのに弓矢をつかっていたと考えられます（どのようなものかは、うしろのページの写真をみてください）。

このように、今回の発掘調査では多くのものがみつかりました。遺跡はこわされてしまいましたが、小枝遺跡がどのような遺跡であったかは、この本の中に記録されています。また、みつかった多くの道具は当時の人たちのくらしの様子などを教えてくれる貴重な資料です。このような遺跡やものは、「文化財」ということばでよばれています。文化財は、昔の人がのこしてくれた大切な宝として、これからも守っていかなければなりません。

熊本県文化財調査報告第237集

小　枝　遺　跡

一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



「カシミール３Ｄ」で作成

２００７

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、平成13年度と平成16年度に、一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴い、あさぎり町小枝遺跡の発掘調査を実施しました。

小枝遺跡の調査においては、縄文時代後・晩期、弥生時代、古代、中世と幅広い時代の遺跡であることが確認されました。特に中世のものと考えられる出土資料は、西に隣接する深田城、そしてそこを本拠とした豪族の平河氏との関連があるものと思われ、深田の古代を知るための貴重な資料を得ることができました。

これらの調査成果が学術的資料としてのみならず、多くの県民の皆様の埋蔵文化財保護に対する理解を深めていただくための資料となれば、また生涯学習などに有益に活用していただくこととなれば幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂いた地元の方々、関係各機関、調査に対する指導、助言を頂いた諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成19年３月23日

熊本県教育長　柿塚純男

例　言

1　本書は、熊本県球磨郡あさぎり町深田西地内所在の小枝遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本遺跡の調査は、一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴う事前調査として、熊本県土木部の依頼を受けて平成13年度と平成16年度に熊本県教育庁文化課が実施した。

3　本書では、平成13年度調査を第１次調査、平成16年度調査を第２次調査と呼ぶこととする。第１次調査は野田英治、宮崎拓が担当し、第２次調査は木村龍生、士野雄貴が担当した。

4　４級基準点及びメッシュ杭設置業務は、第１次調査では株式会社九英に委託した。第２次調査では株式会社大進コンサルタントに委託した。

5　発掘調査現場での遺構実測及び写真撮影は、調査担当者が行った。第２次調査では、遺構実測の一部及び地形測量業務は、株式会社九州文化財研究所に委託した。

6　第２次調査での大型ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影業務は、株式会社スカイサーベイ九州に委託した。

7　遺構のトレースは、アイシン精機株式会社が開発したデジタルトレースソフト「とれーす３Ｄくん」を使用し、木村龍生、野田愛が行った。

8　遺物の実測・トレースは、野田愛、府内博子、宮崎典子が行った。第１次調査出土石器の実測・トレースは、熊本大学文学部考古学研究室の芝康次郎、神川めぐみ、高平愛子の三氏の協力を得た。また、第２次調査時に出土した石器の実測・トレースは株式会社九州文化財研究所に委託した。

9　遺物の写真撮影は、村田百合子・手嶋裕子を中心に行った。

10　本遺跡出土須恵器の胎土蛍光Ｘ線分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

11　本書の最後に、中世に深田地域を治めた豪族である平河氏についての論考を、士野雄貴が執筆した。

12　本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、木村龍生が行った。

13　本遺跡の出土遺物、写真及び図面などは、すべて熊本県文化財資料室（熊本市渡鹿３丁目15－12）にて保管している。資料の有効な活用を望む。

凡　例

1　平面直角座標は、世界測地系（日本測地系2000）を使用している。方位は座標軸を基準とした座標北を示している。

2　本書に使用したレベル（Ｌ＝）は標高を示す。

3　本書では、遺構図は基本的に１／40、１／80の縮尺で掲載しているが、一部のものについては任意の縮尺で掲載している。挿図中のスケールを参照されたい。

4　本書に掲載している遺物は、基本的に土器は１／３、石鏃は１／１、その他の石器は１／２の縮尺で掲載しているが、場合によっては縮尺を変更しているものがある。挿図中のスケールを参照されたい。

5　須恵器の実測図断面は黒塗りしている。また、黒色土器は20％アミカケで、赤彩は赤色20％アミカケで表現している。

6　各層位の土色及び土器の土色は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

「小枝遺跡」目次

序文
例言
凡例

第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査にいたる経過 …… 1
　第２節　調査及び整理の組織 …… 1
　第３節　調査の過程 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の方法と成果 …… 9
　第１節　調査の方法 …… 9
　第２節　層序 …… 9
　第３節　調査の成果 …… 10
第４章　理化学分析 …… 67
第５章　総括 …… 72
文献に見る平河氏 …… 74

報告書抄録

挿図目次

第１図　小枝遺跡周辺の遺跡 …… 6
第２図　基本土層模式図 …… 9
第３図　第１次調査遺構配置図 …… 10
第４図　SD10、SD89実測図 …… 11
第５図　SK14実測図 …… 11
第６図　SD１実測図 …… 12
第７図　第２次調査遺構配置図 …… 13
第８図　S015実測図 …… 14
第９図　S004実測図 …… 14
第10図　S014実測図 …… 14
第11図　S013実測図 …… 15
第12図　S008実測図 …… 15
第13図　S017実測図 …… 16
第14図　S011実測図 …… 16
第15図　S001実測図 …… 17
第16図　S016実測図 …… 17
第17図　S021実測図 …… 18
第18図　集石実測図（１）…… 19
第19図　集石実測図（２）…… 20
第20図　集石実測図（３）…… 21

第21図　SD10出土遺物実測図 …… 22
第22図　SD89出土遺物実測図 …… 22
第23図　SK14出土遺物実測図 …… 22
第24図　SD 1 出土遺物実測図 …… 23
第25図　遺構外出土遺物実測図（1）…… 23
第26図　遺構外出土遺物実測図（2）…… 23
第27図　遺構外出土遺物実測図（3）…… 24
第28図　遺構外出土遺物実測図（4）…… 25
第29図　遺構外出土遺物実測図（5）…… 26
第30図　S009出土遺物実測図 …… 27
第31図　S015出土遺物実測図 …… 27
第32図　S015出土石斧実測図 …… 27
第33図　S018出土遺物実測図 …… 28
第34図　S004出土遺物実測図 …… 28
第35図　S013、S014出土遺物実測図 …… 28
第36図　S013出土遺物実測図 …… 29
第37図　S008出土遺物実測図 …… 29
第38図　S017出土遺物実測図 …… 30
第39図　S011出土遺物実測図（1） …… 30
第40図　S011出土遺物実測図（2） …… 30
第41図　遺構外出土遺物実測図（1）…… 31
第42図　遺構外出土遺物実測図（2）…… 32
第43図　遺構外出土遺物実測図（3）…… 33
第44図　遺構外出土遺物実測図（4）…… 34
第45図　遺構外出土遺物実測図（5）…… 35
第46図　遺構外出土遺物実測図（6）…… 36
第47図　遺構外出土遺物実測図（7）…… 37
第48図　遺構外出土遺物実測図（8）…… 38
第49図　遺構外出土遺物実測図（9）…… 39
第50図　遺構外出土遺物実測図（10）…… 39
第51図　遺構外出土遺物実測図（11）…… 40
第52図　遺構外出土遺物実測図（12）…… 41
第53図　遺構外出土遺物実測図（13）…… 41
第54図　遺構外出土遺物実測図（14）…… 42
第55図　遺構外出土遺物実測図（15）…… 43
第56図　遺構外出土遺物実測図（16）…… 43
第57図　遺構外出土遺物実測図（17）…… 44
第58図　遺構外出土遺物実測図（18）…… 44
第59図　遺構外出土遺物実測図（19）…… 45
第60図　遺構外出土遺物実測図（20）…… 46
第61図　遺構外出土遺物実測図（21）…… 47
第62図　遺構外出土遺物実測図（22）…… 48
第63図　遺構外出土遺物実測図（23）…… 48
第64図　遺構外出土遺物実測図（24）…… 48
第65図　遺構外出土遺物実測図（25）…… 49

表目次

第１表　小枝遺跡周辺遺跡一覧 …… 7
第２表　土器観察一覧表 …… 50
第３表　石器観察一覧表 …… 65

図版目次

図版１　小枝遺跡空中写真
図版２　第２次調査全景
図版３　第１次調査完掘状況
SD10完掘状況
SD10土層断面
SK14完掘状況
図版４　SD １完掘状況
SD １土層断面（１）
SD １土層断面（２）
SD １土層断面（３）
SD １遺物出土状況
図版５　遺物出土状況（１）
遺物出土状況（２）
遺構検出状況
図版６　小枝遺跡遠景
小枝遺跡遠景
第２次調査前状況
図版７　遺物出土状況（１）
遺物出土状況（２）
遺物出土状況（３）
図版８　遺物出土状況（４）
図版９　遺物出土状況（５）
図版10　S015完掘状況
土層断面
S020完掘状況
図版11　S013完掘状況
S013東西方向土層断面
S013南北方向土層断面
S013遺物出土状況（１）
図版12　S013遺物出土状況（２）
S014完掘状況
S014土層断面
図版13　S008完掘状況
S008南北方向土層断面
S008東西方向土層断面
S008検出状況
図版14　S011完掘状況
S011完掘状況
S011土層断面
図版15　S017完掘状況
S012
S003
図版16　S001完掘状況
S001土層断面
S016完掘状況
S016土層断面
図版17　S019完掘状況
S019土層断面
S019土層断面
図版18　S021完掘状況
風倒木土層断面
１号集石
図版19　２号集石
３号集石
４号集石
図版20　５号集石
６号集石
８号集石
図版21　10号集石
11号集石
12号集石
図版22　13号集石
14号集石
15号集石
図版23　SD10、SD89出土遺物
SK14、SD１出土遺物
図版24　遺構外出土遺物（土師器、陶磁器）
遺構外出土遺物（石鏃）
図版25　遺構外出土遺物（石匙、スクレイパー）
遺構外出土遺物（打製石斧、円盤状石器）
図版26　S009、S015出土遺物
S018、S004出土遺物
図版27　S013、S014、S017出土遺物
S008出土遺物

図版28　S008出土遺物
S011出土遺物
図版29　遺構外出土遺物（縄文早期土器）
遺構外出土遺物（縄文土器１）
図版30　遺構外出土遺物（縄文土器２）
遺構外出土遺物（縄文土器３）
図版31　遺構外出土遺物（縄文土器４）
遺構外出土遺物（縄文土器５）
図版32　遺構外出土遺物（縄文土器６）
遺構外出土遺物（縄文土器７）
図版33　遺構外出土遺物（石鏃１）
遺構外出土遺物（石鏃２）
図版34　遺構外出土遺物（打製石斧）
遺構外出土遺物（打製石斧、磨製石斧）
図版35　遺構外出土遺物（石匙、石錘、磨石）
遺構外出土遺物（磨石）
図版36　遺構外出土遺物（弥生土器）
遺構外出土遺物（土師器甕１）
図版37　遺構外出土遺物（土師器甕２）
遺構外出土遺物（土師器甕３、香炉）
図版38　遺構外出土遺物（土師器坏）
遺構外出土遺物（黒色土器）
図版39　遺構外出土遺物（墨書土器）
遺構外出土遺物（土師器）
図版40　遺構外出土遺物（須恵器）
遺構外出土遺物（土錘、土玉、紡錘車）
図版41　遺構外出土遺物（灯明皿）
遺構外出土遺物（陶磁器）

印刷仕様

・規格　Ａ４判
・頁数　142頁
・組版　写真写植
・印刷　オフセット印刷
・製版　カラー写真　　スクリーン線数200線４色刷り
モノクロ写真　　スクリーン線数200線１色刷り
・用紙　表　紙　アートポスト紙200kg
見返し　上質紙110kg
図　版　マットアート紙110kg
本　文　上質紙90kg
・製本　糸綴じ

第１章　調査の概要

第１節　調査にいたる経過

本遺跡の調査は、一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴うものである。

事業予定地内に埋蔵文化財が存在する可能性が高いことから、熊本県文化課は事業の実施に先立ち試掘調査が必要であることを通知した。それにより、平成12年度に球磨地域振興局長より試掘調査依頼が提出され、熊本県文化課が試掘調査を実施した。その結果、縄文時代後・晩期の土器や古代・中世の土師器などが発見され、遺跡の存在が確認された。そのため、埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨を球磨地域振興局土木部工務課へ連絡し、協議を重ねた上で平成13年に第１次調査を行うこととなった。また、用地の買収が段階的に行われていたために、買収が完了した時点で順次試掘調査を実施するということで合意した。

その後、平成15年度に買収完了した用地において試掘調査を実施した結果、新たに遺跡の存在を確認したため、球磨地域振興局土木部工務課との協議の結果、平成16年度に第２次調査を実施することとなった。

なお、この事業の用地の買収は既に完了しており、第１次調査、第２次調査を行った箇所以外では埋蔵文化財は確認できなかった。

第２節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属などは当時のものである）。

第１次（平成13年度）調査

調査責任者　阪井大文（文化課長）
調 査 総 括　木﨑康弘（文化財調査第２係長）
調査事務局　中村幸宏（主幹兼総務係長）、廣瀬泰之（参事）、杉村輝彦（主事）
調 査 担 当　野田英治（文化財保護主事）、宮崎　拓（非常勤職員）

第２次（平成16年度）調査

調査責任者　島津義昭（文化課長）
調 査 総 括　西住欣一郎（文化財調査第２係長）
調査事務局　欄杭正義（主幹兼総務係長）、天野寿久（主任主事）、小谷仁志（主任主事）
調 査 担 当　木村龍生（学芸員）、士野雄貴（非常勤職員）

整理・報告書作成（平成17、18年度）

整理責任者　梶野英二（文化課長）
整 理 総 括　西住欣一郎（文化財調査第２係長）
整理事務局　四元正明（主幹兼総務係長　平成17年度）、高宮優美（主幹兼総務係長　平成18年度）
　　塚原健一（参事）、小谷仁志（主任主事）
整 理 担 当　木村龍生（学芸員）、野田　愛（非常勤職員）

調査指導及び協力者（敬称略）

地元の方々、北川賢次郎、出合宏光、福原博信、荒木隆宏、髙木正文、前川清一、廣田静学、水野哲郎、山下義満、帆足俊文、松森由美、米村俊治、村中智絵、橋口剛士、沖　謙介、芝康次郎、神川めぐみ、高平愛子、あさぎり町教育委員会、熊本県土木部、球磨地域振興局土木部工務課

発掘調査作業員

第１次調査

和田　渓、田山道男、平川ヤエ子、落合敬喜、山本リキ子、高田悦子、高田昭八、上村シズミ、木村フデ子、落合康子、今坂ノブ子、溝辺美代子、富永清子、荒川ミノル　吉川ミツヨ、久保田京美

第２次調査

山本リキ子、稲田フヂ子、木村フデ子、今坂ノブ子、平川ヤエ子、田口タミ子、荒川ミノル、吉川ミツヨ、岩川　浩、福永一子、福田　功、上田　稔、野添ひとみ、志水節子、高田悦子、高田昭八、福丸節子、岡田良子、中村良子、恒松久子、桑原レイ子、恒松千恵子、石塚賢四郎、上村シズミ、恒松峰香、蓑田司郎、櫻井和子、板橋弘道、川越三代、梅田順子、岩本秋富、田山ゆかり、田中康一
久保田陽香（別府大学学部生）

整理作業員

米倉五月、村山紀子、篠崎チカ子、上野栄子、内田孝子、中山安子、石田敦子、石部真佐子、府内博子、宮崎典子

第３節　調査の過程

第１次調査は、平成13年５月15日（火）から平成13年６月14日（木）まで、第２次調査は平成16年６月22日（火）から平成17年２月10日（木）まで実施した。

第１次調査

【平成13年５月】

15日、表土剥ぎ開始。土層の確認。16日、メッシュ杭設置。17日、撹乱除去。22日、木﨑係長、帆足主任学芸員来訪。23日、土層の再検討。１層上面の撹乱状況を平板実測。その後１層掘り下げ開始。28日、１層石器取り上げ。29日、１層遺物出土状況写真撮影。SD １検出。31日、土坑、ピット確認。

【平成13年６月】

２日、出土土器の取り上げ。４日、清掃、遺物出土状況写真撮影、実測。遺構検出。５日、遺構検出状況の写真撮影。６日、溝完掘、完掘状況、遺物出土状況撮影。７日、ピット群完掘、実測。SD10と SK14の掘り下げ開始。SD10は、SD １に切られていることが判明。また、SD89は SD10に切られている。11日、SD10の土層断面図作成。14日、清掃、土層断面図実測、調査区など完掘状況撮影。調査器材撤収。

第２次調査

【平成16年６月】

22日、調査区内の伐採を行う。23日、表土剥ぎ開始。調査区を段ごとに、北からそれぞれⅠ区、Ⅱａ区、Ⅱｂ区、Ⅲ区とする。試掘調査報告などから、機械による表土剥ぎは１層上面まで行うこととする。24日、プレハブ、倉庫、簡易トイレ設置。電設工事。25日、内装工事及び備品搬入。30日、電話線引き込み工事。

【平成16年７月】

１日、表土剥ぎ終了。２日、配電作業。プレハブに電気が通る。５日、作業員初出勤。作業員への調査の説明後、まず現場周囲の安全管理などを行う。６日、調査区全体の清掃。その後、Ⅲ区の１層掘り下げを開始する。７日、４級基準点及びメッシュ杭設置作業開始。12日、４級基準点及びメッシュ杭設置完了。Ⅱｂ区の１層掘り下げ開始。14日、Ⅱａ区の１層掘り下げ開始。Ⅱａ、Ⅱｂ区では、遺物の出土量が多くなる。

15日、Ⅰ区の１層掘り下げ開始。21日、Ⅰ区の遺構検出作業を開始。ピットらしきものをいくつか確認。22日、あさぎり町教育委員会の北川氏来訪。23日、Ⅱａ区の遺構検出作業を開始。１層からは、縄文後・晩期土器、石鏃、中世土師器、須恵器など異なる時代の遺物が出土することなどから、１層は流れ込みの包含層であると判断する。27日、県文化課の水野参事、米村氏、村中氏来訪。28日、調査区南側の薮を伐採。中球磨地域を広く眺望できるようになる。球磨地域振興局土木部工務課の高野氏来訪。30日、台風養生を行う。

【平成16年８月】

２日、台風後の清掃を行う。今回の台風は大した風雨ではなく、現場などに被害はなかった。３日、Ⅱａ区で溝（S001）を確認。24日、土坑を確認。県文化課の吉田課長補佐、西住係長来訪。25日、球磨地域振興局土木部工務課の園田氏来訪。このほか、地元の方数名が見学に訪れる。27日、Ⅲ区の精査、遺構検出を開始。午後から台風16号の接近に伴い、台風養生を行う。30日、台風16号が人吉市内を直撃。猛烈な暴風雨に襲われる。深田地区を流れる球磨川はあと１ｍで決壊というところまで水位が上昇する。31日、現場自体には台風による被害はなかったが、台風後の清掃に１日を費やす。８月は天候不良で作業が順調に進んだとはいえなかった。

【平成16年９月】

１日、Ⅲ区で道路状遺構（S004）を確認。古代～中世のものと思われる。６日、台風18号が人吉・球磨地方を直撃。16号よりさらに強い暴風と雨に襲われる。待機していた宿の看板も暴風で飛んでいってしまった。球磨川には決壊警報が出される。７日、台風養生のおかげもあって、現場は被害を受けていなかった。しかし、台風の暴風で飛来したゴミや木の葉の掃除、倒れた木の撤去などに１日を費やすこととなった。９日、遺物の出土状況の実測図作成を開始。10日、Ⅲ区で新たに硬化面、集石（４号集石）を確認。13日、県文化課の髙木課長補佐来訪。15日、Ⅲ区で土師器焼成土坑（S008）を確認。22日、Ⅲ区道路状遺構（S004）の写真撮影。27日、玉名市教育委員会の荒木氏来訪。28日、台風21号接近のため、台風養生を行う。29日、３度目の台風直撃。猛烈な暴風雨に襲われるが、18号に比べるとやや勢いが弱い。30日、昨日の暴風雨がうそのように晴れ晴れとした天気の中、台風後の後片づけなどを行う。午後から遺物の点上げを開始する。今年度は８、９月に大型台風が３つも直撃したが、現場には大きな被害はなかった。９月も天候があまりよくなく、作業が進まなかった。

【平成16年10月】

４日、Ⅲ区土師器焼成土坑（S008）の実測図作成を開始。５日、Ⅱｂ区の精査、遺構検出作業を開始。Ⅱｂ区で道路状遺構（S011）を確認。13日、この道路状遺構に側溝があることを確認。また、その横に別の硬化面（S012）を確認。18日、台風23号に備え、台風養生を行う。19、20日、４つ目の台風23号接近。しかし、台風の勢力が弱かったため、風雨とも比較的穏やかであった。22日、排土置き場を拡張する。球磨地域振興局土木部工務課の園田氏来訪。28日、県文化課の倉岡課長補佐、前川課長補佐、西住係長、廣田参事来訪。10月も天候不良の日が多かった。

【平成16年11月】

４日、Ⅱｂ区の道路状遺構（S011）の下に、方形のプランを確認。５日、Ⅱａ区の精査、遺構検出作業を開始。９日、Ⅰ区の精査、遺構検出作業開始。15日、Ⅰ区でピットなどの掘り下げ開始。16日、Ⅱｂ区の道路状遺構写真撮影。24日、遺構実測委託業務について、株式会社九州文化財研究所（以下、九文研）の正岡氏、大坂氏と現地協議。29日、遺構実測委託作業開始。道路状遺構実測（S011）。30日、Ⅱｂ区集石実測。

【平成16年12月】

１日、12月から新たに来てくれることになった若手作業員二人で実測班を組織。九文研の実測と併行して実測作業を開始。２日、Ⅱｂ区の道路状遺構の下で確認していた方形プランが、竪穴式住居跡（S013）で

あることを確認。３日、住居の西側に土坑を２基確認。６日、住居や土坑のさらに西側に南北にのびる溝を確認。住居は竈などはなく、中央に炉があるタイプである。あさぎり町教育委員会の北川氏来訪。７日、住居の床面まで掘り下げ完了。炉跡の周囲に柱穴があるタイプで、主柱穴は４本と思われる。また、床面直上から出土した土師器や、周囲遺跡の住居跡の状況から、古代の竪穴式住居跡と判断する。９日、球磨地域振興局土木部工務課の高野氏、木村氏、及び球磨工業高校の生徒２名来訪。高校生の研修の一環で工事と文化財の在り方についての説明のために見学に来たとのことである。14日、２区を区切っていた中央ベルトの土層断面図作成。その後、中央ベルト部分掘り下げ。15日、空撮準備。16日、空中写真撮影。17日、中判カメラによる調査区全景撮影。20日、２層の掘り下げ、遺構検出開始。新たに集石（10号集石）を確認。27日、午後から道具の整理、事務所及び調査区周辺の大掃除。年内の作業終了。

【平成17年１月】

７日、作業再開。調査区全区で清掃作業を行う。11日、九文研による調査区地形測量開始。13日、竪穴式住居跡完掘状況撮影。20日、事業主である球磨地域振興局土木部工務課より、発掘調査終了から工事着工までの間に、人が入ってきても事故など起きないように、ピットやトレンチは埋め戻しておいてほしいとの要請があったため、調査が終了した箇所からピットなどの埋め戻しを開始する。21日、旧深田村村長の前原氏来訪。非常に興味深く見学された。31日、２層の掘り下げがほぼ終了したが、新たに遺構を検出したのはⅢ区の集石数基（11～15号集石）のみであった。

【平成17年２月】

２日、球磨地域振興局土木部工務課の園田氏と現地で現場の引渡しについて協議。危険防止のため、ピットなどの埋め戻しと現場の周囲に立入禁止などの標識を設置してほしいとの要請を受ける。７日、作業員による作業最終日、調査器材、遺物などの搬出。記念撮影。８日、レンタル備品の搬出。器材倉庫、簡易トイレの撤収。９日、プレハブ撤収。10日、実測作業終了。これをもって、無事に調査終了。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

熊本県は九州のほぼ中央にあり、県の東側は九州山地の山岳地帯である。小枝遺跡は熊本県の南東部に位置し、九州山地に囲まれた人吉盆地に所在する。

人吉盆地は東西にのび、この盆地の中央部を南北に二分するように、日本３大急流のひとつである球磨川が東西に貫流している。そして、球磨川の北側と南側には広大な台地が形成されている。本遺跡の所在する球磨郡あさぎり町深田（旧深田村）は地質分帯上、南西日本外帯に属し、およそ一億年前の白亜系四万十層の分布する四万十帯内に位置する。また、人吉盆地は断層角盆地といわれ、盆地北側では未固結堆積物及び火砕流堆積物からなる小起伏丘陵地が発達し、南側では段丘が広大な分布を示すという地形的特徴な差異が認められる。特に南東側では複合扇状地帯が発達し、段丘堆積物によって形成されている。段丘堆積物の下には加久藤・阿蘇・入戸の各火砕流堆積が分布する。これらの火砕流は直接地表面を覆い、広範囲にシラス及び加久藤火砕流が分布する。

小枝遺跡は球磨川の北岸、標高140～150mほどの丘陵上に位置している。人吉盆地の中央部である中球磨に位置しており、調査現場からは人吉盆地を眺望することができる。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

人吉・球磨地方の旧石器時代の遺跡は今日までに53か所が確認されている。分布の中心は人吉市周辺であるが、近年あさぎり町でも発見されている。あさぎり町深田の下里遺跡（８）ではナイフ形石器文化以前の石器が発見されている。また、あさぎり町須恵では中尾遺跡（23）からナイフ形石器・三稜尖頭器が、別府遺跡（22）から細石核が、沖松遺跡（20）からはナイフ形石器が出土している。さらに、多良木町里城遺跡（55）では細石器文化のものが発見されている。

縄文時代

小枝遺跡では早期・後期・晩期の遺物が出土している。あさぎり町内の他の縄文時代遺跡もほとんどがこの３時期のいずれかに該当する。

早期の遺跡は、灰塚遺跡（15）、堂園遺跡（21）、中尾遺跡（23）、浜ノ上遺跡（27）、馬渡遺跡（31）、諏訪原遺跡（33）、柿ノ木遺跡（34）などの遺跡が知られている。

確実に前期、中期に属する遺跡は、現在では確認されていない。ただ、小春遺跡（32）、堂園遺跡、諏訪原遺跡、馬場遺跡、別府遺跡などで中期の遺物が検出されている。このような様相は、人吉・球磨地方の縄文時代の特徴として挙げることができる。

後期から晩期にかけて遺跡数は増加し、その規模も大きくなる。沖松遺跡、堂園遺跡、柿ノ木遺跡、諏訪原遺跡、小春遺跡、馬場遺跡などが該当する。特に沖松遺跡では晩期になっても集落は継続し、埋甕のほかに天城式・古閑式・黒川式などの型式の土器が大量に出土している。晩期に属する遺跡としては、柿ノ木遺跡、諏訪原遺跡、小春遺跡、馬場遺跡、別府遺跡などがある。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、上手遺跡（19）、中島遺跡（24）、柿ノ木遺跡、諏訪原遺跡、別府遺跡、沖松遺跡がある。柿ノ木遺跡では、中期の黒髪式土器と後期の免田式土器や石包丁が見つかっている。免田式土器

第１図　小枝遺跡周辺の遺跡

第１表　小枝遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	備考	番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	新深田遺跡	あさぎり町 深田 新深田	古墳	地下式板石積石室墓	34	柿ノ木遺跡	あさぎり町 須恵 柿の木	縄文、弥生	
2	天子山遺跡	あさぎり町 深田 草津山	弥生	石包丁、弥生土器	35	古城遺跡	あさぎり町 須恵 古城	縄文	
3	内山万福寺跡	あさぎり町 深田 内山	中世	池跡、参道跡をとどめる	36	上築地遺跡	あさぎり町 免田 築地権現	弥生	弥生土器、石鏃、石包丁
4	内山遺跡	あさぎり町 深田 内山	旧石器、縄文	石器、石鏃	37	鬼の釜古墳	あさぎり町 免田 久鹿萩原	古墳	横穴式石室　刳り抜き玄門
5	深田城跡	あさぎり町 深田 城	中世		38	古屋敷遺跡	あさぎり町 免田 竹下	古代～中世	湖州鏡、土師器、滑石鍋
6	**小枝遺跡**	**あさぎり町 深田 小枝**	**縄文、古代～中世**		39	廻り迫蔵骨器出土地	あさぎり町 免田 神の田	古代	須恵器、蔵骨器
7	下里横穴群	あさぎり町 深田 下里	古墳		40	廻り迫遺跡	あさぎり町 免田 神の田	縄文	縄文土器、石鏃
8	下里遺跡	あさぎり町 深田 下里	旧石器、縄文	石錘、縄文晩期土器	41	市房隠遺跡	あさぎり町 免田 馬立原	弥生	弥生土器
9	オンバガサコ遺跡	あさぎり町 深田 萩尾	旧石器、中世	須恵器	42	上久鹿遺跡	あさぎり町 免田 久鹿	古代	土師器
10	赤坂窯跡	あさぎり町 深田 赤坂	古代	須恵器、羽口	43	前田遺跡	あさぎり町 免田 前田	古代	布目軒平瓦
11	高山城跡	あさぎり町 深田 高山	中世		44	宝塚古墳	あさぎり町 免田 久保	古墳	
12	前平遺跡	あさぎり町 深田 前平	縄文	縄文土器、石器	45	黒田墓誌銅板出土地	あさぎり町 免田 平城	古代	銅板１枚
13	永峰横穴群	あさぎり町 深田 永峰	古墳		46	才園古墳群	あさぎり町 免田 畑中	古墳	出土品は国の重要文化財
14	高山瓦窯跡	あさぎり町 深田 高山	中世	平瓦、軒平瓦	47	本目遺跡	あさぎり町 免田 本目	弥生～古墳	弥生後期～古墳前期集落
15	灰塚遺跡	あさぎり町 深田 灰塚	縄文、古代～中世	縄文土器、石器、土師器、陶磁器	48	井上遺跡	あさぎり町 上 井上	縄文～弥生	縄文土器、弥生土器
16	勝福寺古塔碑群	あさぎり町 深田 荒茂	中世		49	石坂古墳	あさぎり町 上 石坂	古墳	消滅
17	荒茂横穴群	あさぎり町 深田 荒茂	古墳		50	永山遺跡	あさぎり町 上 永山	古墳	縄文土器、弥生土器、石包丁
18	石坂横穴群	あさぎり町 須恵 石坂	古墳	馬具、須恵器	51	伊勢尾蔵骨器出土地	あさぎり町 上 上の原	古代	蔵骨器１
19	上手遺跡	あさぎり町 須恵 上手	弥生		52	上の原窯跡	あさぎり町 上 上の原	古代	須恵器窯
20	沖松遺跡	あさぎり町 須恵 沖松	縄文、古墳～古代	縄文土器、土師器、須恵器	53	福留古墳	あさぎり町 岡原 福留	古墳	古墳、鉄剣
21	堂園遺跡	あさぎり町 須恵 堂園	縄文、古墳～古代	縄文土器	54	宇土谷蔵骨器出土地	あさぎり町 岡原 宮原	古代	有肩打製石斧
22	別府遺跡	あさぎり町 須恵 別府	旧、縄、古墳～中世	石器、縄文土器、土師器、須恵器	55	里城遺跡	多良木町 多良木 里城	旧石器、縄文	
23	中尾遺跡	あさぎり町 須恵 中尾	旧石器、縄文	石器、土器	56	青蓮寺阿弥陀堂	多良木町 黒肥地 北山下	中世	国指定重要文化財
24	中島遺跡	あさぎり町 須恵 中島	弥生		57	蓮花寺・相良頼景館跡	多良木町 黒肥地	中世	
25	屯所遺跡	あさぎり町 須恵 屯所	古代		58	青銅製経筒	多良木町 中央公民館	古代	
26	浜ノ上横穴群	あさぎり町 須恵 浜ノ上	古墳		59	赤坂古墳	多良木町 上赤坂	古墳	刀、馬具
27	浜ノ上遺跡	あさぎり町 須恵 浜ノ上	縄文	縄文土器、石器	60	木上益手遺跡	錦町 木上 益手	縄文	縄文早期、塞ノ神式
28	毛谷遺跡	あさぎり町 須恵 毛谷	縄文		61	大原天子遺跡	錦町 大原・天子	縄文	縄文土器、土師器、須恵器
29	京塚遺跡	あさぎり町 須恵 京塚	縄文		62	竜口横穴群	錦町 木上 龍口	古墳	
30	八日遺跡	あさぎり町 須恵 八日	縄文		63	夏女遺跡	錦町 高原	弥生～古墳	集落、鏡、銅剣
31	馬渡遺跡	あさぎり町 須恵 馬渡	縄文		64	荒田横穴群	錦町 木上 荒田	古墳	道路改修で消滅
32	小春遺跡	あさぎり町 須恵 小春	縄文		65	岩城横穴群	錦町 木上 岩城	古墳	
33	諏訪原遺跡	あさぎり町 須恵 諏訪原	縄文、弥生	縄文土器、弥生土器、石器	66	四塚古墳群	錦町 木上 三つ塚	古墳	円墳４基

は沖松遺跡や上手遺跡でも出土しており、この地域で多く出土するものである。また、別府遺跡では、シカをかたどった線刻がある石製品（石包丁か？）が見つかっている。

このほか、夏女遺跡（63）は集落遺跡として有名であるし、大原天子遺跡（61）では、人吉・球磨地方で最も古い弥生土器である亀ノ甲式土器が見つかっている。本目遺跡（47）では、後期終末の木棺墓や墳丘墓が調査され、周辺で多量に採集されていた免田式土器がこれらに供献された土器であることが確かめられている。

古墳時代

沖松遺跡では５世紀代と６世紀代の集落跡が検出されており、堂園遺跡でもこの時期の竪穴式住居跡が１軒検出されている。

人吉・球磨地方では、大型の古墳は錦町やあさぎり町免田など中球磨地域に集中しており、小枝遺跡周辺から眺望することができる。錦町の亀塚古墳群には前方後円墳が３基あり、これは熊本県内最南端の前方後円墳として研究者に注目されている。また四塚古墳群（66）は人吉・球磨地方では最も規模が大きな円墳群である。才園古墳群（46）の２号墳からは、直刀などの武具や馬具類、鉄製の工具類、鍍金した画文帯求心式神獣鏡、玉類、金環などの豊富で豪華な副葬品が出土しており、これらは一括して国の重要文化財となっている。また、鬼の釜古墳（37）は、巨石を使った刳り抜き玄門に特徴がある。

横穴は石坂横穴群（18）と浜ノ上横穴群（26）がある。石坂横穴群では直刀１本と鉄鏃７本、馬具一式が発見されている。浜ノ上横穴群からは、６世紀後半代の須恵器高坏が出土している。また、人吉・球磨地方では装飾のある横穴もあり、人吉市大村横穴群、錦町京ヶ峰横穴群などが著名である。

新深田遺跡（１）では、南九州の特徴的な墓の形態である地下式板石積石室墓が検出されており、この種の墓は多良木町大久保台地や本目遺跡などでも検出されている。

この時期の土器や遺構には、南九州の特徴をもったものが多く存在する。それゆえ、球磨地域は南九州との交流がより深かったと考えられる。

歴史時代

歴史時代の遺跡としては、灰塚遺跡、堂園遺跡、沖松遺跡や別府遺跡がある。灰塚遺跡では掘立柱建物跡、輸入陶磁器や湖州鏡を供献した墓などが検出されている。堂園遺跡では移動式竈や10世紀代の越州窯系青磁や緑釉陶器片、土師器を供献した墓が検出されている。沖松遺跡や別府遺跡では掘立柱建物跡が検出されている。

この時代に登場する相良氏関係の遺跡として、伝相良頼景館跡と蓮花寺跡（57）がある。また、上相良氏ゆかりの寺である青蓮寺（56）は国の重要文化財となっている。

なお、灰塚遺跡については、古代末から中世前半期の当地方の豪族である須恵氏の居館跡とも推定されている。また、この中球磨地域には経済的な基盤となりうる生産遺跡などが存在している。例えば、須恵器や瓦の窯跡である上の原窯跡（52）、高山瓦窯跡（14）、錦町下り山窯跡などがある。さらに、古代の郡衙比定地として、前田遺跡（43）がある。

このようなことから、中球磨地域は古代から中世においても人吉・球磨地方の中心地域であったと考えられる。

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

本調査は１層より上位にある表土、客土部分まで重機を用いて剥ぎ取り、作業員によって遺構確認作業を行った。その後、確認した遺構ごとに掘り下げ、遺構の検出、実測図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影を行った。遺構確認が困難な場合は、必要に応じてサブトレンチを設定し、遺構検出に努めた。なお、遺物は基本的にグリッド一括での取り上げとし、必要に応じて光波測距儀を使用した個別取り上げを行った。

調査におけるすべての基準となる４級基準点設置及びメッシュ杭設置は業者に委託した。その際、測量士有資格者の常駐作業、検定合格の機械使用などの条件を付け、より精度の高いものとなるようにした。４級基準点は調査区の周囲に４か所設置した。メッシュ杭は平面直角座標にのせ、５ｍ単位となるようにした。この５ｍ四方の区画をひとつのグリッドとし、調査の基準とした。グリッドは、南北方向を北から順にＡ～Ｓで、東西方向を西から順に１～８で表し、各グリッドはこの組合せで表すこととした（例：Ｒ３グリッド）。なお、座標は世界測地系（日本測地系2000）に基づくものである。

遺構実測、地形測量（コンタ入れ）などは業者に委託した。これらの作業は、基本的に手測り、あるいは光波測距儀を使用して測点し、方眼紙に手書きで実測して図化するという方法をとった。その際、図化が終了し次第、調査員が現地で図面を検証し、修正が必要な場合は修正を加え、より精度の高い実測図となるようにした。また必要に応じて、メッシュ杭及びグリッドを基準として、調査員が手測りによる実測も行った。

写真撮影はそれぞれの調査段階において、適時モノクロとカラースライドの２種類を用いて行った。また、随時デジタルカメラによるメモ写真撮影を行った。

第２節　層序

本遺跡の基本的な層序は、以下の通りである。

表土：現地表面。

客土：茶褐色土。昭和40年代以前に畑を造成した時の客土。

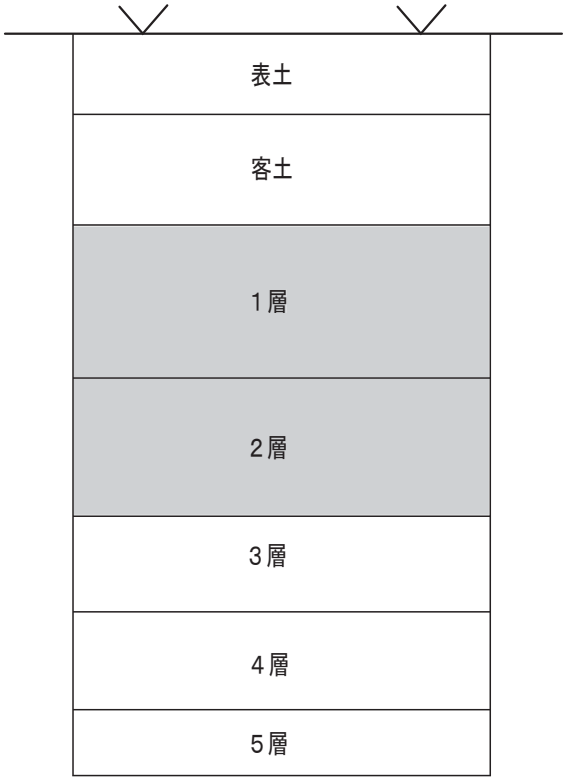
１層：黒色土。流れ込みの包含層。縄文～中世の遺物を含む。

２層：黄褐色土。アカホヤの２次堆積層。縄文後・晩期の遺構、遺物を含む。

３層：暗褐色土。縄文早期・前期の層に相当。遺構、遺物なし。

４層：シラス、火砕流堆積物。遺構、遺物なし。

５層：黄褐色ローム。遺構、遺構なし。



第２図　基本土層模式図

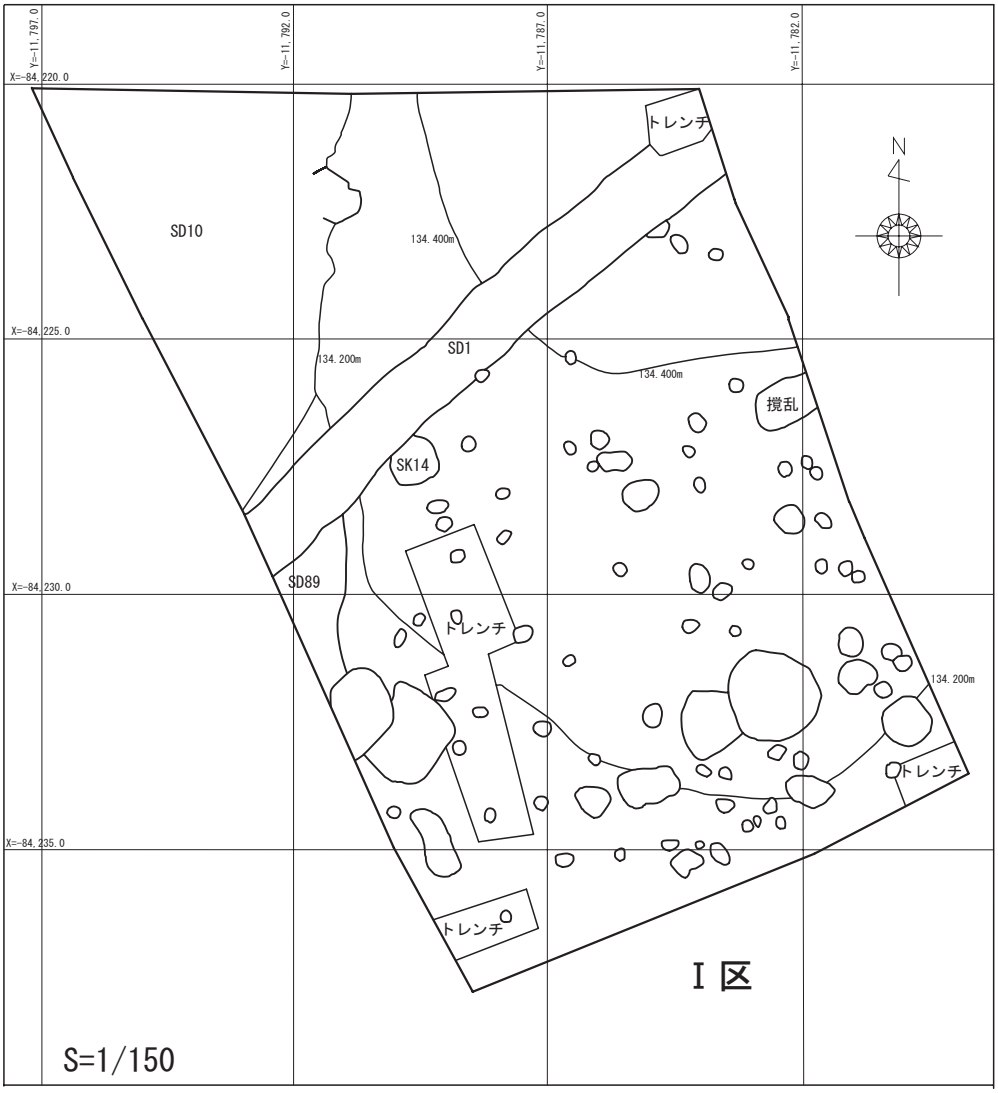
第３節　調査の成果

Ⅰ　遺構

１．第１次調査

第１次調査の調査面積は750㎡である。調査対象地にはもともと深田駐在所が建っており、地形は平坦に造成されていた。これが撤去された後にトレンチ調査による試掘・確認調査を行い、遺物包含層と遺構検出面までの層の堆積状況などを確認した。本調査では試掘・確認調査の結果を基に、表土剥ぎおよび人力による掘り下げを行った。遺構検出面まで掘り下げた後に旧地形をみてみると、ほぼ平坦であるが南西に向かって緩やかに傾斜していた。調査区の約50m南には球磨川が東から西に流れており、旧地形の緩やかな傾斜はこの球磨川に向かっての傾斜であると思われる。

遺構は、縄文時代と古代から中世にかけてのものであった。主な遺構としては溝が３本（SD10、SD89、SD １）と土坑が１基（SK14）である。このほか多くのピットを検出したが、柱痕が確認できたものはなく、また規則的に並ぶようなものも確認できなかった。また遺構の多くは古代、中世のものであったが、遺構検出面より上面の遺物包含層からは縄文時代の遺物も多く出土した。遺物出土量が大量で、縄文時代、古代、中世など様々な時代の遺物が含まれていることから、この遺物包含層は流れ込みのようであり、周辺に縄文時代、古代、中世の遺跡の存在を意識させるものであった。



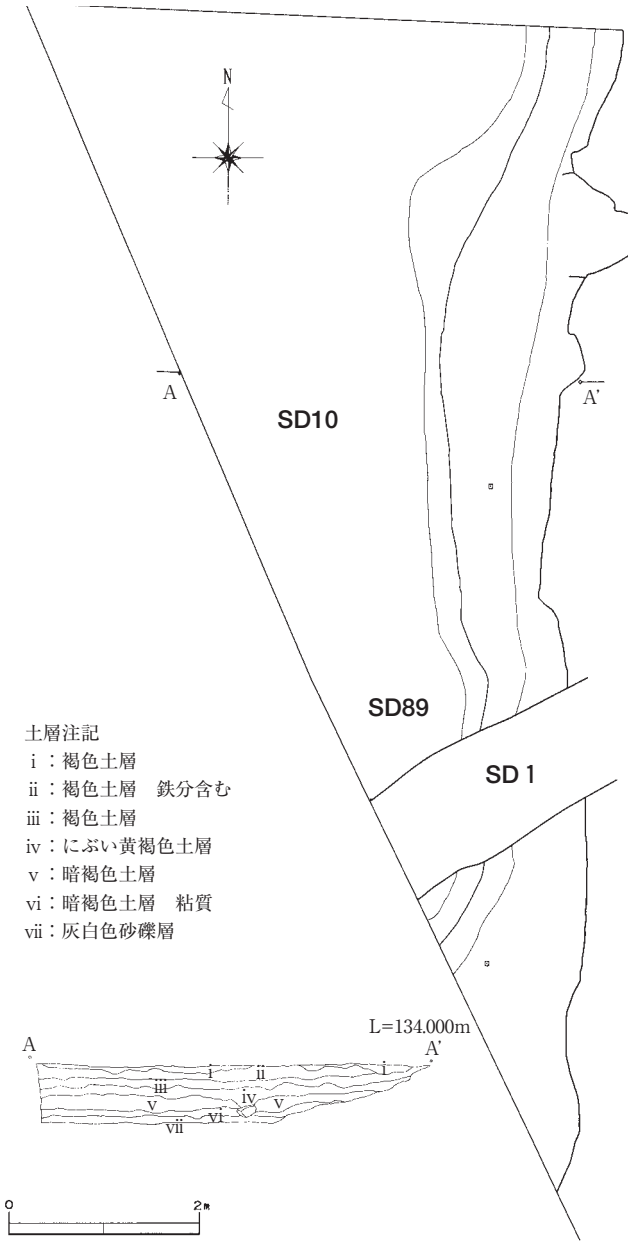
第３図　第１次調査遺構配置図

SD10、SD89（第４図）

SD10は南北方向に、SD89は北北東から南南西方向にほぼ直線的に延びる溝状遺構である。SD10は広いところで幅５ｍ以上、SD89は幅３ｍ以上あるが、調査区の外側にまで広がるため正確な幅の長さは不明である。切り合い関係を見ると、SD89が先行してあったものをSD10が切っており、さらにそれをSD １が切っている状況である。この状況は出土遺物からも裏付けられる。SD10、SD89ともに壁はかなり緩やかな傾斜であり、Ｖ字溝のように急ではない。SD10の断面を見ると、この溝の土層は７層に分層でき、時間をかけて緩やかに堆積したようである。SD89からは縄文土器が１点のみ出土しており、縄文時代の遺構と考えることができる。これを切っているSD10からは縄文土器と古代の土師器が出土しており、古代以降に埋まったものと考えられる。

SK14（第５図）

SK14は長径、短径ともほぼ２ｍの円形の土坑である。土坑は北西の一部をSD １に切られている。壁はやや急角度で立ち上がり、底面は平坦である。この土坑の覆土は分層することができない単一の土層である。このため、この土坑は一気に埋まった、あるいは埋められたもの



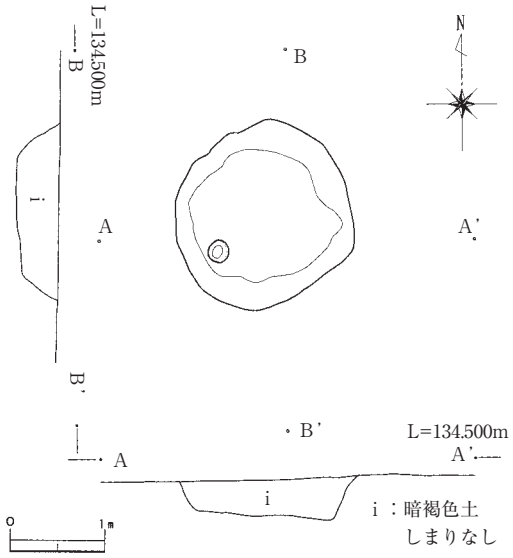
第４図　SD10、SD89実測図

と考えられる。

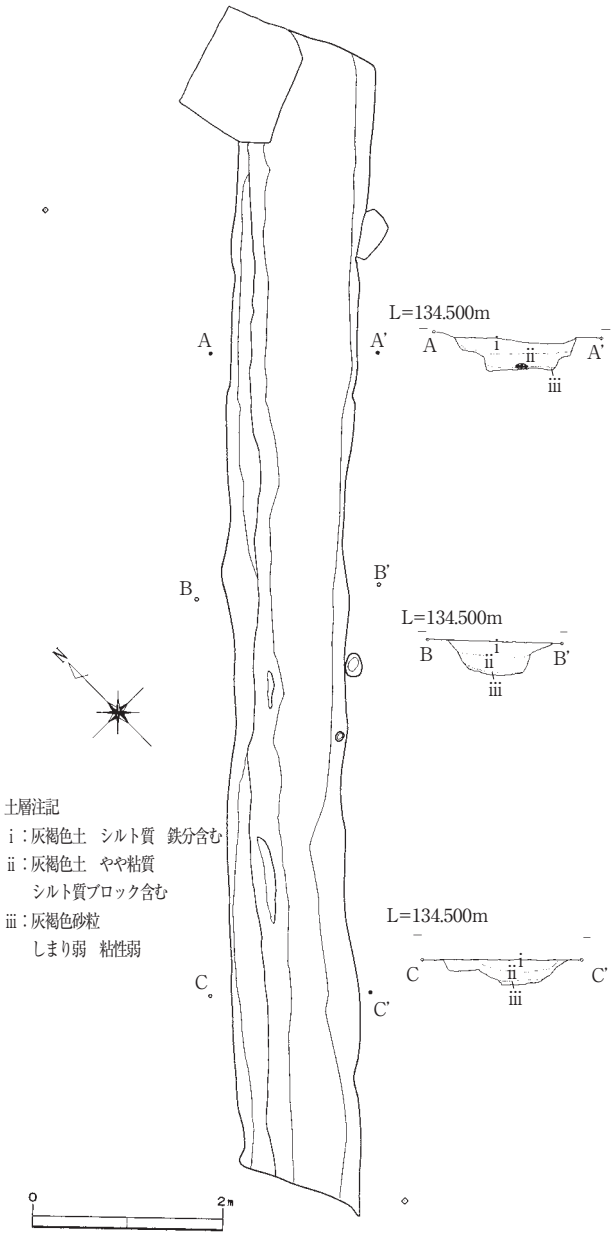
また、SK14からは土坑の南西部分の床に置かれたような状態でほぼ完形の土師器坏が１点出土した。正位でいかにも“置いた”ような状況であった。このような土師器坏の出土状況から、この土器は意図的に置かれたものと判断できる。

土坑の形状、一気に埋められた土層の状況、意図的に置かれた遺物の状況から、土坑墓の可能性もある。しかし、調査中に人骨や歯などは検出されなかった。

土師器坏は底部に糸切り痕があるタイプであり、中世の初頭ごろのものである。遺構の時期も、これと同時期でよいだろう。



第５図　SK14実測図



第６図　SD１実測図

SD１（第６図）

SD１は北東から南西方向にほぼ直線的に延びる溝状遺構である。幅はおよそ1.4mである。断面を見ると、壁は緩やかに傾斜しており、２段の段が付くような壁の形状になっている。これは溝状遺構の掘り方に関係しているものと考えられる。この溝状遺構の構築方法は、まず比較的浅く広い溝を掘り（上段）、その後その溝の中央部分にさらに細い溝（下段）を掘ったものである。特に溝状遺構の北側に、上段と下段の間のやや平坦な面が確認できる。

SD１はSK14を切っているため、SK14よりも新しい時期に構築されたものである。しかし、SK14とSD１の遺物を比較したところ、どちらも形態、調整技法が類似し、回転糸切りによる底部切り離しを行っている土師器坏が出土している。これら土器は時期的にはほとんど差がないものであるため、SK14とSD１もそれほど大きな時期差は無いものと考えられる。

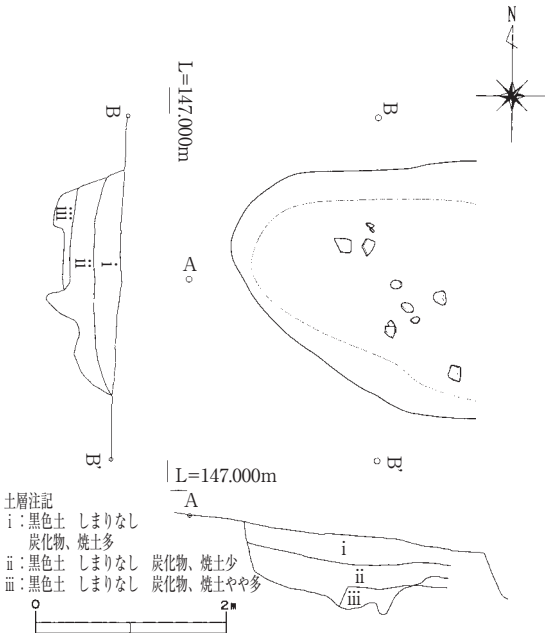
SD10と比較した場合、SD10の遺物は最も新しいものは古代の土師器である。この土器はまだ回転糸切りによる底部切り離しという技法が使用される前のものであるため、SD10とSD １とには明らかな時期差が存在する。土層の堆積状況などからも、SD １はSD10が埋まった後に構築されたものと考えられる。

２．第２次調査

第２次調査の調査面積は、2,000㎡である。調査地は、竹や雑草の生い茂る薮であったが、昭和40年ごろに造成し、段々畑として使用したそうである。これを裏付けるように表土下の客土層からは昭和40年代の10円玉が出土した。この段はⅠ区とⅡ区、Ⅱ区とⅢ区の境にあり、これをもって調査区を分けた。試掘・確認調査ではトレンチ調査を行い、遺物包含層と遺構検出面までの層の堆積状況などを確認した。本調査では試掘・確認調査の結果を基に、表土剥ぎおよび人力による掘り下げを行った。遺構検出面まで掘り下げた後に旧地形を見てみると、北西から南東に向けて比較的強く傾斜していた。しかし、部分的には傾斜が緩やかになり、平坦面を形成する部分もあり、遺構はそのような平坦な部分に集中していた。

また、１層の遺物包含層からは縄文時代、弥生時代、古代、中世の遺物が出土するため、第１次調査時と同じく流れ込みの遺物包含層と考えられる。本遺跡の西側の丘陵上などから流れ込んだと思われ、やはり近隣にこのような時代の遺跡が存在していたのだろう。

第７図　第２次調査遺構配置図



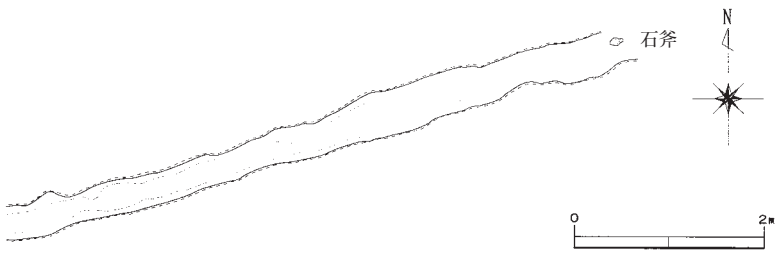
第８図　S015実測図

S015（第８図）

S015はⅡｂ区で検出した弥生時代の土坑である。土坑の東側は古代の竪穴式住居跡（S013）に切られているため、全形をうかがい知ることはできないが、東西に長い楕円形を呈すると思われる。規模は現状で、長径2.6m、短径2.5mである。壁はやや緩やかで、底面は若干でこぼこしている。ｉ層～iii層は焼土や炭化物を含み、特にｉ層には多量の焼土が混じっている。遺物は縄文土器と弥生土器、打製石斧が出土した。

S004（第９図）

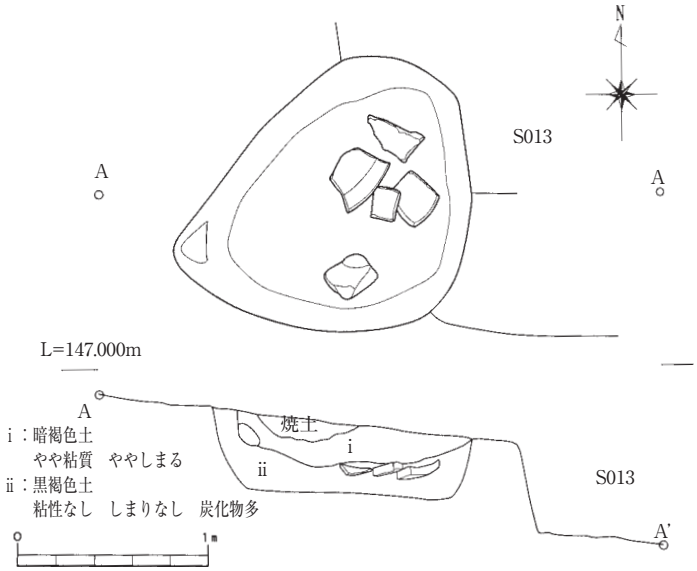
S004はⅢ区で検出した古代の道路状遺構（畦状遺構）である。東北東から西南西に延びており、残存していたのは長さ７ｍほどである。中央がややくぼんでおり、その範囲すべて硬く硬化していた。硬化面を覆っていた覆土は、黒色で非常に軟らかい。遺物は硬化面までの覆土から小破片の古代の土師器と打製石斧が出土した。また、この遺構を掘り下げた際にも、小破片の古代の土師器が出土した。



第９図　S004実測図

S014（第10図）

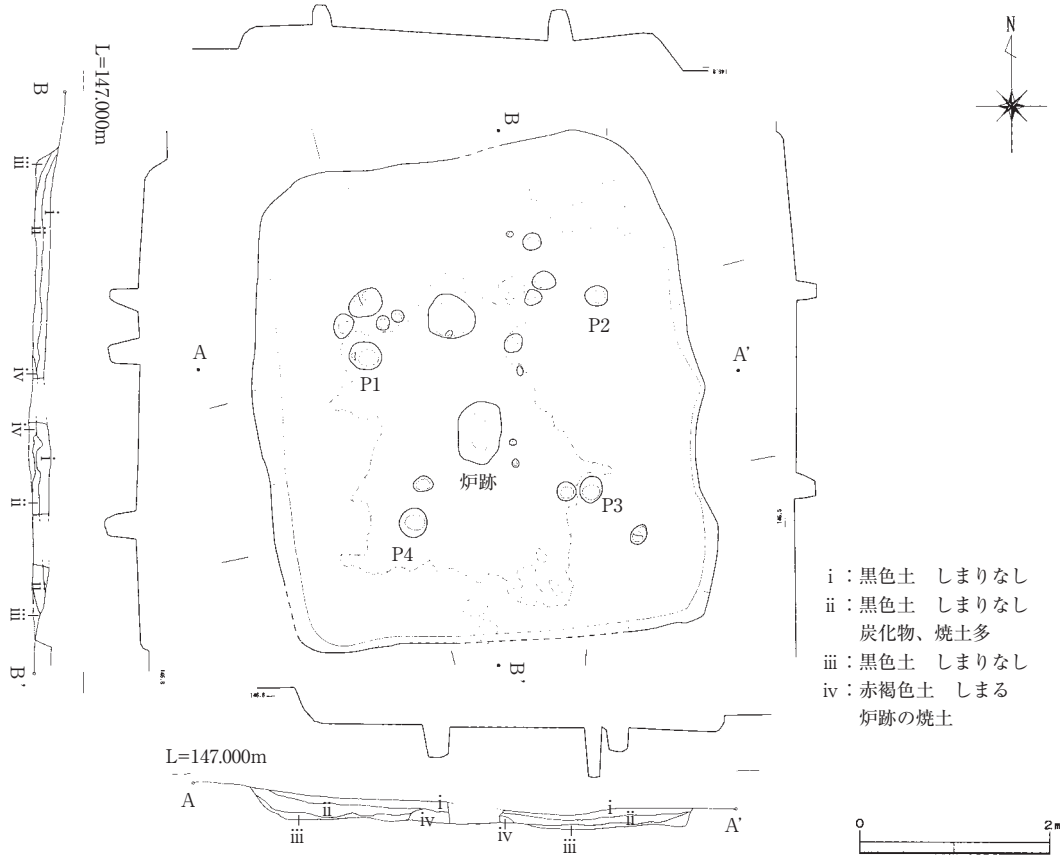
S014はⅡｂ区で検出した古代の土坑である。土坑は東側の竪穴式住居跡を切っている。南側が広い楕円形を呈しており、長径1.3m、短径1.2mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。覆土ｉ層は若干の粘性としまりがある。ii層はしまりが無く、炭化物を多く含む。遺物は須恵器甕の口縁部と平底瓶が出土した。これらは古代から中世初頭にかけてのもので、下り山窯跡の製品と思われる。また S013、S014、S015の遺構の新旧は、S015（弥生）→S013（古代）→S014（古代から中世初頭）となる。



第10図　S014実測図

S013（第11図）

S013はⅡｂ区で検出した古代の竪穴式住居跡である。長辺が5.3m、短辺が4.7mの、方形に近い隅丸長方形を呈する。壁の深さは0.2～0.4mで急角度で立ち上がる。長軸はほぼ南北方向を向く。ピットは19基検出できたが、そのすべてで柱痕は確認できなかった。ピットの中でも、Ｐ１～Ｐ４の４基は大きさ、深さなどから主柱穴であったと考えられる。

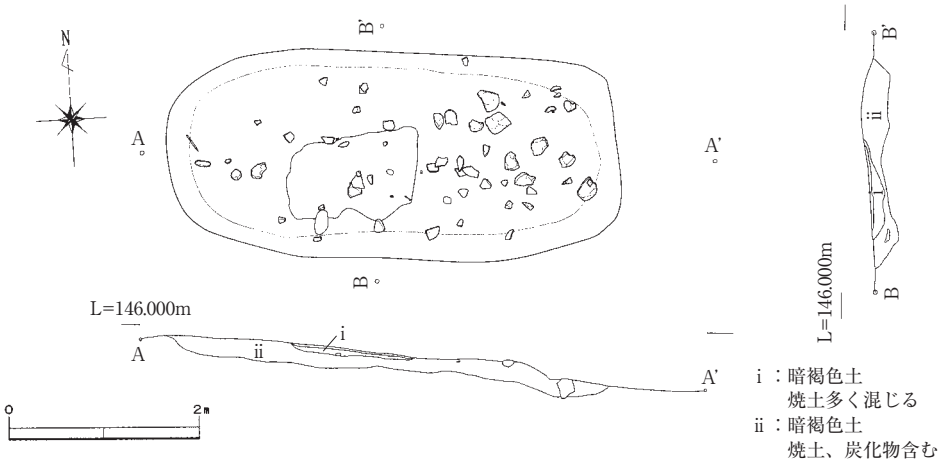


第11図　S013実測図

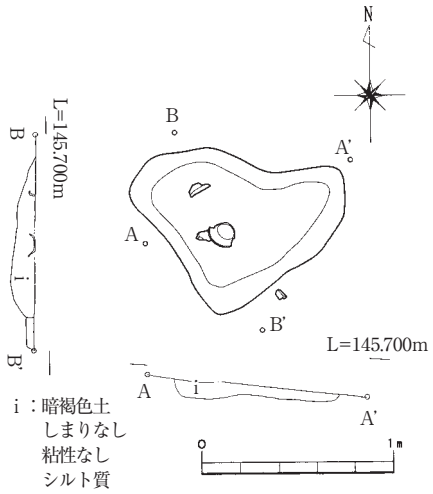
炉は、住居のほぼ中央に位置しており、長径0.7m、短径0.5mの楕円形であった。周囲には焼土、炭化物を多く確認できた。硬化面は炉を中心に広がっていた。この硬化面は、南側の壁に近いところまで広がっているため、南側が住居の出入り口であったとも考えられる。

覆土は３層に分層できた。炭化物、焼土を含む黒色土が主体である。焼土は炉の周囲に集中している。断面では住居が壁際から埋まっている状況が確認できた。柱穴に柱痕が無かったことを含めて考えると、住居を使用しなくなったあとに、柱材はなにかに再利用するため持ち去られ、その後住居跡は自然に埋没していったものと推測できる。

遺物は古代の土師器や凹石が覆土や床面直上で出土したが、縄文土器片も数点出土した。縄文土器片は床面より浮いた状況で出土したため、埋没過程で流れ込んだものと思われる。また、土師器は小破片のものが多いことから、住居使用後に割れて使用できなくなった土器などが一緒に廃棄されたものと考えられる。



第12図　S008実測図



第13図　S017実測図

S008（第12図）

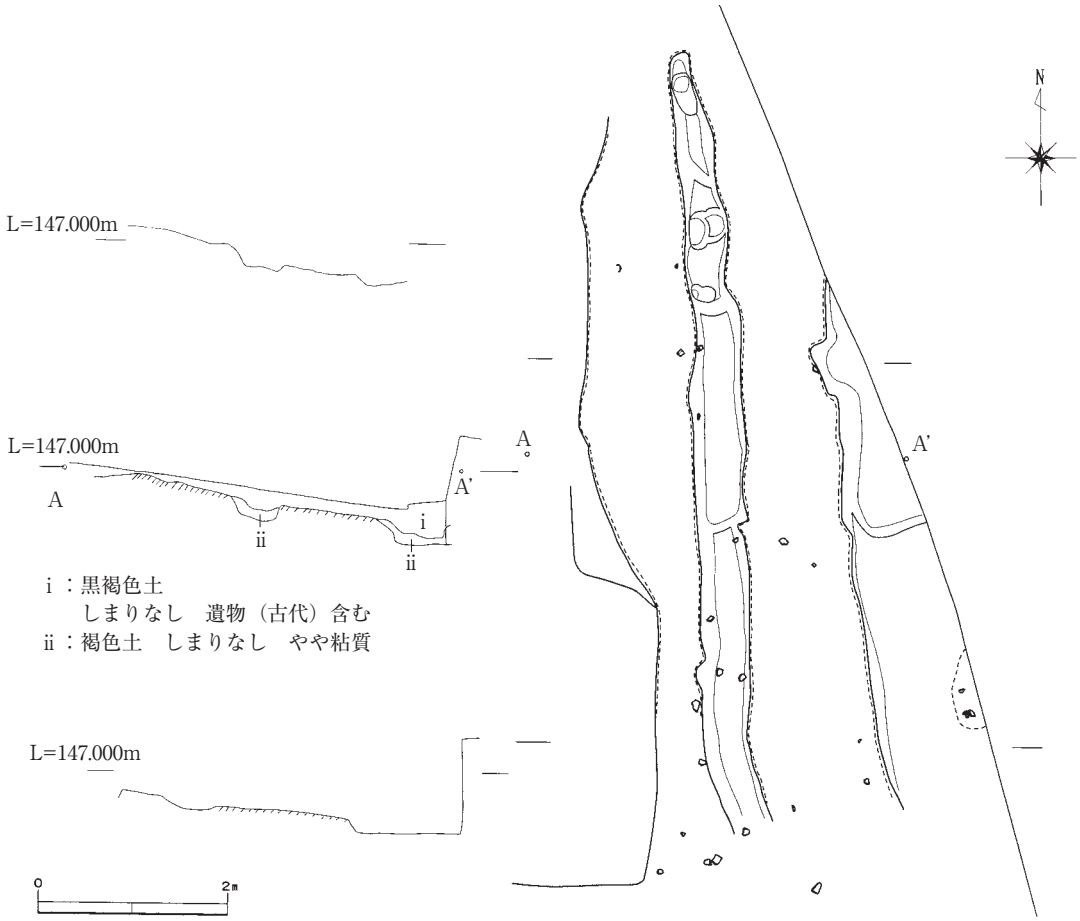
S008はⅢ区の南側で検出した古代の土器焼成土坑である。長径4.8m、短径2.2mの楕円形で、長軸は東西方向である。壁は緩やかに傾斜し、底面はなだらかに東に傾く。覆土は２層に分層でき、焼土、炭化物を非常に多く含む。特にｉ層は炉の焼土のように強く火を受けていた。この周囲や覆土中からは非常に多くの土師器が出土した。遺物はすべて土師器であり、同一の焼成状況で調整などもほぼ同じであった。また、土器自体に焼成時のものと思われる強い火を受けた跡があったことなどから、これらの土師器はこの土坑内で焼成したものと考えられる。

同時期焼成の一括資料として、球磨地方の土師器編年を考える上でも重要な資料となるであろう。

S017（第13図）

S017はⅢ区で検出された土坑である。形は不定形で、東西方向が1.2m、南北方向が0.8mである。壁は非常に緩やかに傾斜し、底面は緩やかな凹凸がある。覆土は分層できず、しまりも粘性もない。その形状から人為的な掘削ではないような感じもする。しかし、土坑内から土師器と須恵器が出土しているため、この土坑はなんらかに使用されたものであろう。

S008とS017は遺物から見るとほぼ同時期のものである。他の遺構と比較すると、S013よりは新しく、S014よりは古い時代の遺構である。

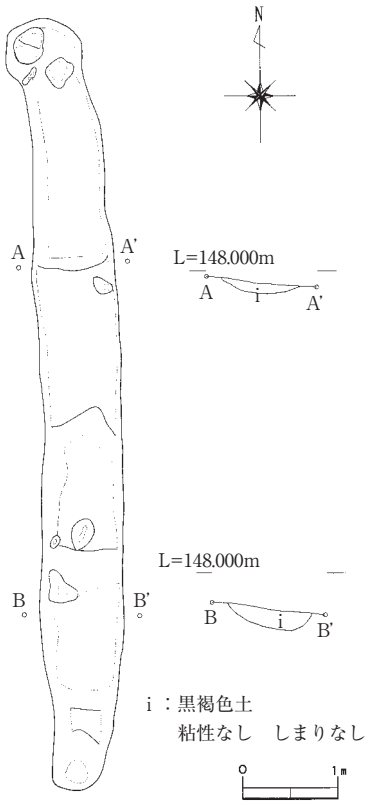


第14図　S011実測図

S011（第14図）

S011はⅡｂ区で検出した、古代の道路状遺構である。軸は南北方向に延びる。道路部分の幅は1.3mで、その両側に深さ0.4mほどの側溝が付随する。側溝が付随することから、畦のような簡易な道路状遺構ではなく、ある程度重要な道路であったと思われる。北側は調査区範囲外まで延びていくようだが、南側は撹乱で切られていた。道路部分の硬化面は非常に硬く硬化しており、この上を直に人が往来していたものと思われる。硬化面の上部に石や砂利を敷きつめたような痕跡はなかった。側溝内の一部分にはピットが確認されたが、不定形で柱痕などもないため、柱穴ではない。

覆土は２層に分かれる。ⅱ層はやや粘性があり、特に分層はしていないがⅱ層の下部は側溝に水が流れ込んだ際に堆積した土のようであった。遺物はｉ層から出土し、いずれも古代の土師器小片であった。また、遺物はS011を掘り下げる際に硬化面の下からも出土した。その時の遺物は古代のものが中心であったが、弥生土器や打製石斧なども出土した。



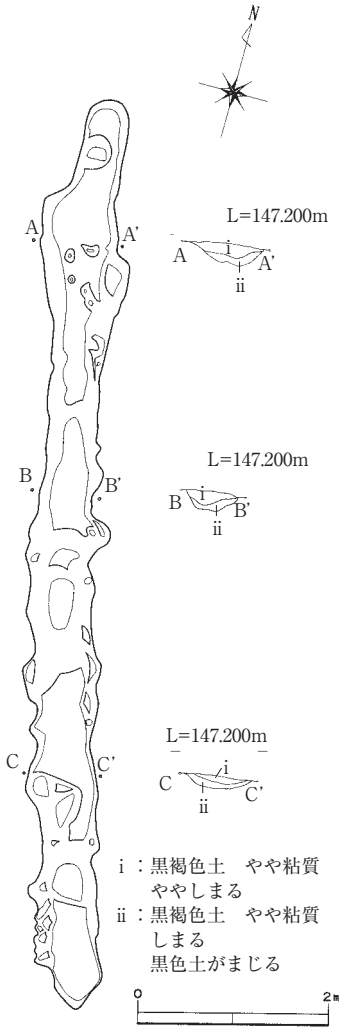
第15図　S001実測図

なお、このS011を掘り下げた後に、S013が確認された。よってS011はS013よりも新しい段階に構築された遺構である。しかし、遺物から見るとS014よりは古いように思われる。

S001（第15図）

S001はⅡａ区で検出した溝状遺構である。長さ8.3m、幅0.8mで長軸は南北方向に延びる。壁は非常に緩やかに傾斜し、長軸の底面は中央に向かって数段の段をつくって深くなる。この段はS001掘削の順序に関係しているものと思われる。すなわち、一度一定の深さで溝を掘り、その後中央部分をさらに深く掘っているのである。しかし、周辺にこの溝に関与する遺構はなく、この溝がどのような役割を果たしていたのかは不明である。

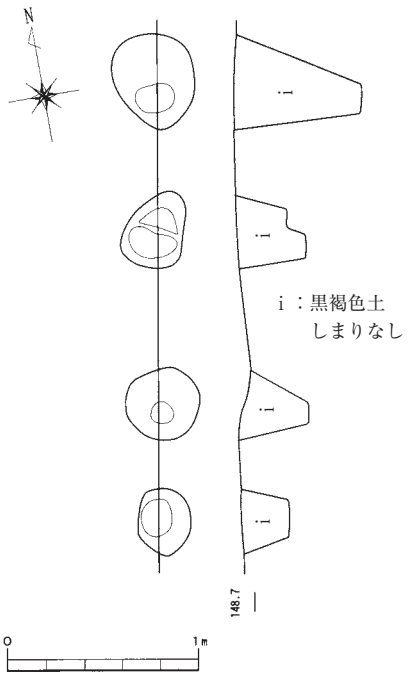
覆土はしまりも粘性もない黒褐色土である。遺物は古代の土師器小片が数点出土した。



第16図　S016実測図

S016（第16図）

S016はⅡｂ区で検出した溝状遺構である。長さ9.8m、幅0.6mで長軸はほぼ南北方向に延びる。壁は緩やかに傾斜している。S001と同じように長軸の底面は中央部が最も深くなっており、掘削方法もS001と同じようである。S016の東側にはS013がある。S016からS013付近は、旧地形が非常に緩やかにではあるが東に傾斜している。S016はS013への水の進入を防ぐための溝であった可能性も考えられる。



第17図　S021実測図

覆土は２層に分層できる。ⅱ層の方がやや混ざったような土である。遺物は古代の土師器小片が数点出土した。

S021（第17図）

S021はⅠ区で検出した柵列状遺構である。ピットが４基ほぼ等間隔に並び、軸はほぼ南北方向に延びる。柱穴間の間隔は、北から0.74m、0.92m、0.6mである。柱穴にはいずれも柱痕は存在しない。覆土はしまりのない黒色土層である。一番北の柱穴から古代土師器の小破片が出土した。

本遺跡の西には深田城が隣接しているため、それに付随する遺構の可能性もあるが、現段階ではわからない。

１号集石（第18図）

Ⅱｂ区で検出した集石遺構である。破砕礫が散乱した状態で検出した。土坑などの掘り込みを持たない。石の散布は３m四方に収まり、その集中度はやや強いといえる。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けた痕跡は認められない。遺物は出土しなかった。

２号集石（第18図）

Ⅱｂ区で検出した集石遺構である。破砕礫が散乱した状態であった。土坑などの掘り込みはない。石の散布は2.5m四方で、集中度は弱い。石の堆積は約25cmである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

３号集石（第18図）

Ⅱｂ区で検出した集石遺構である。土坑などの掘り込みは持たない。石の散布は３m四方に収まり、その集中度はやや強い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けていない。遺物は出土しなかった。

４号集石（第18図）

Ⅲ区で検出した集石遺構である。土坑などの掘り込みを持たない。石の散布は2.5m四方に収まり、その集中度は強い。石の堆積は30cmほどである。火を受けた痕跡は認められない。遺物は出土しなかった。

５号集石（第18図）

Ⅲ区で検出した集石遺構である。土坑などの掘り込みを持たない。石の散布は1.5m四方に収まり、集中度は強い。石の堆積は25cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

６号集石（第19図）

Ⅲ区で検出した集石遺構である。土坑などの掘り込みを持たず、石の散布は２m四方に収まる、集中度の強いものである。石の堆積は30cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

７号集石（第19図）

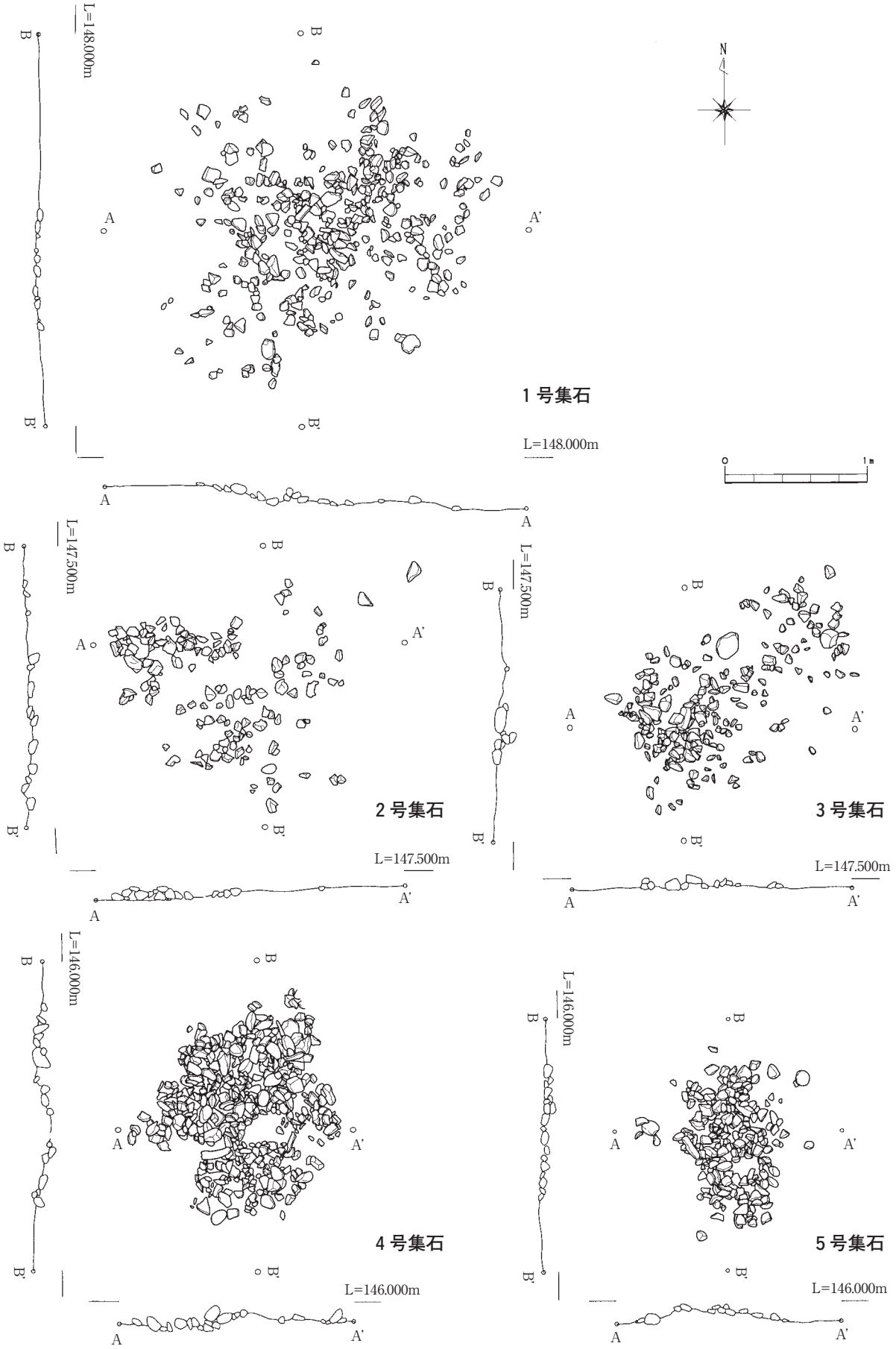
Ⅱｂ区で検出した集石遺構である。破砕礫が散乱した状態で、土坑などの掘り込みはない。石の散布は３m四方と広く、集中度は弱い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

８号集石（第19図）

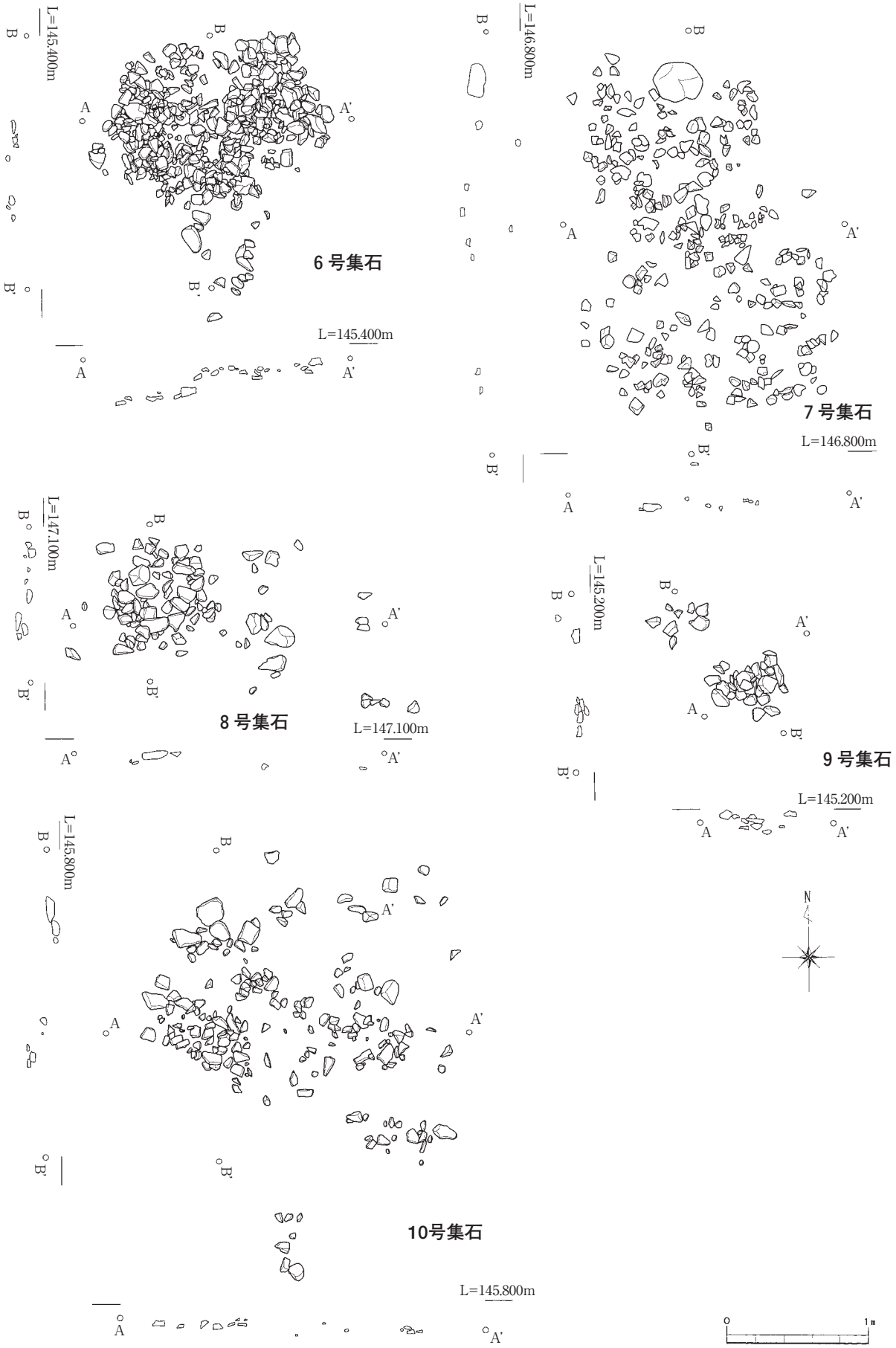
Ⅱｂ区で検出した集石遺構である。土坑などの掘り込みはない。石の散布は２m四方に収まり、その集中度はやや強いといえる。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

９号集石（第19図）

Ⅲ区で検出した集石遺構である。土坑などの掘り込みを持たないタイプである。石の散布は１m四方に収


N
1 号集石
L=148.000m
2 号集石
L=147.500m
3 号集石
L=147.500m
4 号集石
L=146.000m
5 号集石
L=146.000m
A
A'
B
B'
1m

第18図　集石実測図（1）


6 号集石
L=145.400m
7 号集石
L=146.800m
8 号集石
L=147.100m
9 号集石
L=145.200m
10号集石
L=145.800m
N
0
1m

第19図　集石実測図（２）

まり、その集中度は強い。石の堆積は40cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

10号集石（第19図）

Ⅲ区で検出した集石遺構である。破砕礫が散乱した状態で検出した。土坑などの掘り込みはない。石の散布は３m四方に収まり、その集中度は弱い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

11号集石（第20図）

Ⅲ区で検出された集石遺構である。土坑などの掘り込みを持たない。石の散布は１m四方で、その集中度は弱い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

12号集石（第20図）

Ⅲ区で検出された集石遺構である。土坑などの掘り込みはない。石の散布は１m四方に収まり、その集中度はやや強い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

13号集石（第20図）

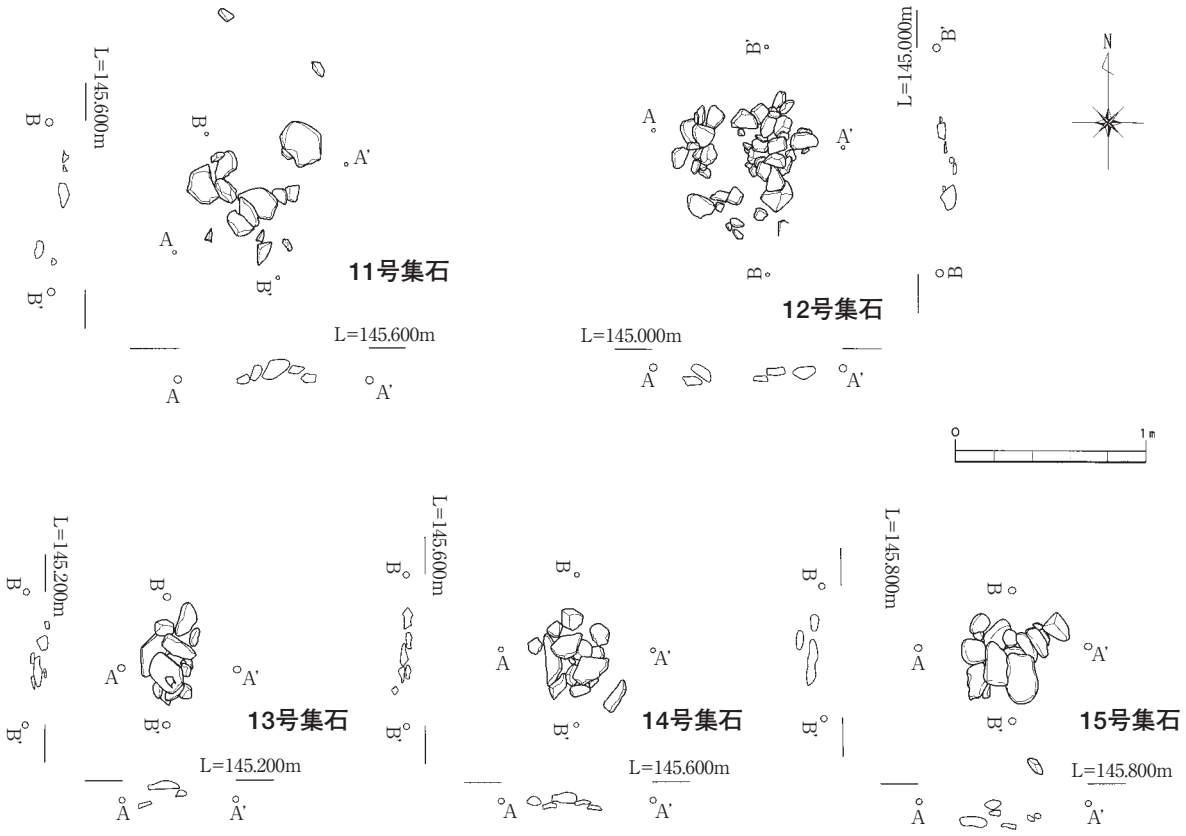
Ⅲ区で検出された集石遺構である。土坑などの掘り込みはない。石の散布は１m四方に収まり、その集中度はやや強い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

14号集石（第20図）

Ⅲ区で検出された集石遺構である。土坑などの掘り込みはない。石の散布は１m四方に収まり、その集中度はやや強い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。

15号集石（第20図）

Ⅲ区で検出された集石遺構である。土坑などの掘り込みはない。石の散布は１m四方に収まり、その集中度はやや強い。石の堆積は20cmほどである。石は火を受けておらず、遺物も出土しなかった。



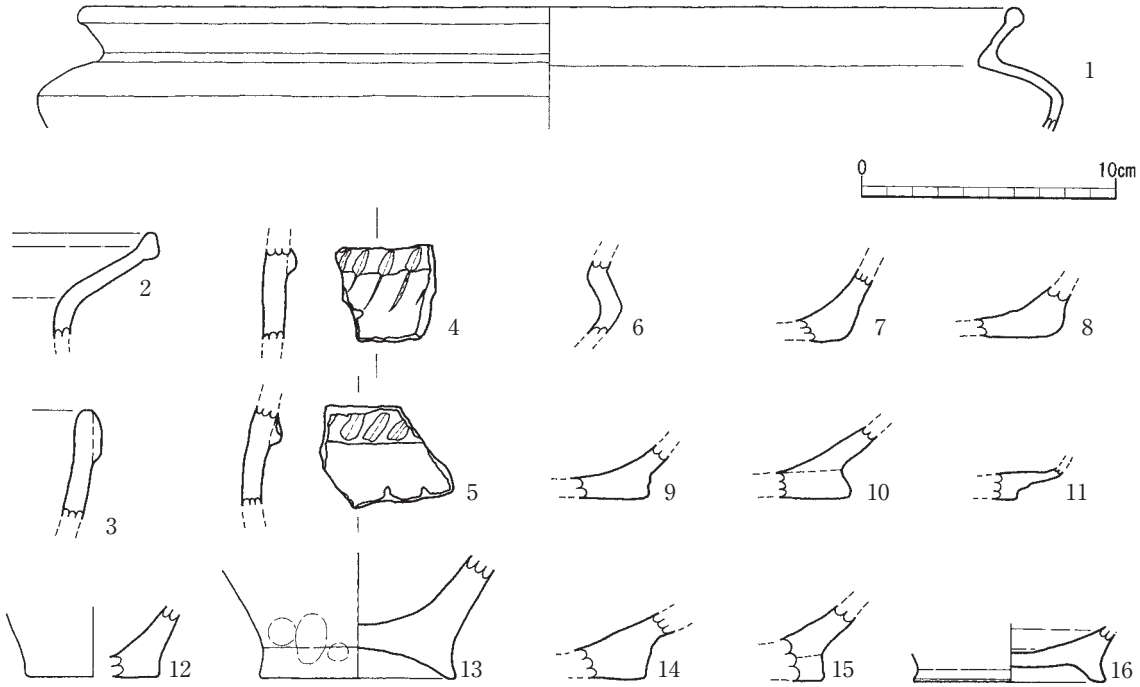
第20図　集石実測図（３）

Ⅱ　遺物

1．第１次調査

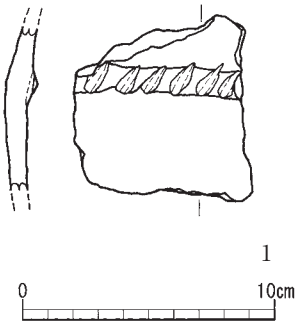
SD10（第21図）

１～10、12、13は縄文土器の深鉢である。１は口径36.8㎝の大型品である。器壁は薄く精緻なつくりである。黒色処理は施されていない。９、10は胎土に多くの砂粒を含んでおり、技法、色調、焼成などから同一時の製作と思われる。14、15は縄文土器の浅鉢である。14は９、10と同じく胎土に多くの砂粒を含んでいる。



第21図　SD10出土遺物実測図

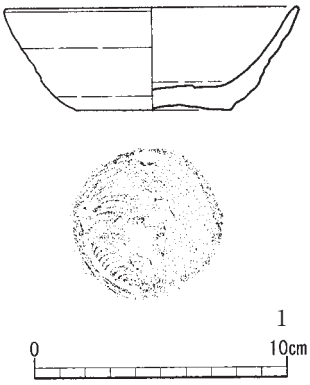
11、16は土師器の坏である。11は摩滅のため焼成などが確認しにくくなっているが、底部は回転ヘラ切り後にナデを施している。16の底部も回転ヘラ切り後にナデが施されており、その後に高台を貼り付けている。



第22図　SD89出土遺物実測図

SD89（第22図）

１は縄文土器の深鉢である。刻み目突帯が付く。外面にはすすが付着している。



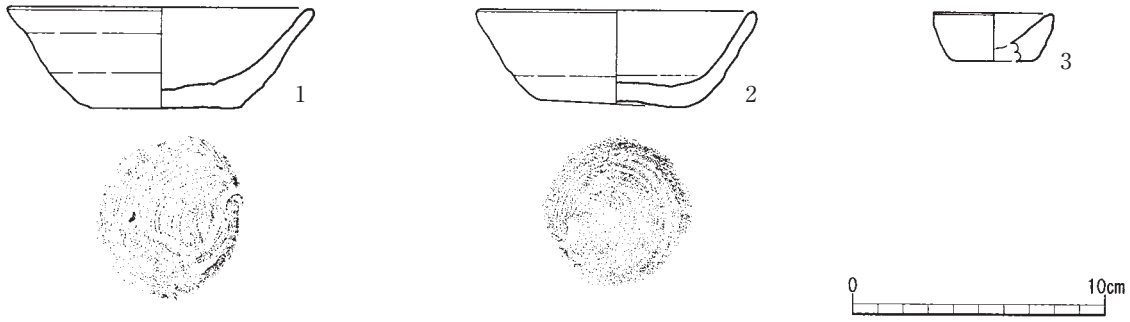
第23図　SK14出土遺物実測図

SK14（第23図）

１は土師器の坏の完形である。口縁部は直行するタイプである。底部は糸切り離し、ロクロは右回りである。

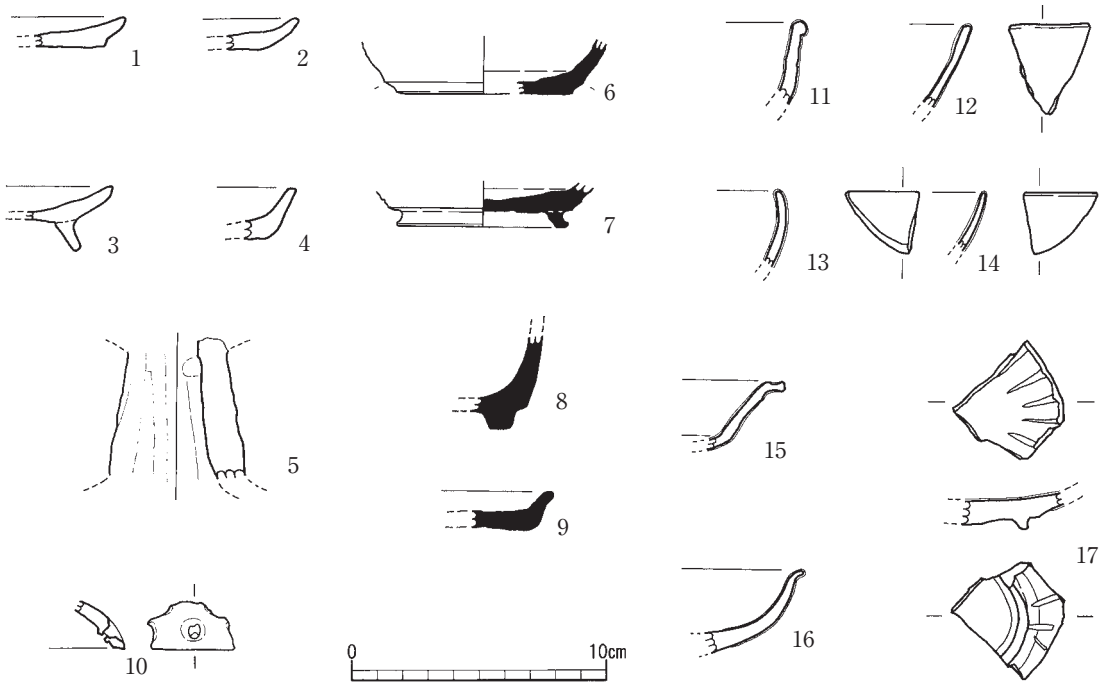
SD１（第24図）

１、２は土師器の坏、３は土師器の皿である。１は口縁が外反するタイプである。底部は糸切り離しで、ロクロは右回りである。２は口縁が直行するタイプである。底部は糸切り離しで、ロクロは右回りである。３は内外面とも摩滅している。調整はナデと思われる。成形はロクロを使用しており、手捏土器ではない。



第24図　SD１出土遺物実測図

遺構外出土土器（第25、26図）　１～４は土師器の皿である。いずれも表面が摩滅している。３は底部を調整した後に高台を貼り付けている。５は土師器の高坏である。脚部は外面は縦方向のケズリ、内面は縦方向の調整が施されている。６～８は須恵器の坏である。６は回転ヘラ切り後にナデている。７は青灰色で、焼成は非常によい。底部は回転ヘラ切り後にナデてから、高台を貼り付けている。内面には仕上げナデが施される。９は須恵器の皿である。10は土師器の香炉蓋である。数か所に外側から穿孔してあり、外面は面取り

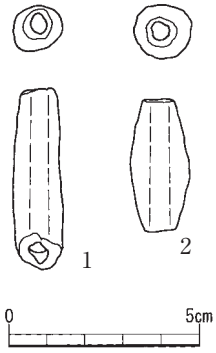


第25図　遺構外出土遺物実測図（１）

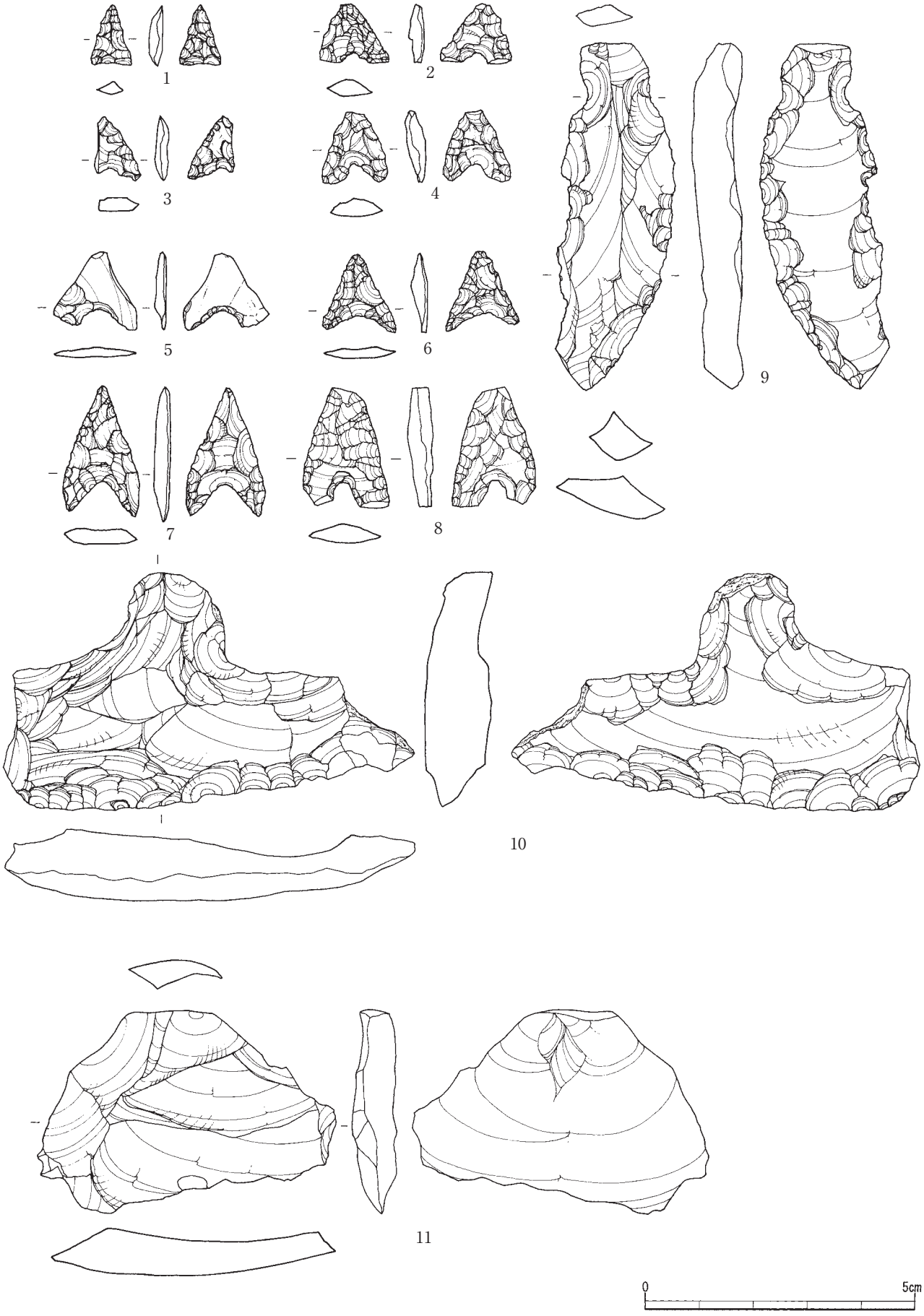
をして整形してある。11～16は陶磁器の椀である。12は龍泉窯系の青磁椀である。14は白磁椀である。17は陶磁器の皿である。第26図１、２は土錘である。１は刺網系、２は袋網系である。

遺構外出土石器（第27～29図）

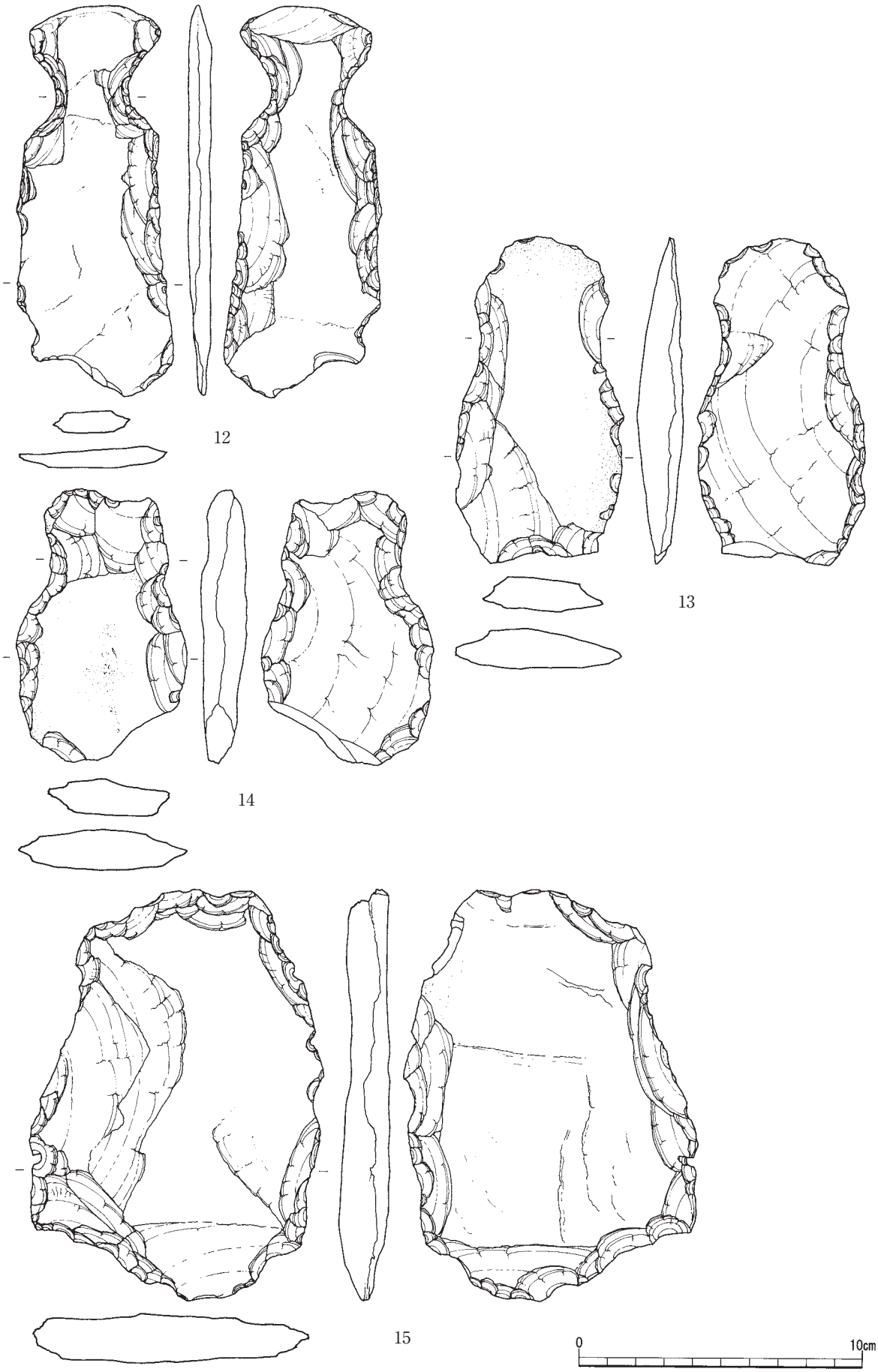
１～８は打製石鏃である。形状は、正三角形状のもの、二等辺三角形状のものの２種類に分類できる。５は刃部の調整が見られないため未製品であろう。９、10は石匙である。11はスクレイパーである。12～16は打製石斧である。これらの打製石斧は、原石材を石斧の大きさに割る過程で、あらかじめ意図する形に沿って数か所に穿孔し、その形のとおりに割れやすくしている痕跡が確認できる。また12のような抉入りの打製石斧は、小枝遺跡で多く出土するタイプである。17は円盤状石器である。



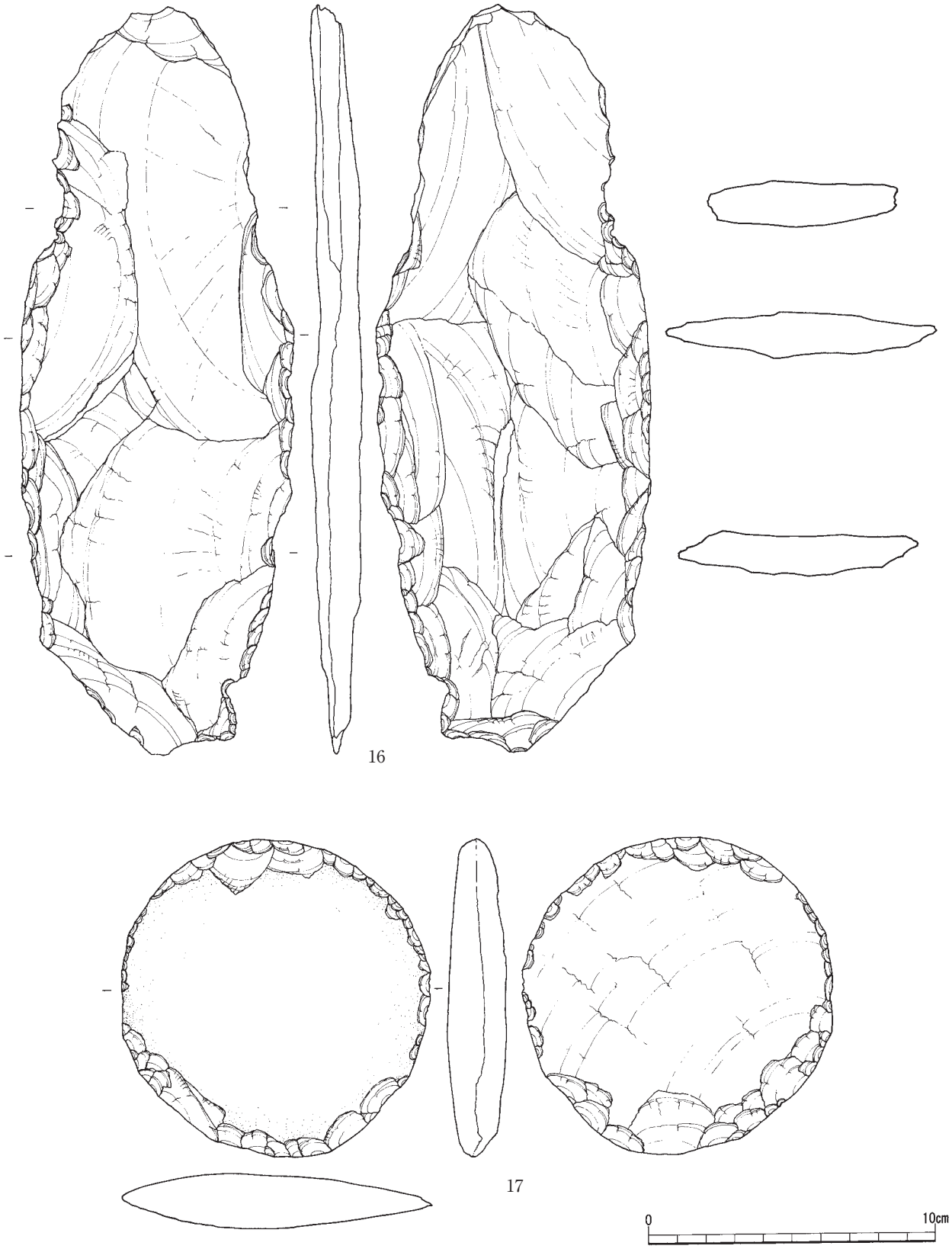
第26図　遺構外出土遺物実測図（２）



第27図　遺構外出土遺物実測図（３）



第28図　遺構外出土遺物実測図（４）

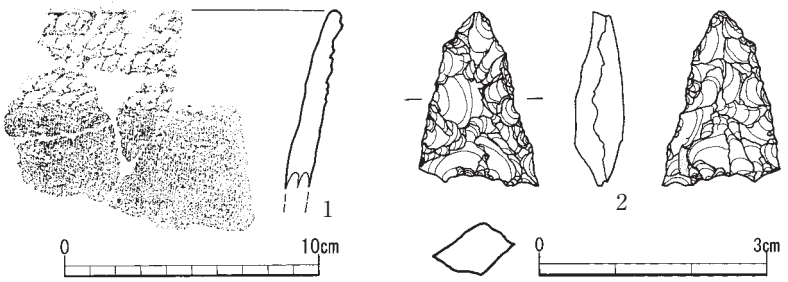


第29図　遺構外出土遺物実測図（５）

2．第２次調査

S009（第30図）

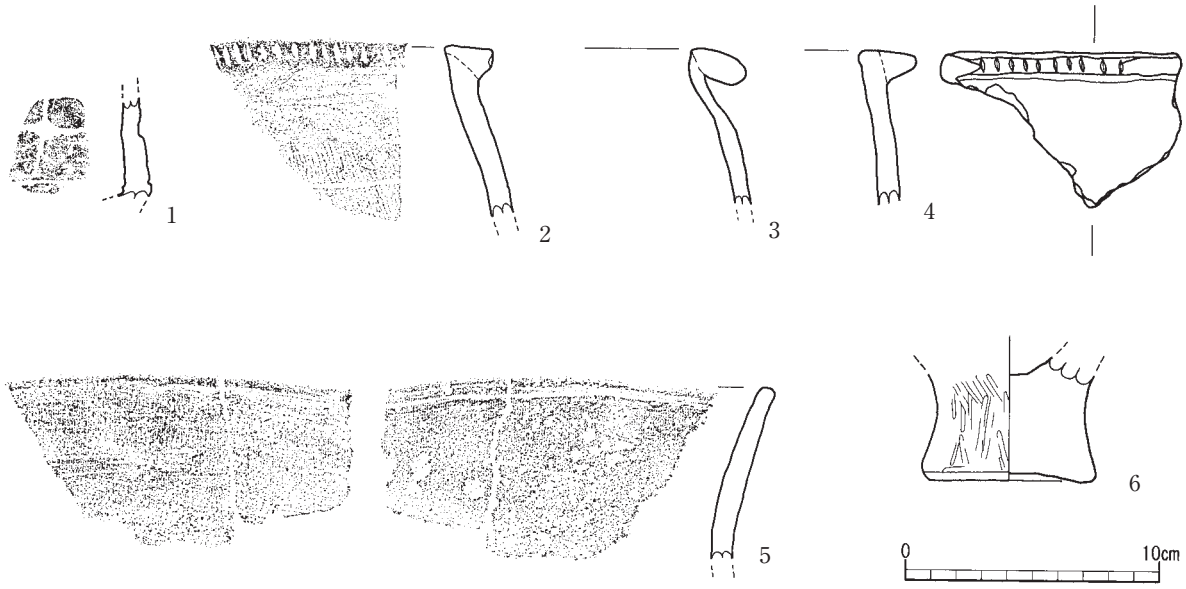
１は縄文土器の深鉢である口径復元はできないが、かなり大型のものである。２は打製石鏃である。



第30図　S009出土遺物実測図

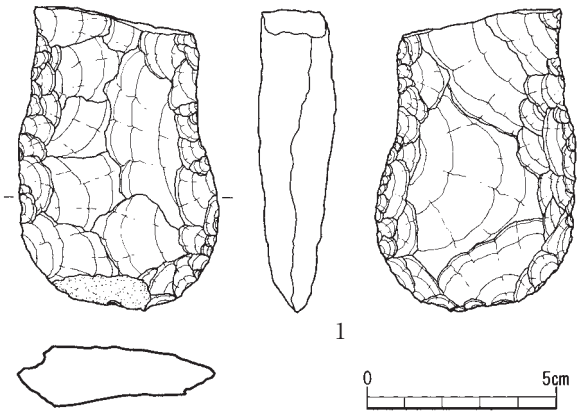
S015（第31、32図）

１、５は縄文土器の深鉢である。１は十字形の文様が施される。内面には黒色処理が施される。５は口縁部内面に螺旋状に沈線１条が巡る。粗製の土器である。２～４、６は弥生土器の甕である。２と４は口縁部に刻み目が施される。２、３



第31図　S015出土遺物実測図

は白色の砂粒を非常に多く含む。また調整、焼成なども非常によく似ている。４は外面にすすが付着する。また、２、３と比べると胎土中の砂粒は少ない。６の外面は底部にまで棒状工具によるミガキが施されている。第32図１は打製石斧である。



第32図　S015出土石斧実測図

S018、S004（第33、34図）

第33図１は打製石鏃で第34図１は打製石斧である。

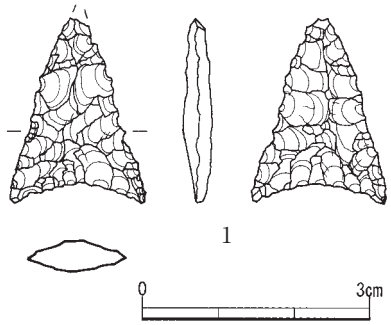
S013（第35図、第36図）

３は土師器の高坏である。脚底部が大きく外に広がるタイプである。外面は縦方向のケズリ後に丁寧なナデ調整が施されている。２は縄文土器の深鉢片である。穿孔は焼成前に外面から行われている。擦れた痕跡がないため、土器片錘としての使用は考えられない。住居が埋もれる段階で混入したのだろう。第36図１は凹石である。

S014（第35図）

１は口径47.5mの大型の須恵器の甕である。口縁部内面に降灰している。胎土はかなりきめ細かい。４は

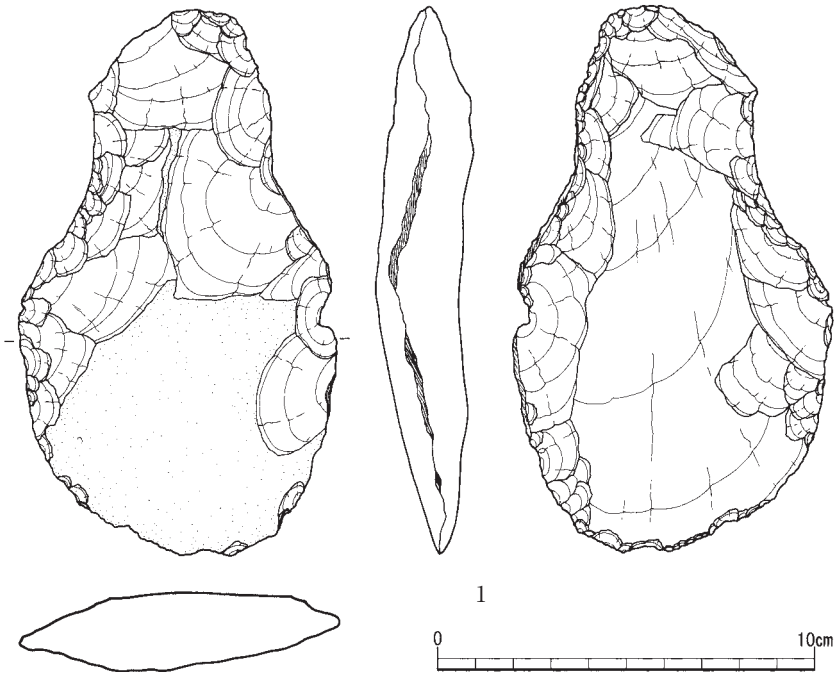
須恵器の平底瓶である。外面は斜め方向にタタキが施されている。また、外面には緑色の自然釉が付着している。内面の当て具痕はきれいにナデ消してある。また、外面頸部付近には「具」あるいは「其」という文字がヘラ書きされている。



第33図　S018出土遺物実測図

S008（第37図）

1～11は土師器の坏である。すべて口縁部分が直行するか、外側にやや外反するタイプである。器壁は薄く精緻なつくりである。底部はすべて回転ヘラ切り後にナデを施している。ロクロはすべて右回りである。5は特にロクロ目がはっきりとしている。7は1点だけ色調が異なり、胎土に赤色砂粒を含むものである。この資料については焼成土坑廃棄時の混入の可能性もある。12～14は土師器の甕である。甕も器壁は薄く、精緻なつくりである。



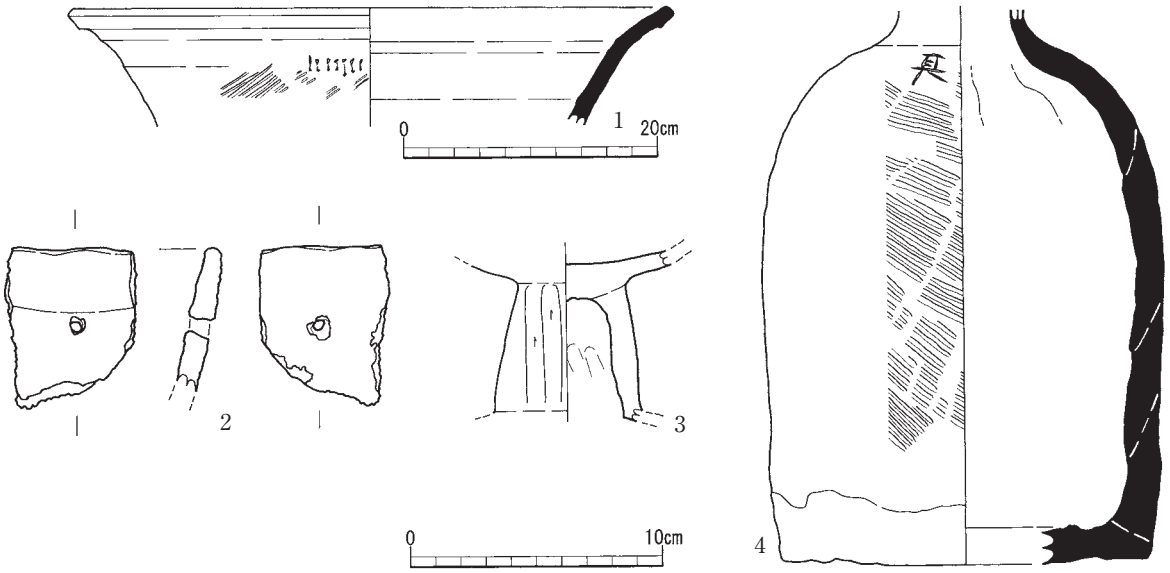
第34図　S004出土遺物実測図

S017（第38図）

1は須恵器の坏である。高台がきれいにはがれている。2は土師器甕で、外面にすすが付着する。

S011（第39図、第40図）

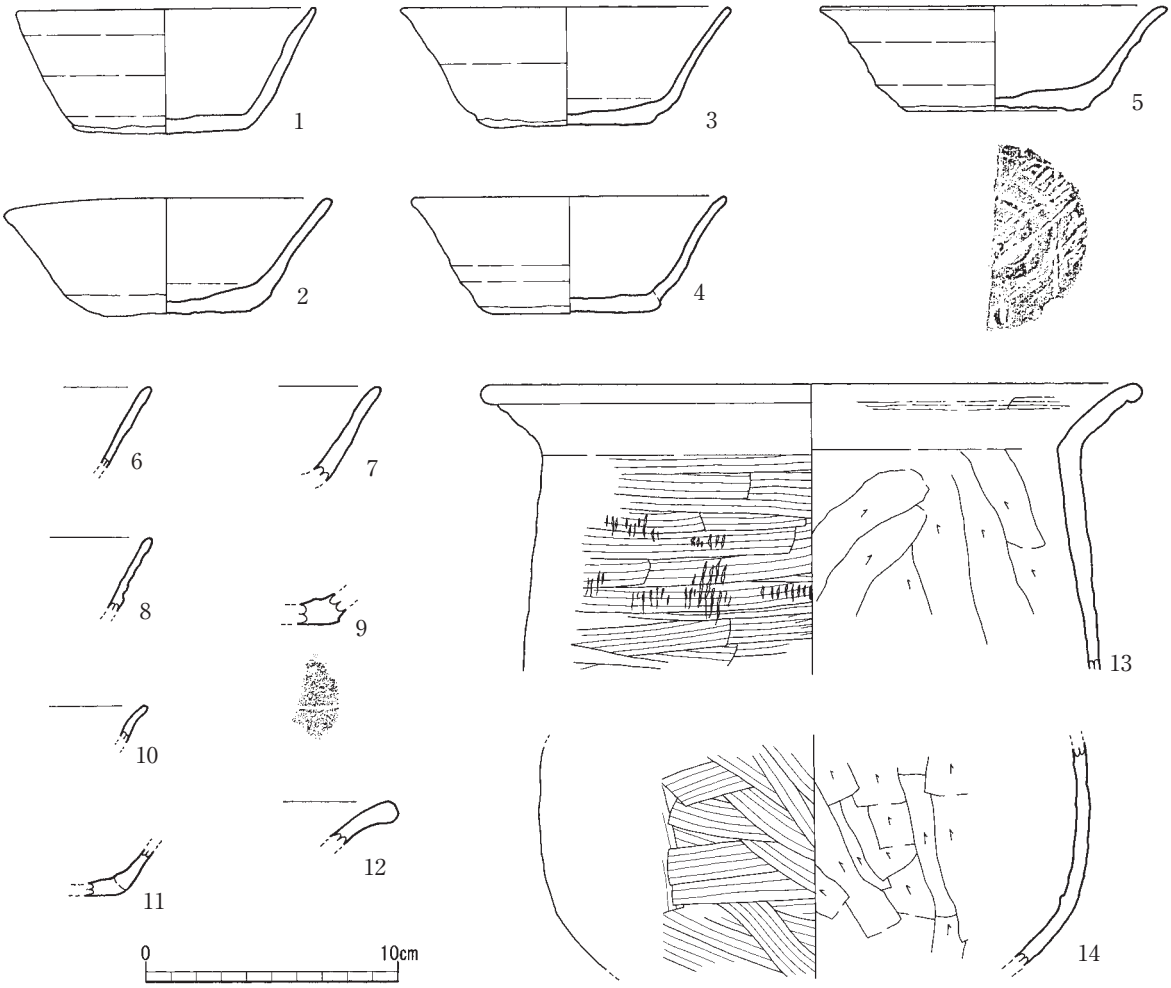
1は弥生土器の甕である。体部に数条の細い突帯が貼り付けられる。口縁部の指頭圧は突帯を貼り付ける



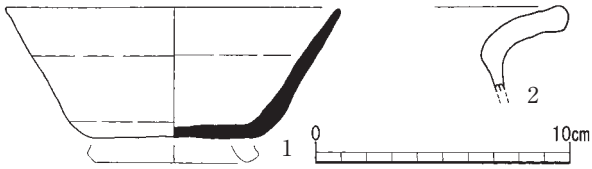
第35図　S013、S014出土遺物実測図

第36図　S013出土遺物実測図

際に押さえつけた痕と思われる。2は縄文土器の深鉢である。3は須恵器の甕である。外面に降灰している。4は土師器の坏である。形態的特徴や調整方法が、S008のものと共通している。5は須恵器の椀である。外



第37図　S008出土遺物実測図

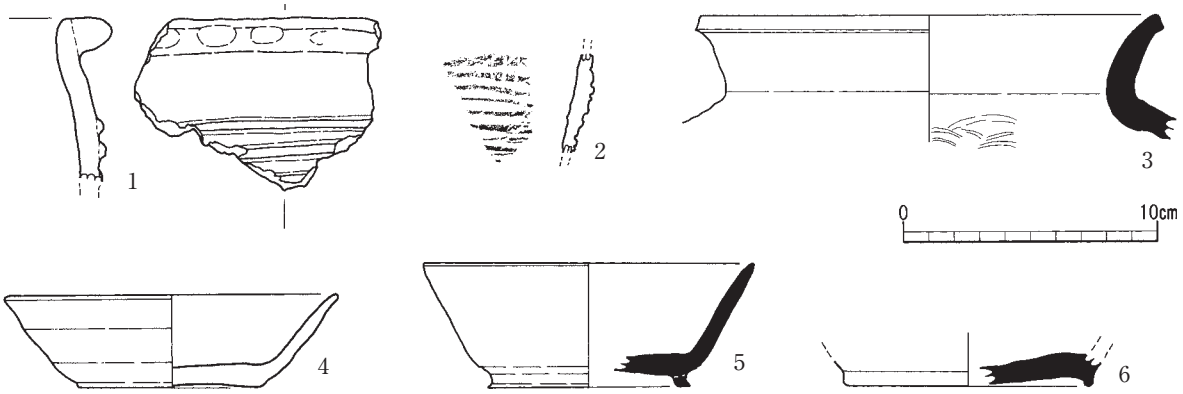


第38図　S017出土遺物実測図

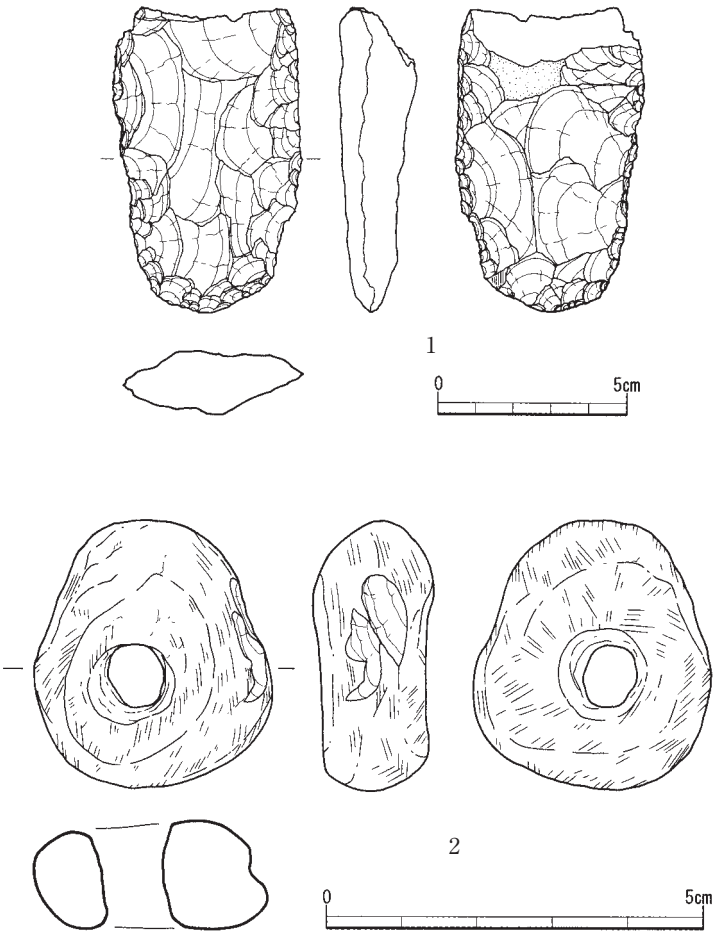
面に降灰しており、３と同一産地と思われる。また、逆位焼成である。６は須恵器の坏である。胎土に砂粒を多く含む。

遺構外出土土器（第41～43図、第57～65図）

１～32、34～54は縄文土器の深鉢である。１～４、７は山形押型文のものである。５、８は楕円押型文のものである。６は上部は楕円押型文、下部は山形押型文のものである。９は口縁端部に列点文、その下に５条の沈線を施す。10、11は突帯に棒状の工具を押しつけて付けた列点文のものである。12は刻み目突帯のものである。13は２条の沈線の間に列点文を施すも

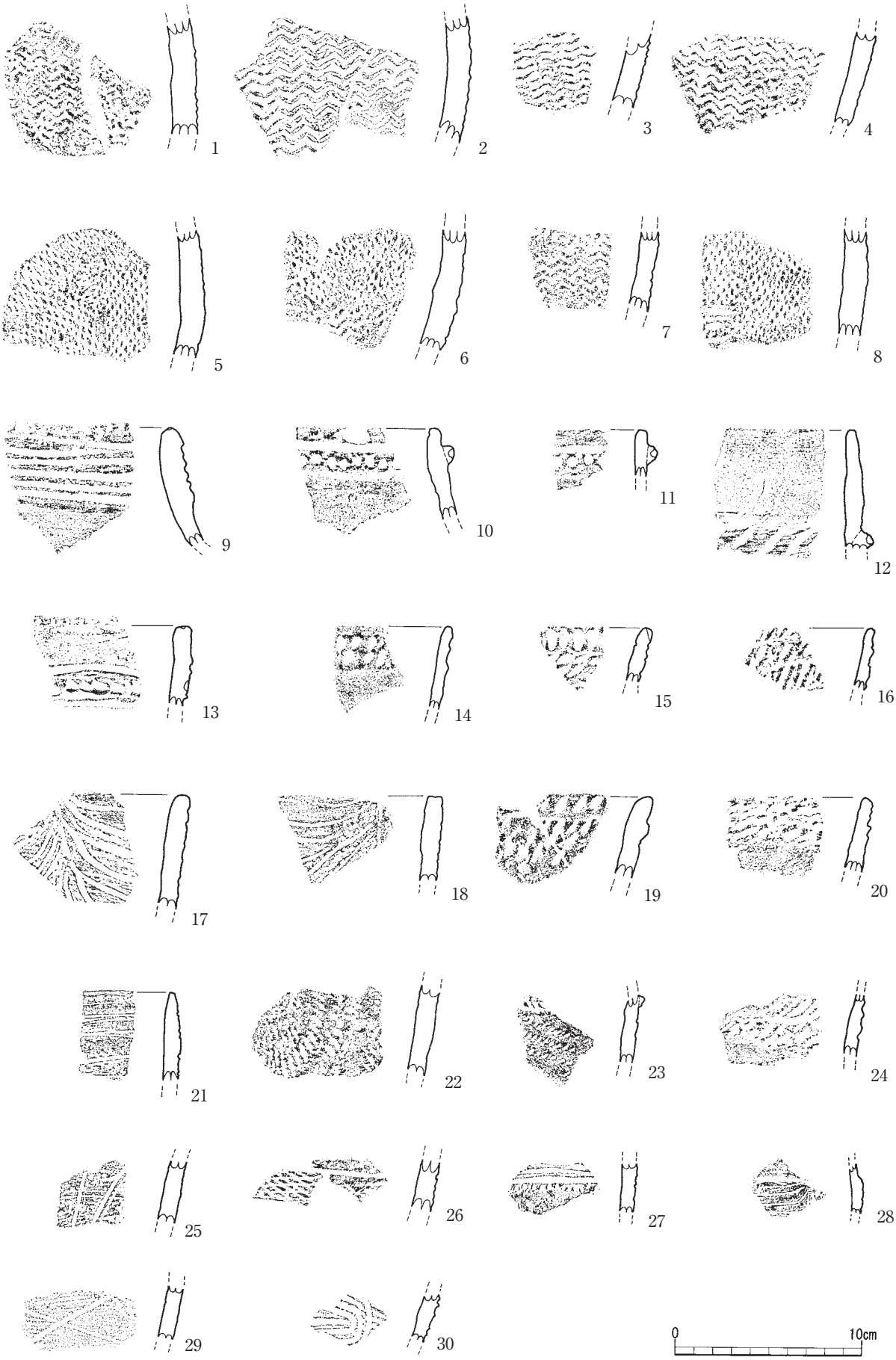


第39図　S011出土遺物実測図（１）

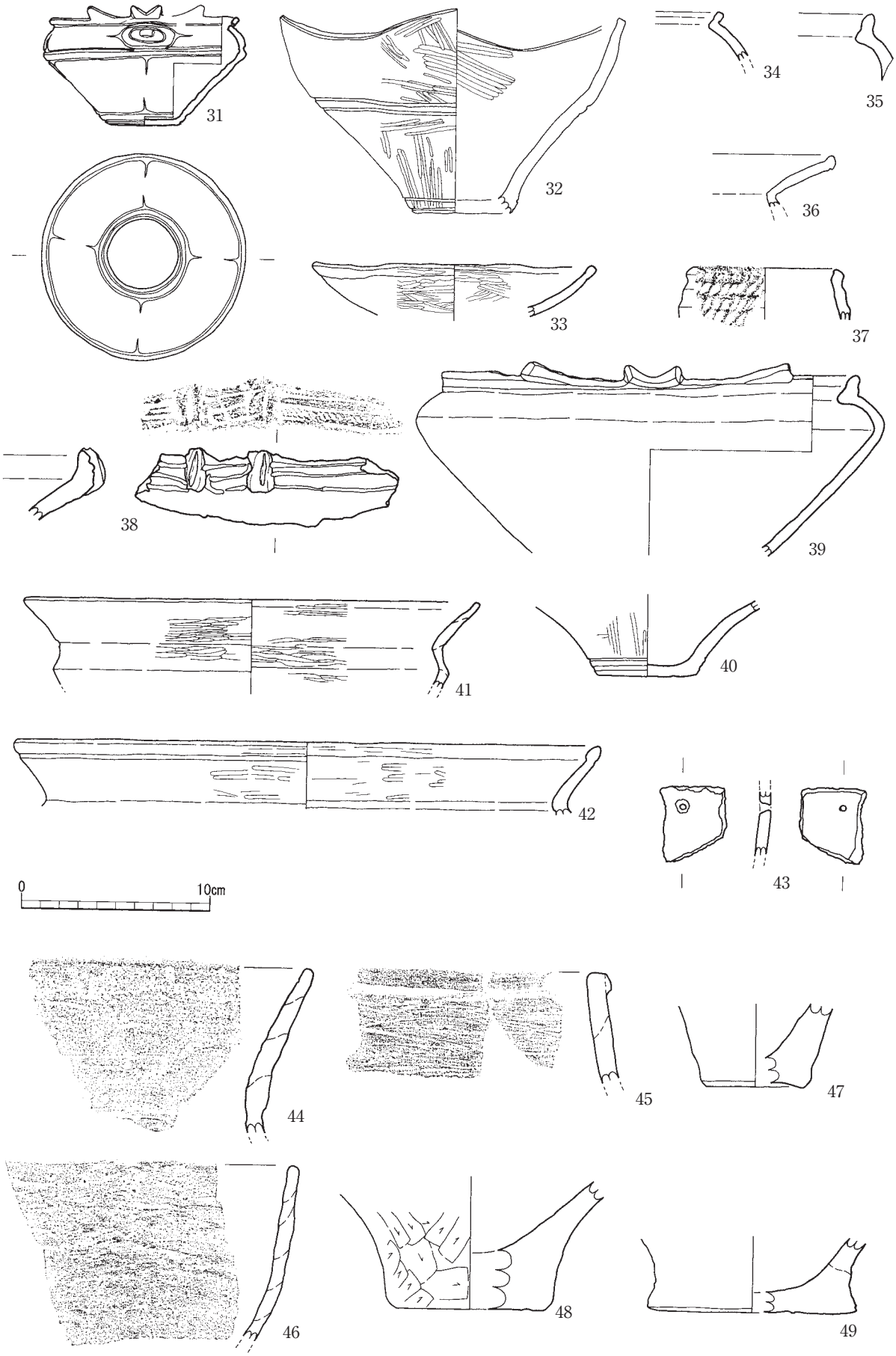


第40図　S011出土遺物実測図（２）

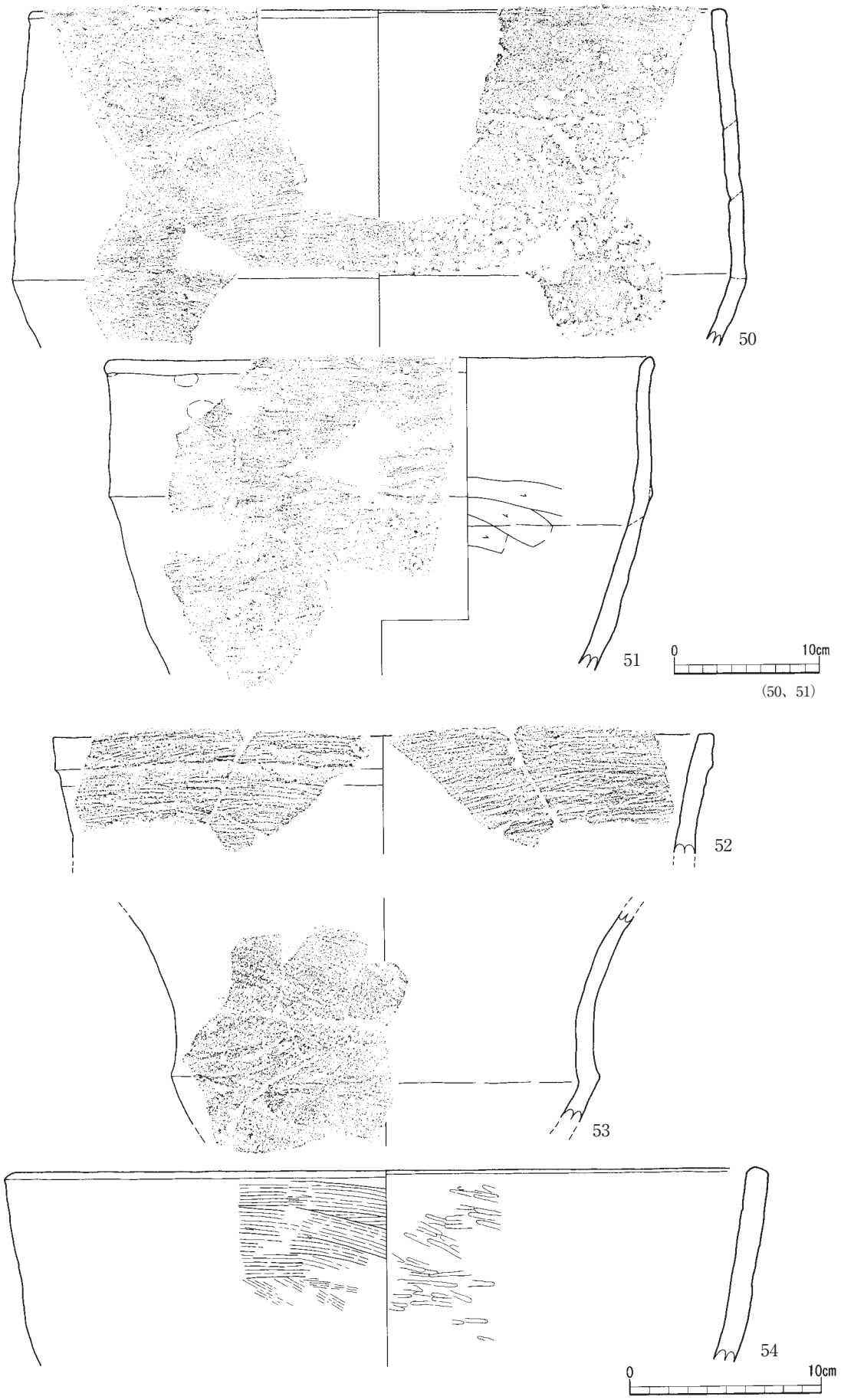
のである。21は沈線文のものである。31、39は平状口縁で、正面にのみリボン状突起を付けた精製土器である。31はリボン状突起の下に目玉のような文様を施す。これも正面のみである。また、口縁部断面の「く」の字状に折れている部分には一か所直径１㎜程度の小さな孔が穿孔されている。内外面とも黒色処理されている。40は39と同一個体の可能性もあるが、接合しなかったため別個体として掲載した。34も31、39と同様の器形と思われる。内外面とも黒色処理を施す。35も同様の器形と思われるが、黒色処理は施されていない。32は内外面とも黒色処理が施される。体部の沈線の一部分には赤色顔料が付着している。また、波状口縁の一方は意図的に打ち欠いた痕跡がある。36、41は内外面とも黒色処理が施される。しかし、36は非常に丁寧なつくりであるのに対し、41は粗製である。42



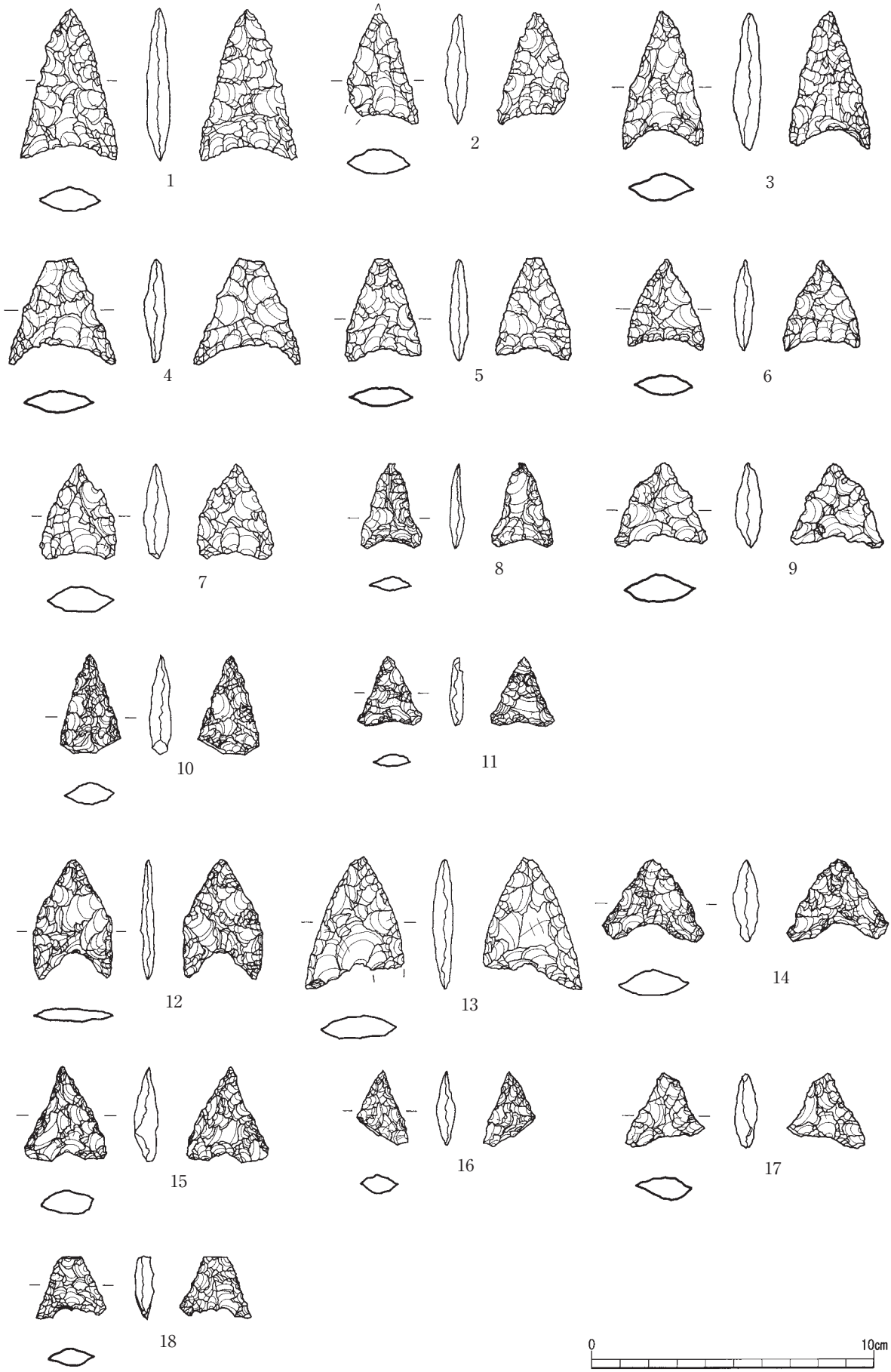
第41図　遺構外出土遺物実測図（１）



第42図　遺構外出土遺物実測図（２）

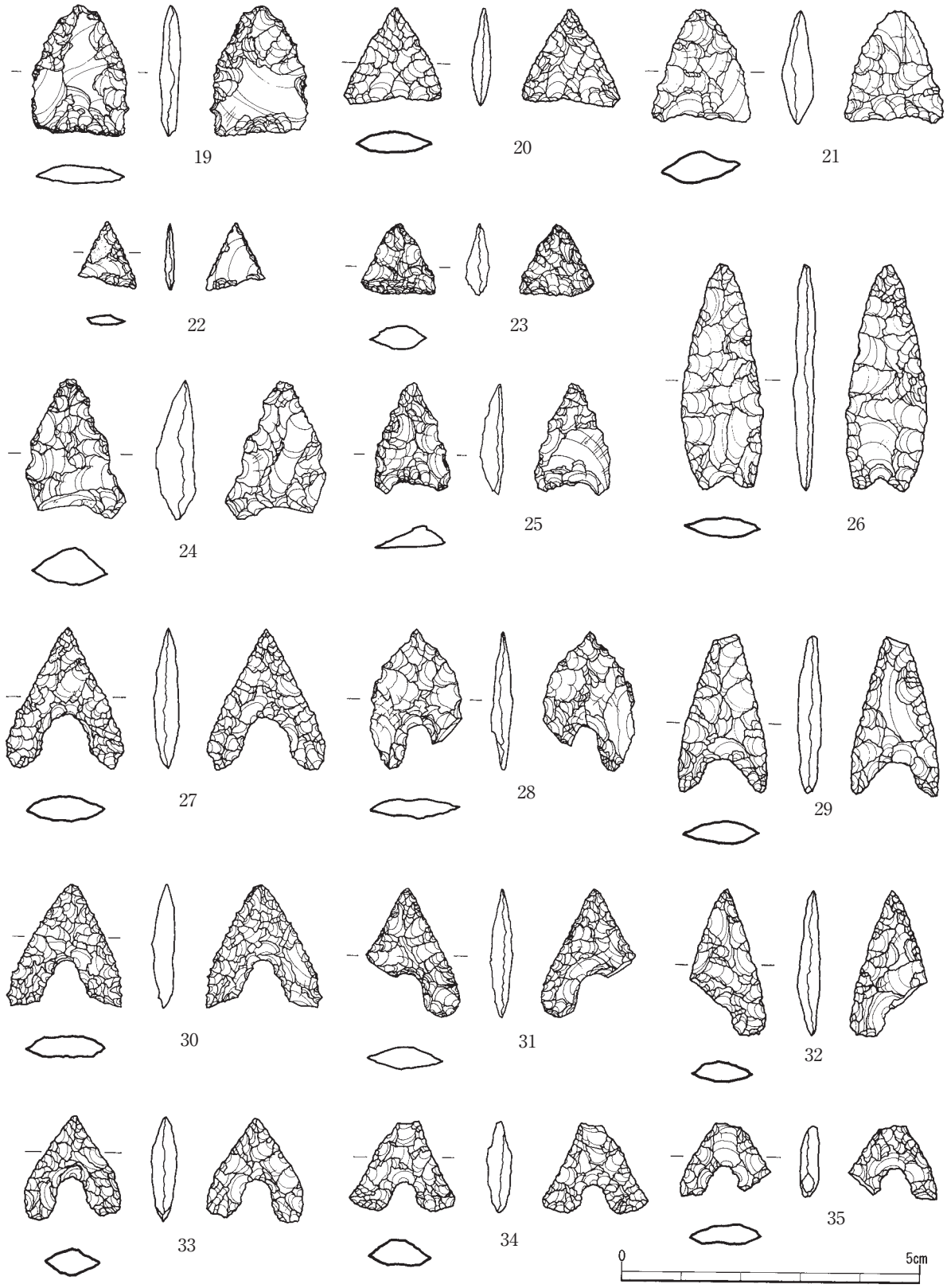


第43図　遺構外出土遺物実測図（３）

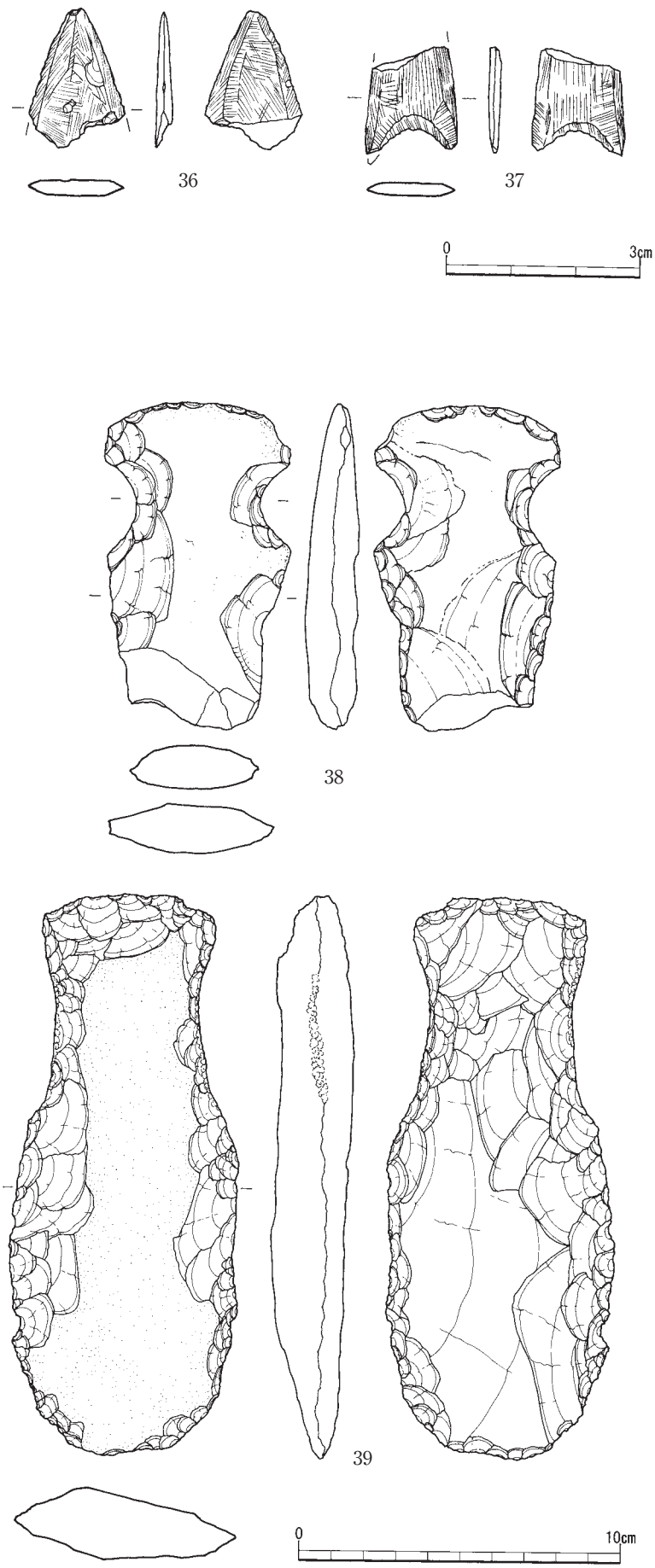


第44図　遺構外出土遺物実測図（４）

も同様の器形である。丁寧なつくりであるが、黒色処理は施されていない。37は口径が小さいため、ミニチュア土器的なものであったことも考えられる。38の縦方向の突帯状の突起には、上から直径２㎜ほどの孔を穿った痕跡がある。43は内外面とも黒色処理が施された深鉢の破片である。孔は内側から穿孔されている。44～49は粗製の土器である。49の内面は黒色処理が施される。54は穿孔部分を観察すると内面、外面双方か



第45図　遺構外出土遺物実測図（５）



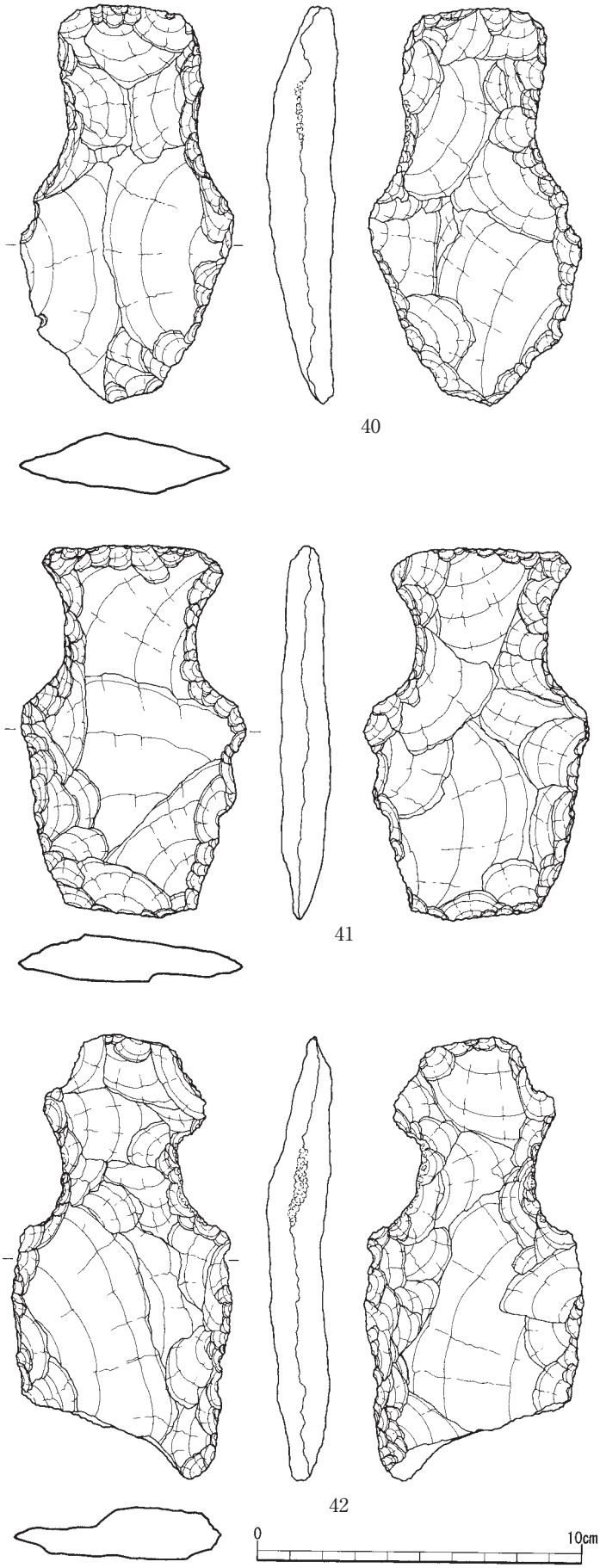
第46図　遺構外出土遺物実測図（６）

ら穿孔していることがわかる。33は縄文土器の浅鉢である。平状口縁で内外面ともに黒色処理を施す。

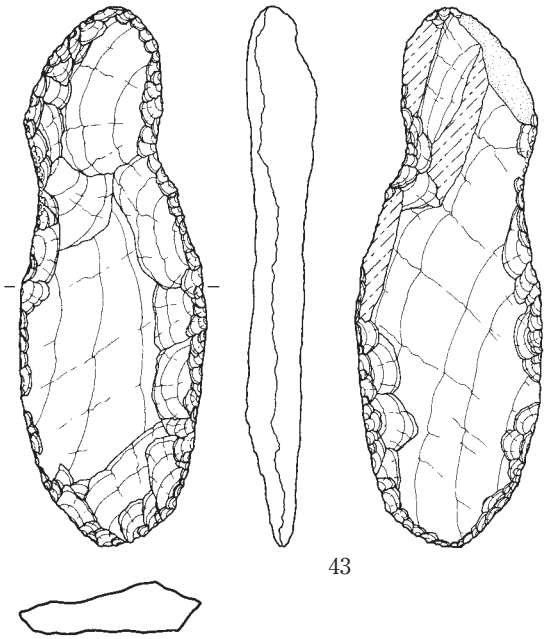
55～60は弥生土器の甕である。55は砂粒を多く含み、粗い胎土である。56も砂粒を多く含むが、器壁は薄く精緻なつくりである。体部の沈線より上はハケメがきれいにナデ消されている。57も胎土は粗い。58は56とは異なり、器壁は厚く重い。59、60はともに丁寧にハケメを施す。特に60にはハケメの工具を押し当てた痕跡がはっきりと残っている。

61～64は土師器の鉢である。61は外面には縦方向、内面には横方向の強く粗いハケメが施される。つくりも粗雑である。62は口縁部付近は丁寧なナデを施し、外面のハケメ、内面のケズリをナデ消している。丁寧なつくりである。63、64は共に粗雑なつくりである。65～74、76～79は土師器の甕である。65は口縁端部に、はっきりした段を形成しており、同時期の須恵器甕の口縁端部のような形態をしている。しかし、調整は完全に土師器の技法である。66～74は形態、技法ともに土師器のものである。また、67は非常に焼きが良く須恵器のような硬さがあり、重量感がある。71、72は外面にすすが付着している。75は土師器の香炉と思われる。脚はおそらく三足である。80は土師器の壷の口縁部である。81～92、94～105、107～109、144、145は土師器の坏である。81は焼成が甘く、表面が摩滅している。82、83は胎土がしまっており重量感がある。84は形態的にみるとＳ

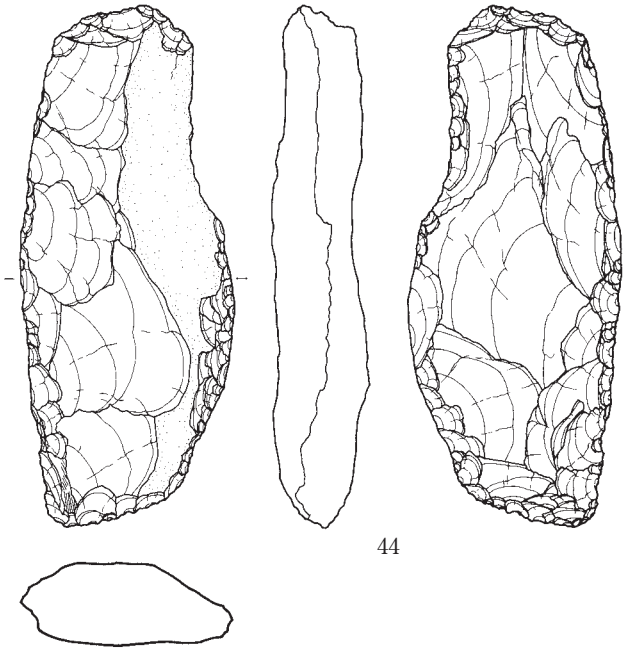
008出土のものとは明らかに異なる。85、86は、82、83と比べると重量感はない。87は外面にすすが付着している。88の外面底部は黒色土器のようになっているが、これは意図してこのようにしたものではないと思われる。89、90は器壁が薄く非常に軽い。91は外面に赤色顔料が塗られている。祭祀用の土器だったのであろうか。つくりも丁寧である。92、94、96、105～109は内面が黒色処理された黒色土器であり、断面の半分近くまでカーボンが吸着している。106、107は須恵器のように硬い焼き上がりである。外面にはすすが付着している。97、98、100～103は重量感のある土器である。105は須恵器のように硬い焼き上がりである。93は土師器の椀である。非常に細かく丁寧な調整を施している。138～140は墨書土器で、いずれも外面に墨書されている。138は小片であるためはっきりと判断できないが、「集」、「焦」や「隼」のような文字と思われる。139、140は文字ではないと思われるが、小片のため何が書かれているのか判断できない。144は内面が黒色処理された黒色土器である。145は内外面とも摩滅している。141は土師器の坏蓋であるが、つまみまで含めた技法は完全に須恵器の技法である。142、143は土師器の皿である。次の142の口縁部は意図的に打ち欠いている部分がある。146は土師器の鉢である。器壁は大変厚く重量感がある。147は瓦質土器である。110～119、124、125は須恵器の坏身である。110、112は見た目は土師器のようであるが、内側までしっかりと焼成されたものである。115は火ぶくれしている。外面に降灰している。120、121、128、129は須恵器の皿である。128の内面には自然釉がかかる。122、123、130は須恵器の壷である。126、127は須恵器の高坏である。



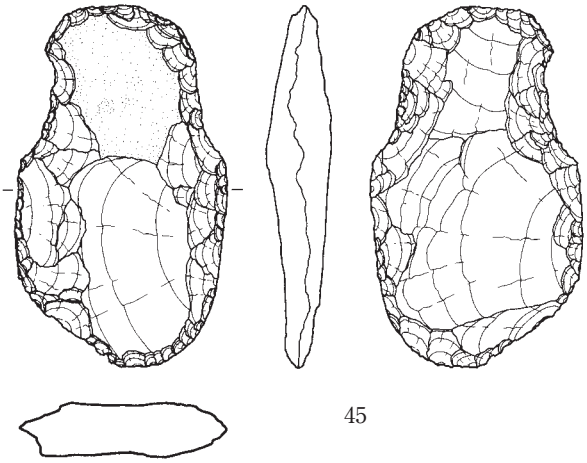
第47図　遺構外出土遺物実測図（７）



43



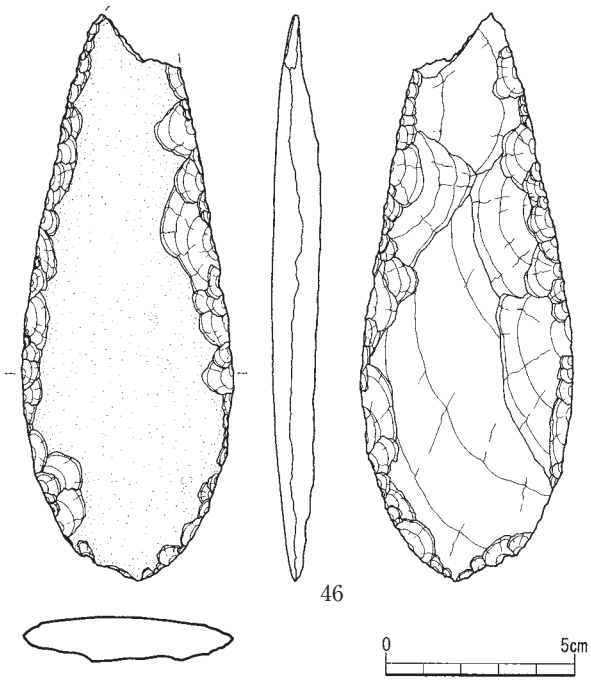
44



45

第48図　遺構外出土遺物実測図（８）

127の内面には絞り目が確認できる。131は須恵器の移動式竈である。132～134は須恵器の坏蓋である。132は一部に火ぶくれがある。また、内面に降灰している。135～137は、須恵器の甕である。135は外面に白色や黄色の灰が降っている。タタキは格子目タタキである。136は甕の口縁部であるが、口縁の開き方はかなりの角度で傾斜する。137は外面は格子目タタキ、内面は当て具をナデ消している。148、149は紡錘車である。148は土製である。土器片の再利用ではなく、はじめから紡錘車として製作されている。149は石製である。片方の面からのみ穿孔したと考えられる。150～152は土錘である。３点とも刺網系の土錘である。153は土玉で装飾品と思われる。154、156～171は土師器の、155は須恵器の灯明皿である。166は一か所だけ打ち欠きされ、その周辺にすすが付着しており、これは実際に使用した痕跡と思われる。172～179は陶磁器の椀である。172～174、176～178は青磁の椀である。179は白磁の椀である。



第49図　遺構外出土遺物実測図（９）

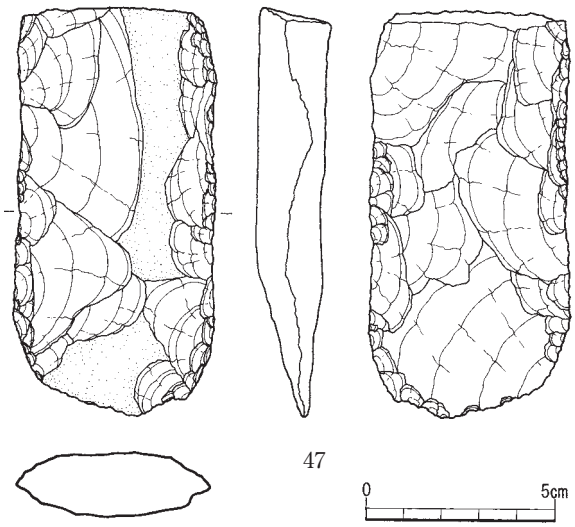
遺構外出土石器（第44～56図）

１～35は打製石鏃である。これらの多くは１層中からの出土で、いずれかからの流れ込みである。平面形をみると、正三角形状のもの、二等辺三角形状のもの、五角形状のもの、その他形状ものに分けられる。また石鏃の基部をみると、基部に抉りが入るタイプ（平基式）と基部に抉りが入らないタイプ（凹基式）に分けられる。この平面形と基部形状の組み合わせで大まかな大別が可能である。22のように製作途中の未製品と思われるようなものもある。

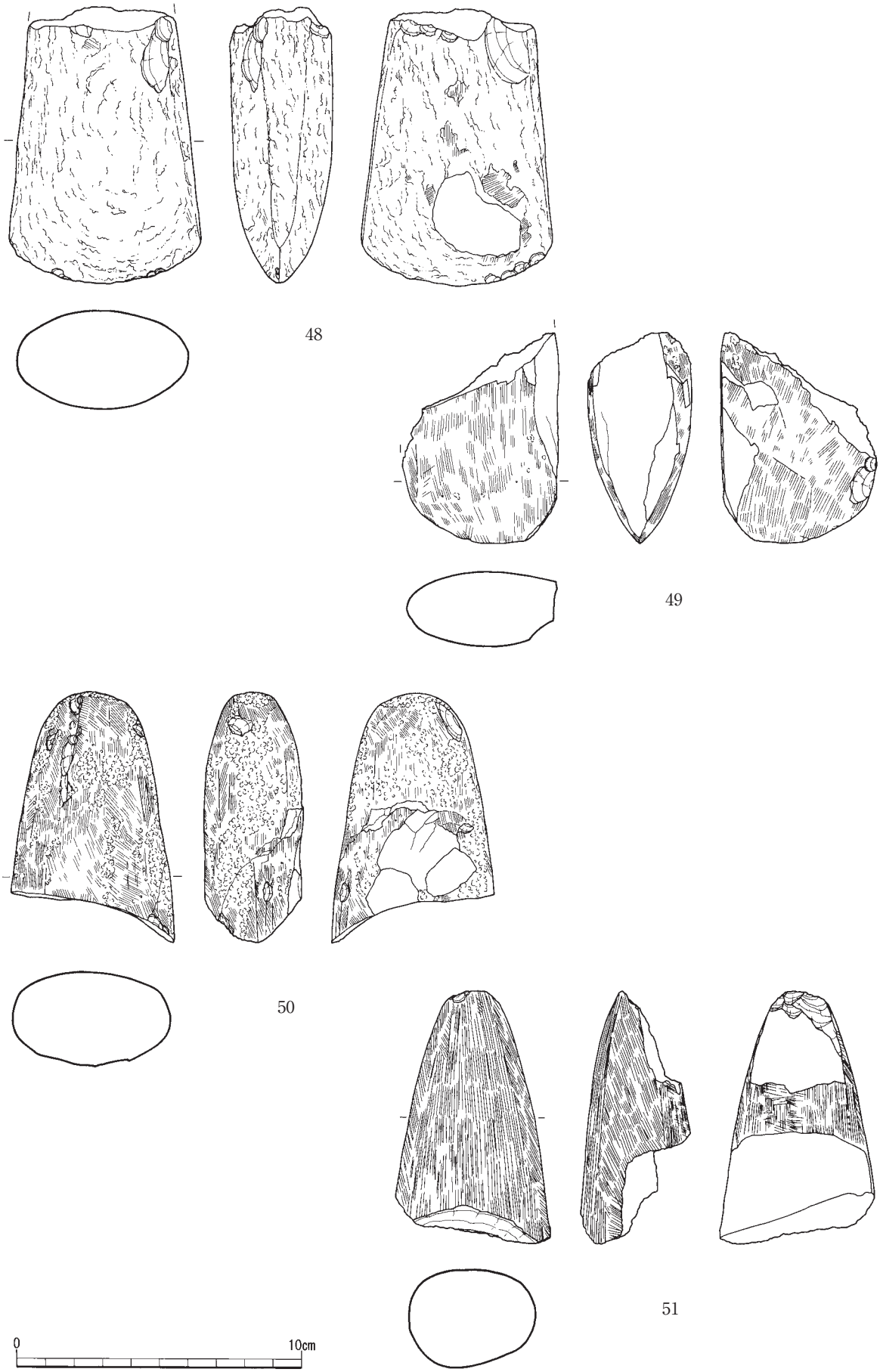
打製石鏃の石材は、黒曜石が最も多く、これにチャート、安山岩、頁岩とつづく。黒曜石は、桑ノ木津留の黒曜石が最も多い。これは人吉市の南数kmに位置するという、地理的な要因が大きいと思われる。このほか、日東、阿蘇、腰岳、針尾、姫島の黒曜石が使用されている。姫島の黒曜石が球磨地方に入ってきていることは注目すべき点である。

36、37は磨製石鏃である。石材はどちらも頁岩である。平面形は二等辺三角形状である。厚さは非常に薄い。全体的に丁寧に研磨を施してあり、特に刃部は丁寧に仕上げている。基部には抉りが入っている。

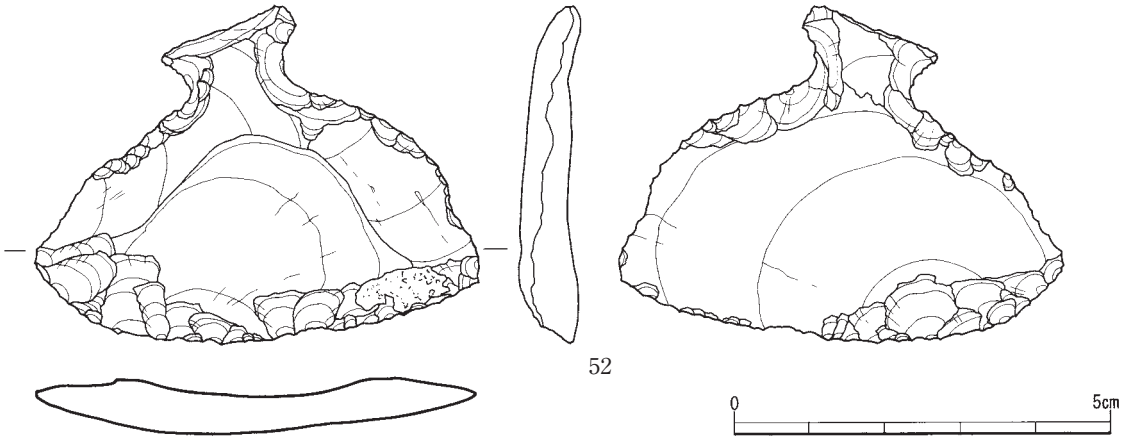
38～47は打製石斧である。打製石斧は、平面形でみると基部に抉りを入れるタイプと、基部に抉りを入れないタイプとに分けられる。基部に抉りを入れるタイプは、石剣の柄の部分のようにきちんと抉りを入れるものや、軽く抉りを入れるもの



第50図　遺構外出土遺物実測図（10）



第51図　遺構外出土遺物実測図（11）



第52図　遺構外出土遺物実測図（12）

など、抉りの状況でさらに細分可能である。この抉りを入れるタイプの石斧は、あさぎり町の他の縄文時代後期遺跡からも出土はするが、１遺跡からの出土数はそれほど多くないということである。小枝遺跡における抉り入りの打製石斧の、出土打製石斧全体における割合は50％以上となり、この割合は他の球磨地方の遺跡の割合と比較すると非常に大きいといえる。これは、小枝遺跡の石器組成を考える上でも重要な要素であるといえるだろう。打製石斧の石材は、すべて安山岩である。

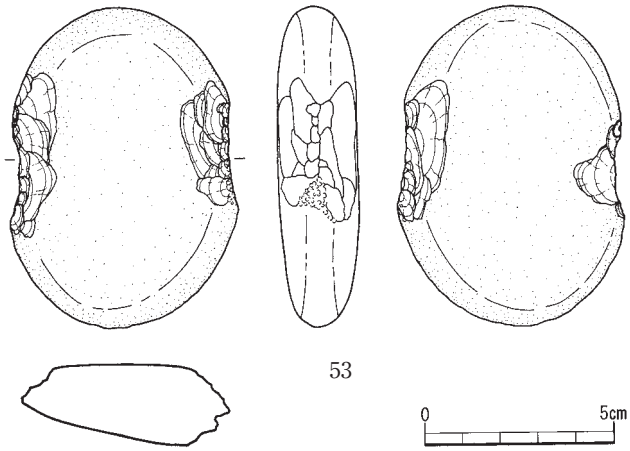
48～51は磨製石斧である。石材は堆積岩、砂岩、頁岩である。いずれも丁寧に研磨して製作している。刃部は表面、裏面とも研磨して刃部をつくりだしている。

52は石匙である。石材は安山岩である。

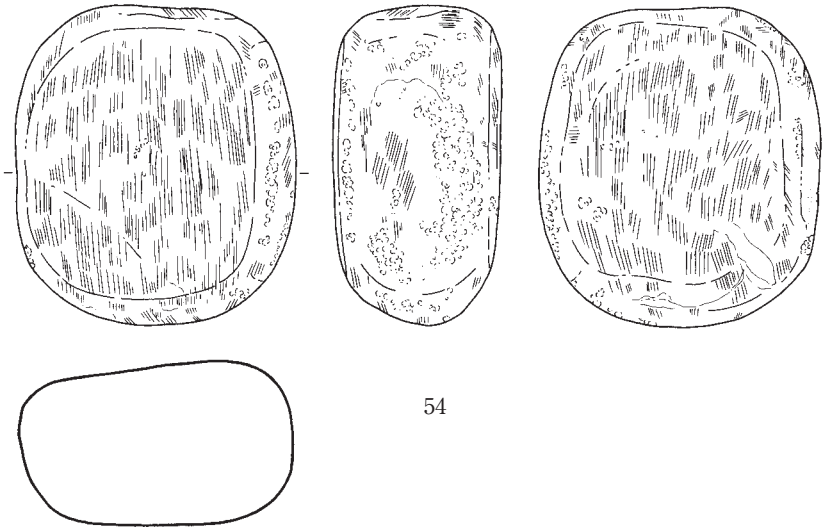
53は石錘である。石材は安山岩である。通常石錘は上下に打ち欠いた部分がくるように実測するが、側面図で打ち欠き状況を表現したかったため、掲載図のような実測を行った。

54～59は磨石である。石材は砂岩、安山岩である。54は表面、裏面と側面の一部に磨り痕がみられる。55は表面、裏面に磨り痕がみられる。56は表面、裏面と先端の一部に磨り痕がみられる。57は表面、裏面に磨り痕がみられる。58は表面、裏面に磨り痕がみられ、一部に敲打痕が認められる。59は表面、裏面と側面の一部に磨り痕がみられる。

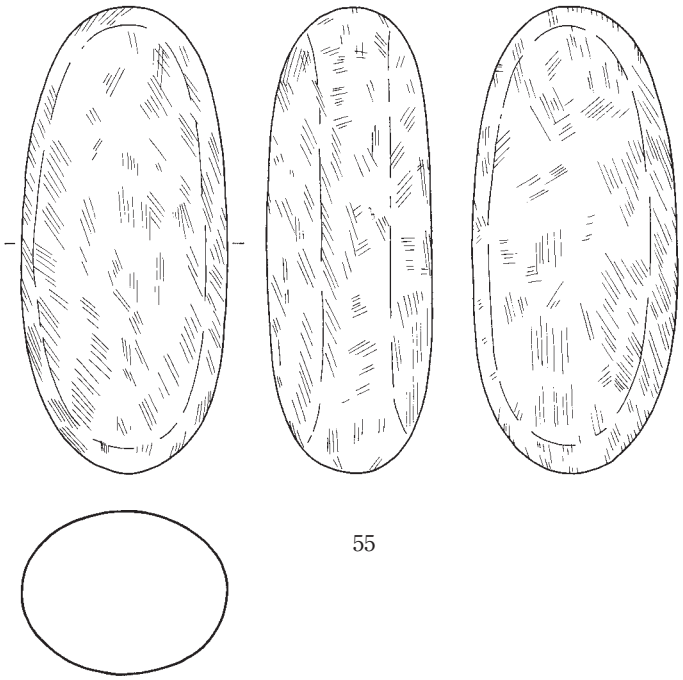
さて、小枝遺跡の石器組成をみてみると、石鏃が58％、石斧が27％、凹石・磨石９％、石匙３％、円盤状石器１％、スクレイパー１％、石錘１％となる。この石器組成から、縄文時代の小枝遺跡周辺の状況について、次のようなことがいえよう。まず、石鏃が多いことから弓矢による猟が盛んだったことがいえよう。また、球磨川が目の前であることから、魚を捕るのにも弓矢を多用していたことが考えられる。それを裏付けるように石錘の出土量が極めて少ない。さらに、食品加工に使用されるスクレイパーや石匙の出土量が少ないことも注目すべきである。このことからも、解体作業の必要な大型の動物を捕るよりも、球磨川で魚などを捕る頻度が高かったのであろう。磨石などは、木の実などを磨り潰したのだろうが、石皿が１点も出土しなかった。ドングリなどを加工しての食品加工はあまりしなかったのだろうか。



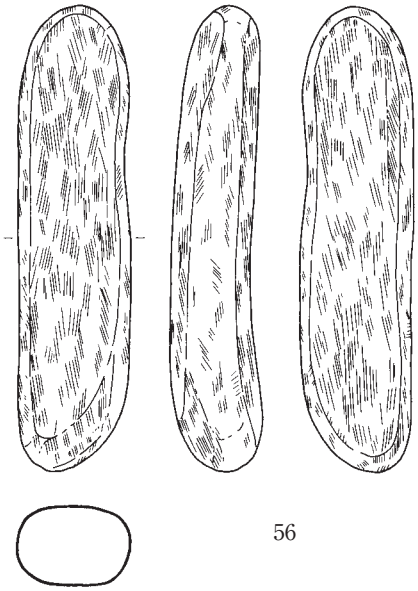
第53図　遺構外出土遺物実測図（13）



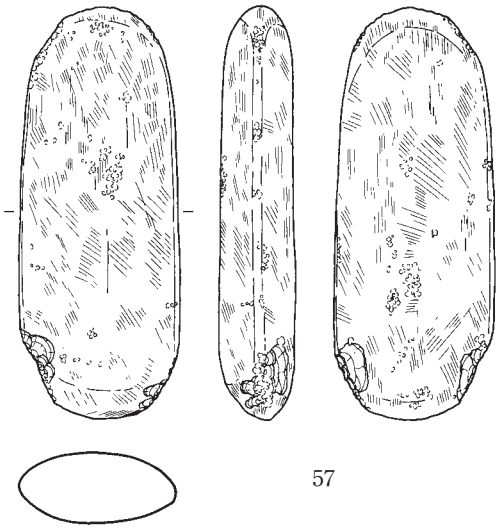
54



55



56



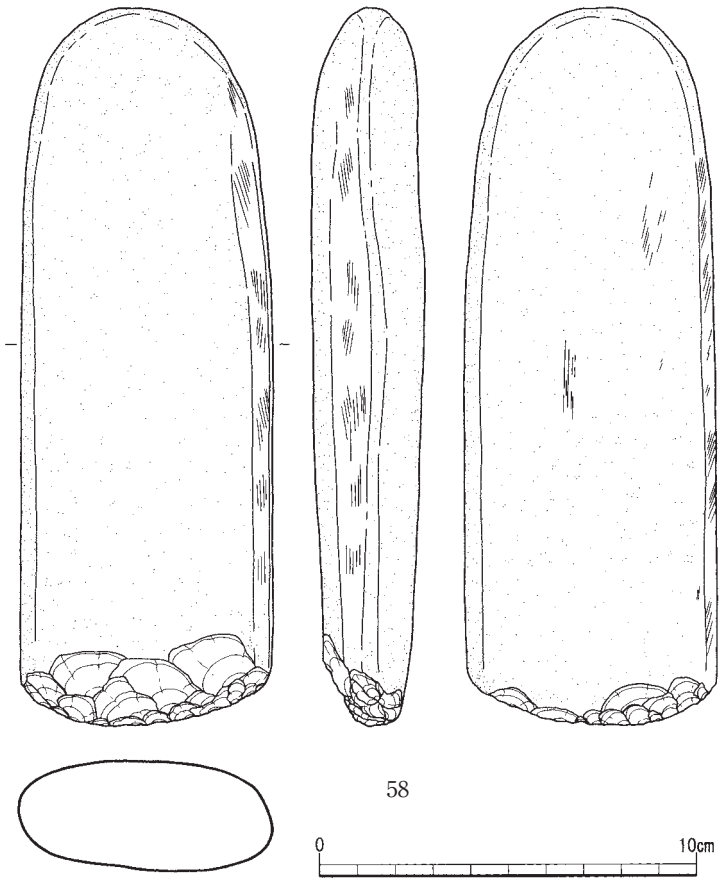
57

0　10cm

第54図　遺構外出土遺物実測図（14）

石斧の出土量は全体の４分の１ほどの割合である。打製石斧の石材は安山岩であるが、この安山岩はあまり強度の強いものではなく、木の伐採などには耐えられない。そのため、主として土掘り具としての用途であったと思われる。

これらの石器は、出土状況や出土層位などから、すべて縄文時代の後・晩期のものと考えられる。

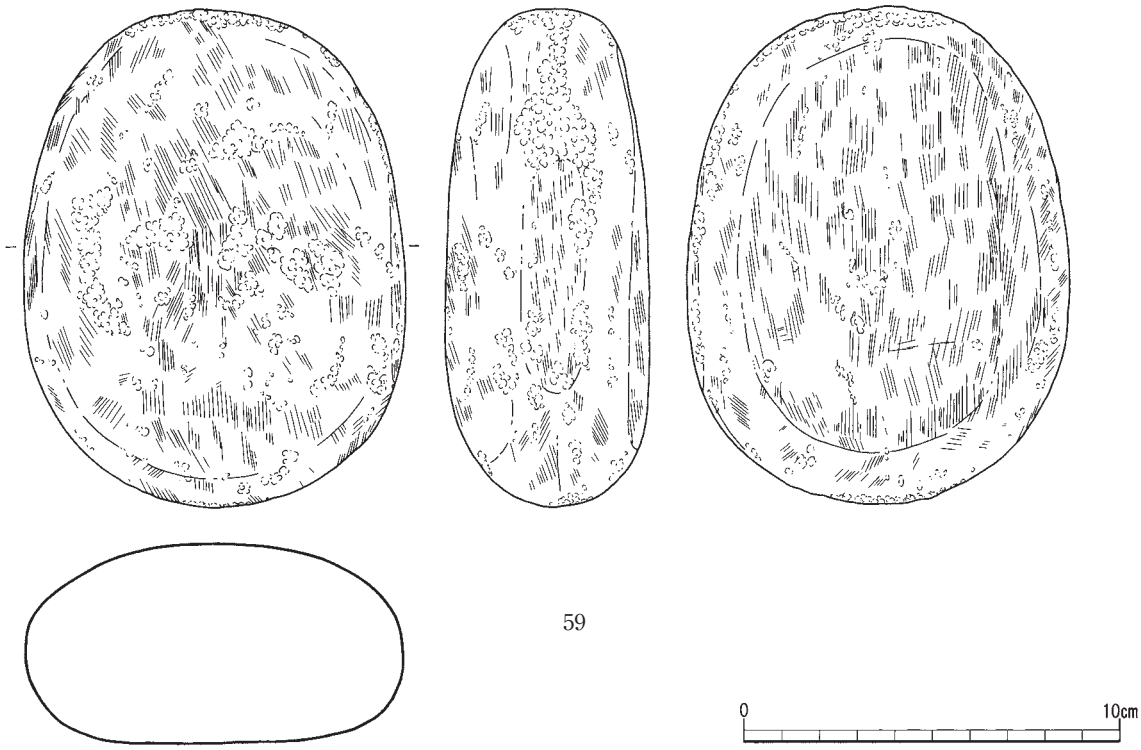


第55図　遺構外出土遺物実測図（15）

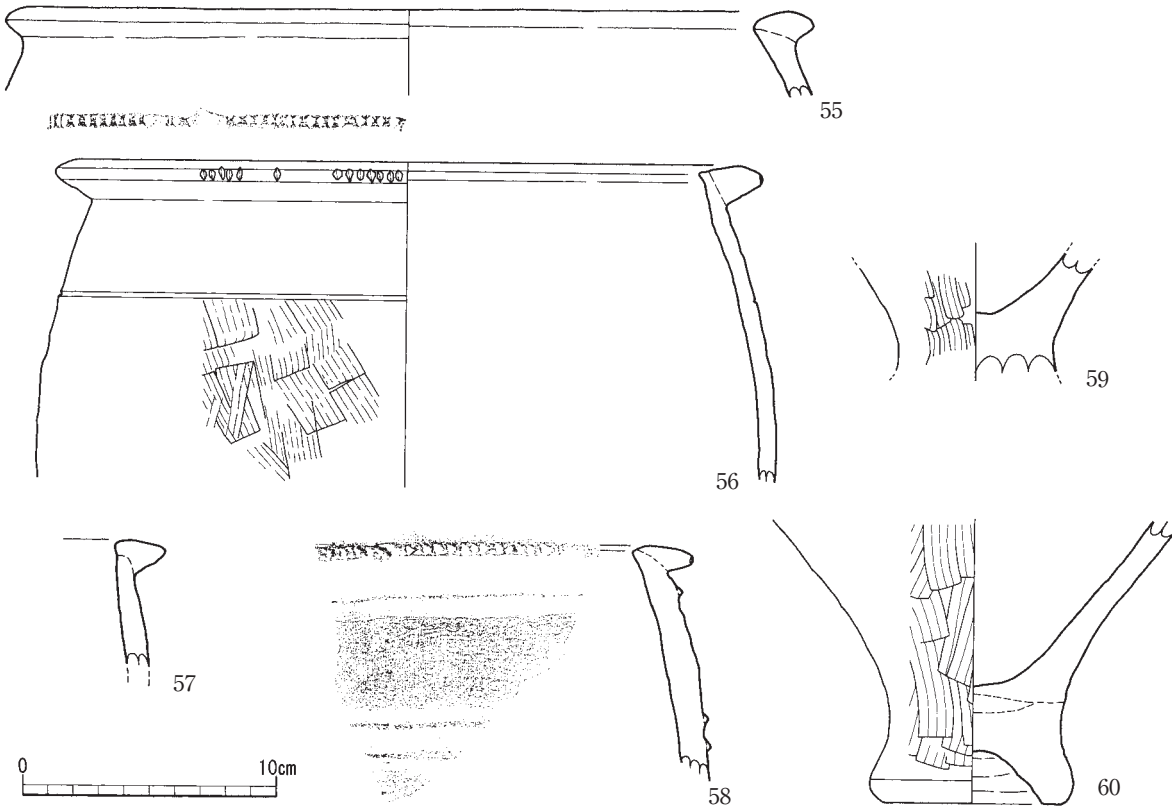
Ⅲ　小結

小枝遺跡では、遺構は竪穴式住居１軒、土坑５基、溝状遺構５基、道路状遺構２条、柵列状遺構１基、ピット多数が検出された。これらの遺構について、各時期ごとにみていきたい。

まず縄文・弥生時代の遺構はSD89、S015と集石である。縄文時代の遺物の出土数と比較すると、遺構数は少ないように思われる。出土遺物の大半は流れ込みである１層からの出土であるため、小枝遺跡周辺の縄文時代の遺構が破壊されて流れ込んだのではないだろうか。SD89は人



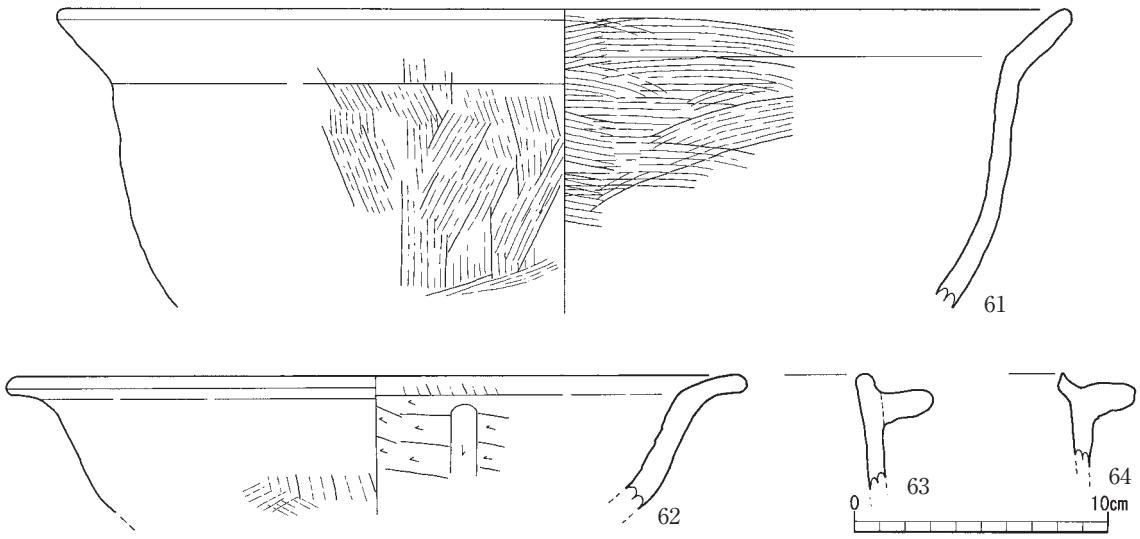
第56図　遺構外出土遺物実測図（16）



第57図　遺構外出土遺物実測図（17）

為的につくった溝状遺構か、自然にできたものかは判断できない。ただ、縄文土器の廃棄などに使用されているのは確かである。集石は、２層掘り下げ中に出土した11～15号集石については、縄文時代早期のものと考えることができる。それは同じ層位から縄文時代早期の押型文土器が出土したためである。その他の集石については縄文時代後・晩期のものと考えられる。

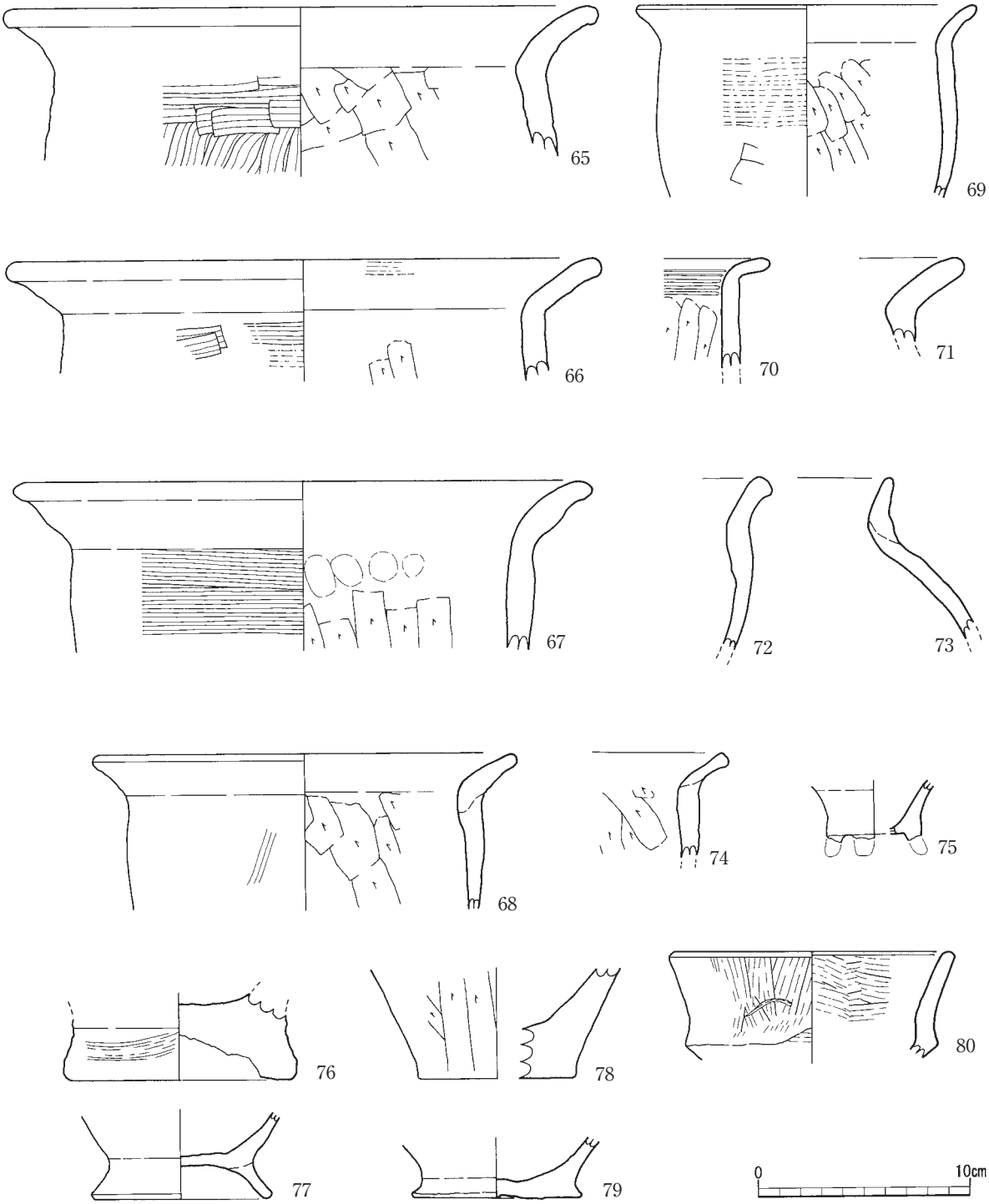
これら以外の遺構は、すべて古代～中世のものである。S013（竪穴式住居跡）は、小枝遺跡周辺の古代の竪穴式住居跡と比較しても、住居プラン、中央に炉があるなど類似する点が多い。また、西側に溝（S016）を設けて水の進入対策をしていることは、生活の場として実用していた証拠だろう。



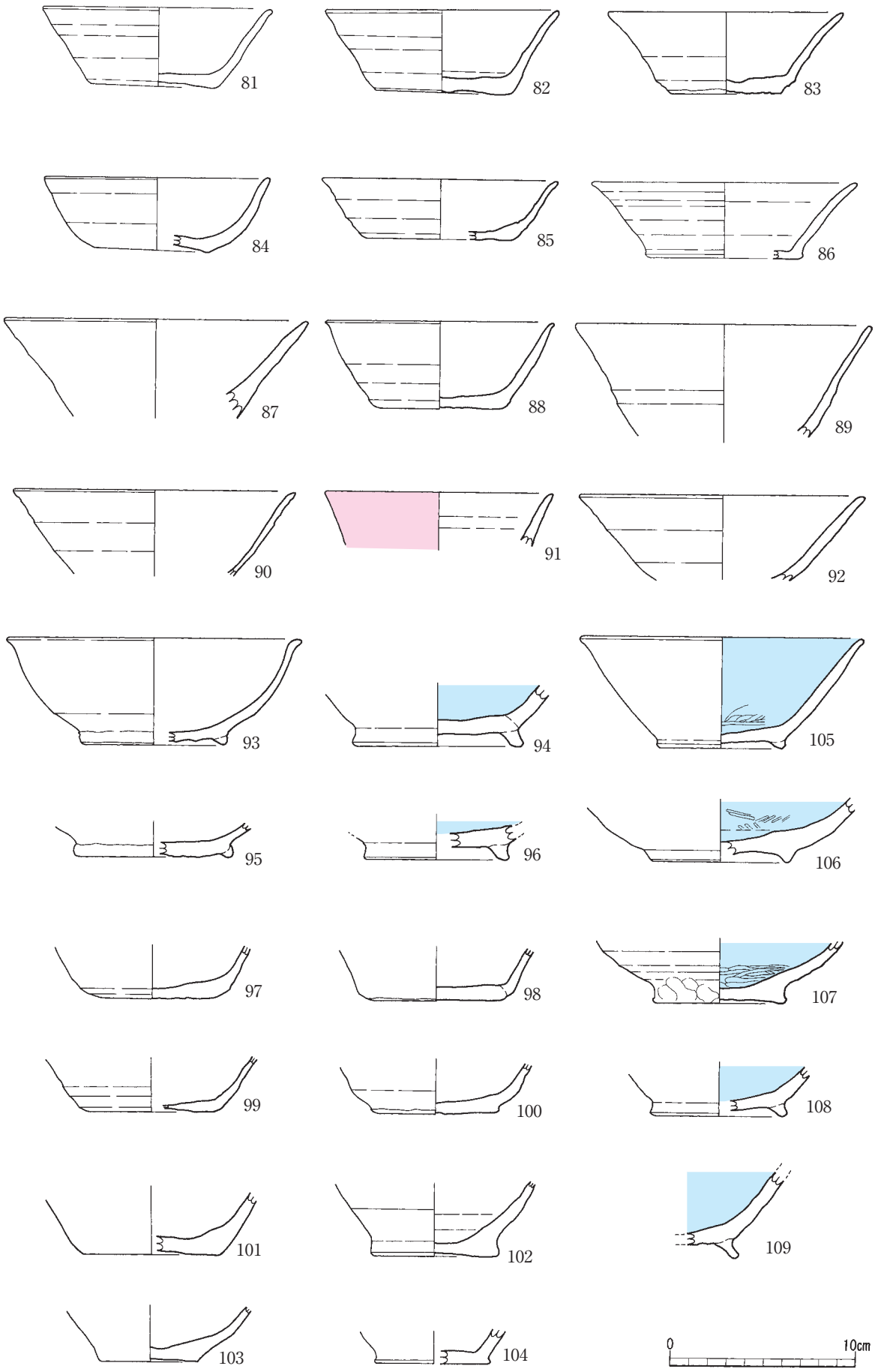
第58図　遺構外出土遺物実測図（18）

土坑からは、それぞれ遺構の時期の根拠となる遺物が出土している。SK14は中世初頭、S014、S008、S017はそれぞれ古代である。S013出土の須恵器は、球磨郡錦町の下り山窯跡の須恵器に類似しており、胎土分析でも同様の結果が得られている。この分析については第４章を参照されたい。S008は土師器の焼成土坑であり、一括遺物として重要な資料となろう。

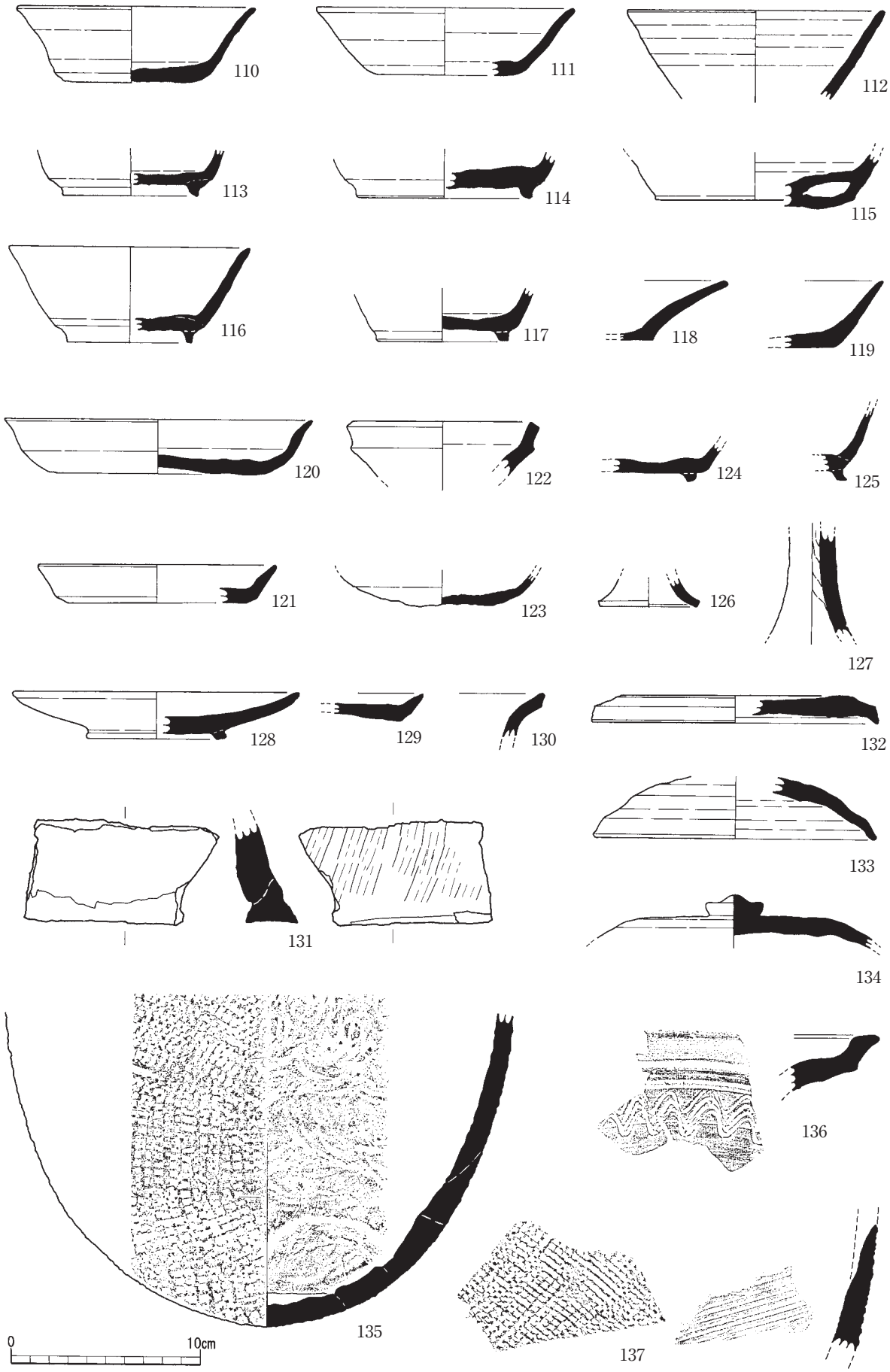
S011（道路状遺構）は側溝のある道路状遺構である。南北方向に延びるこの道路は、球磨川へとつづく道路だったのではないだろうか。方位がほぼ正確に南北方向に延びていることは、この道路が規則性をもって構築されたものと思われる。



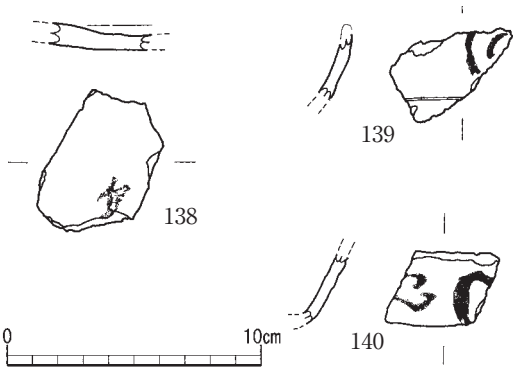
第59図　遺構外出土遺物実測図（19）



第60図　遺構外出土遺物実測図（20）



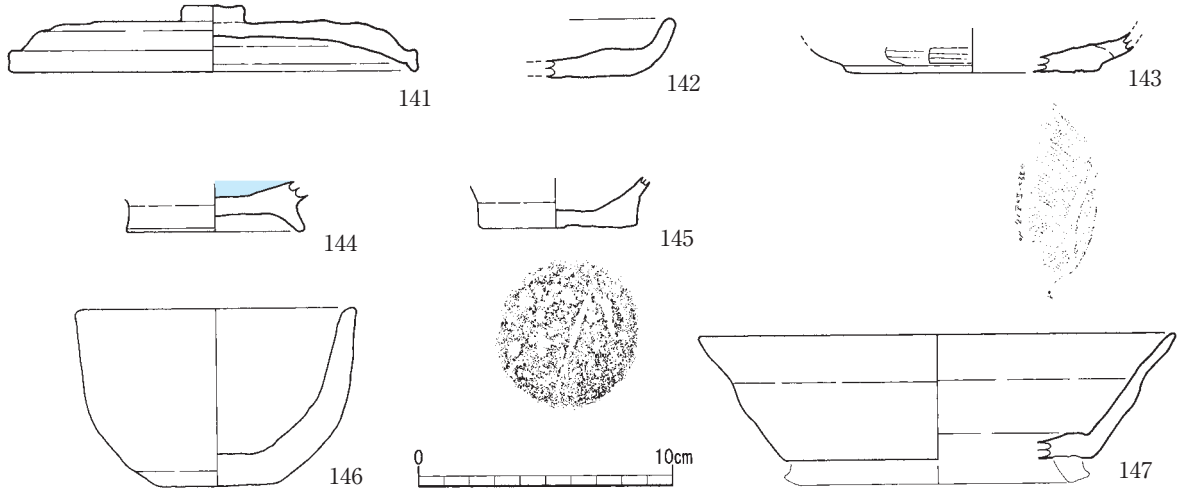
第61図　遺構外出土遺物実測図（21）



第62図　遺構外出土遺物実測図（22）

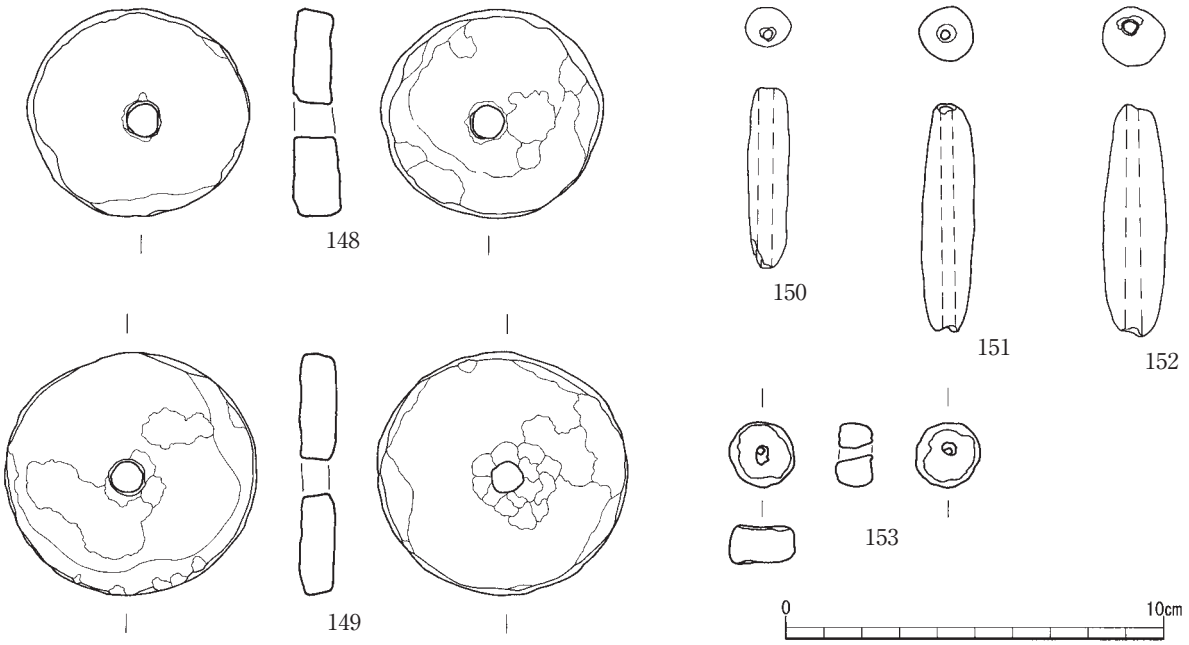
柵列状遺構は、軸が南北方向に延びている。西に隣接する深田城に関与する遺構の可能性もある。ただ、このような小規模で、単独の柵列状遺構がどのような用途であったのかは不明である。

以上、遺構に関してみてきたが、全体的にみると遺構の分布はⅡｂ区南側の平坦面と、Ⅲ区東側の平坦部分に集中する。特にⅡｂ区の平坦面部分では、S015、７号集石（縄文・弥生）→S013（古代）→S014（古代）→S011（古代）という順に、何度も同じ部分に遺構がつくられており、平坦部分が重要だったことがわかる。

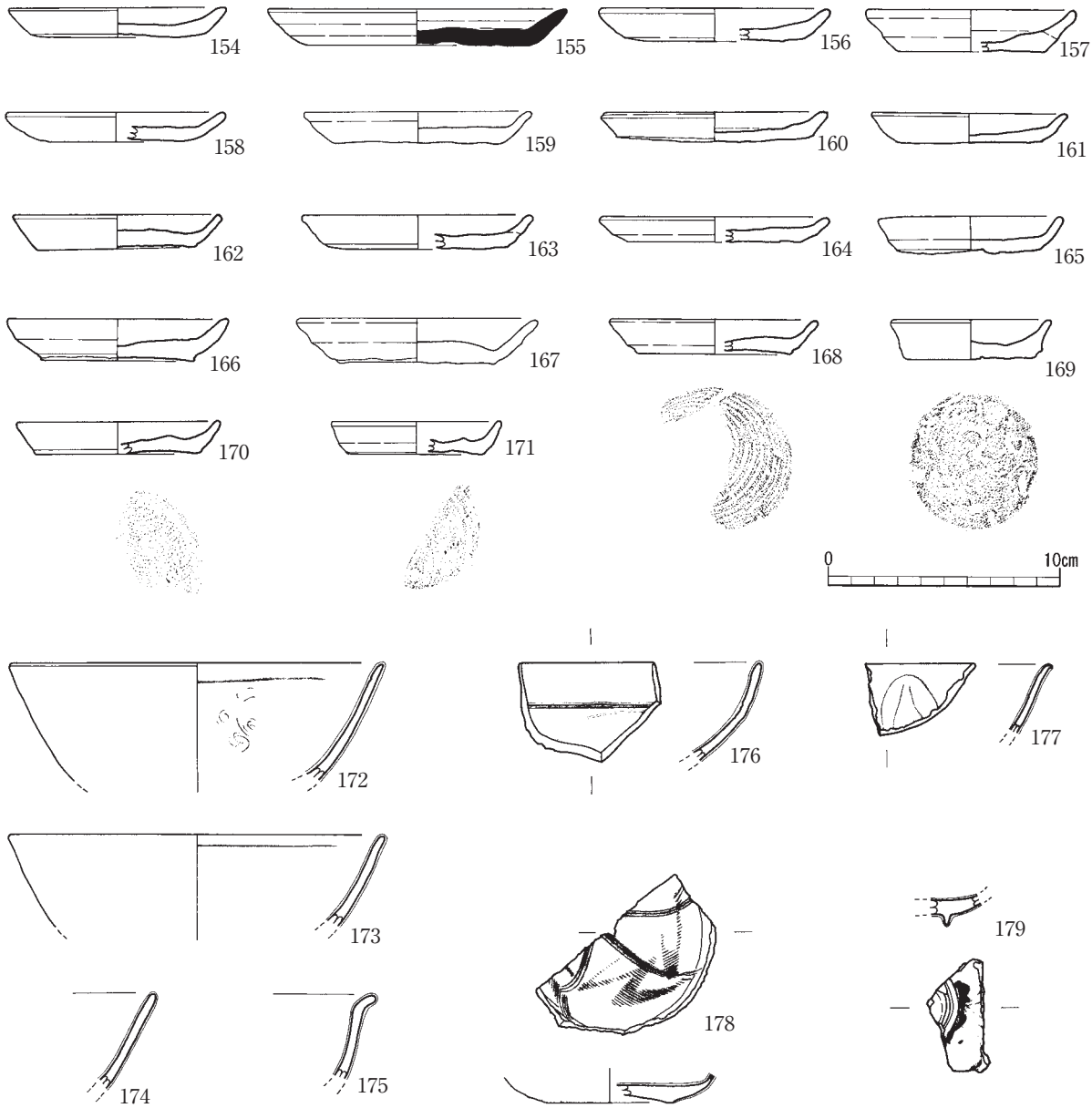


第63図　遺構外出土遺物実測図（23）

遺物についてみると、１層から様々な時代の遺物が多く出土した。これは周辺に各時代の遺跡、遺構が存



第64図　遺構外出土遺物実測図（24）



第65図　遺構外出土遺物実測図（25）

在していたことを示す。特に弥生時代の遺物は、今回の調査ではそれらが関与する遺構はS015しか確認できなかったため、確実に周辺に弥生時代の遺構が存在する、あるいは存在していたことを意味する。

墨書土器、黒色土器や陶磁器などは、すべて１層の流れ込みの包含層から出土したものである。そのため、西に隣接する深田城から流れ込んだものと考えることもできよう。本遺跡の西側の地名は、深田城に由来する「城（じょう）」と呼ばれる地区である。この地区は本遺跡より30～40m高く、見晴らしのいい台地といった地形になっており、多くの民家が建っている。これは明らかに造成されたためで、現在では深田城の曲輪などははっきりと確認できない状況である。そのような造成がいつの時代に行われたのかはわからないが、この造成時に出た土砂が本遺跡に流れ込んだものが１層の堆積ではないかと考えている。中世の遺構の上に１層が堆積していることから、この造成は中世以降であることは間違いない。

小枝遺跡は、１層の堆積後、長く放置されていたようである。しかし、昭和40年代に造成されて、畑として利用されており、また第２次調査範囲の南側は墓地としても利用された。だが、この土地利用も数十年で終了し、その後は発掘調査が行われるまで放置され、竹林や薮になっていたのである。

第２表　土器観察一覧表

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第21図 1	縄文 深鉢	復 36.8 残 4.8	口縁部 4分の1	ナデ	ナデ	不良	褐灰	やや黒い褐灰	石英、角閃石、黒色砂粒を含む	Ⅰ区 SD10	一括	21	
2	縄文 深鉢	残 5.7	口縁部 小片	ケズリ後ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	灰黄褐	0.5～1㎜の赤褐色砂粒、長石、石英、角閃石を含む	Ⅰ区 SD10	ⅱ層	35	
3	縄文 深鉢	残 4.3	口縁部 小片	ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3㎜以下の長石、輝石、石英を多く含む	Ⅰ区 SD10	ⅶ層	14	
4	縄文 深鉢	残 3.5	胴部突帯付近 小片	刻み目突帯	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい橙	1㎜以下の長石、石英、角閃石、砂粒を多く含む	Ⅰ区 SD10	一括	37	
5	縄文 深鉢	残 4.0	胴部突帯付近 小片	刻み目突帯	ナデ	良	黒褐	暗灰黄	0.5～1㎜の長石、輝石、角閃石を多く含む	Ⅰ区 SD10	ⅱ層	36	
6	縄文 深鉢	残 2.8	胴部 小片	ミガキ	ナデ	良	黒褐	黄灰	1㎜以下の長石、輝石、角閃石を多く含む	Ⅰ区 SD10	ⅶ層	13	黒色磨研
7	縄文 深鉢	残 3.0	底部 5分の1	ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石、石英の砂粒を含む	Ⅰ区 SD10	ⅴ層	5	
8	縄文 深鉢	残 1.9	底部 小片	ナデ	ナデ	良	にぶい橙	にぶい黄橙	0.5～2㎜の長石を多量に含む	Ⅰ区 SD10	ⅶ層	16	
9	縄文 深鉢	残 2.2	底部 小片	ナデ 底部　摩滅している	ナデ	良	にぶい橙	にぶい褐	2㎜以下の黒、白、赤色砂粒を含む	Ⅰ区 SD10	ⅵ層	19	
10	縄文 深鉢	残 2.8	底部 小片	ナデ	ナデ	良	にぶい褐	にぶい黄褐	0.5～2㎜の長石を多量に含む角閃石も含む	Ⅰ区 SD10	ⅶ層	15	
11	土師器 坏	残 1.2	小片	ヘラ切り後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～1㎜の赤褐色砂粒を含む長石、輝石も含む	Ⅰ区 SD10	ⅱ層	34	
12	縄文 深鉢	復 5.0 残 3.8	底部 3分の1	ナデ	ナデ	良	橙	橙	1㎜以下の長石、輝石、角閃石を多く含む	Ⅰ区 SD10	一括	33	
13	縄文 深鉢	復 7.6 残 4.3	底部 4分の1	ナデ後タテナデ ケズリ、指頭圧痕　すす付着 底部ナデ	ナデ すす付着	良	にぶい橙	にぶい橙	石英、角閃石、長石、黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区 SD10	ⅴ層	4	
14	縄文 浅鉢	残 2.6	底部 小片	摩滅しているがナデか	ナデ	良	にぶい黄褐	灰黄褐	3㎜以下の黒、白色砂粒を含む	Ⅰ区 SD10	ⅵ層	20	
15	縄文 浅鉢	残 2.9	底部 小片	ナデ	ナデ	良	橙	にぶい黄橙	0.5～2㎜の長石、輝石を含む	Ⅰ区 SD10	ⅶ層	17	
16	土師器 坏	7.5 残 2.1	底部の み完形	ナデ ヘラ切り後ナデ	ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の長石、赤色酸化粒を含む	Ⅰ区 SD10	ⅱ層	32	
第22図 1	縄文 深鉢	残 6.4	頸部 小片	ナデ　刻み目突帯	ナデ	良	褐灰	浅黄橙	石英、角閃石、輝石、黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区 SD89	埋土 一括	22	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第23図 1	土師器 坏	11.5 6.3 残 4.1	完形	回転ナデ 底部　糸切り	回転ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	0.5～3㎜の輝石、石英、長石を含む	Ⅰ区 SK14	No.1	1	ロクロ右回り
第24図 1	土師器 坏	11.7 6.0 4.0	完形	回転ナデ 底部　糸切り	回転ナデ	良	橙	橙	石英、角閃石、長石、黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区 SD1	No.2	3	ロクロ右回り
2	土師器 坏	10.8 6.0 3.8	完形	回転ナデ 底部　糸切り	ナデ	良	橙	橙	0.5～3㎜の石英、輝石、長石、赤色砂粒を含む	Ⅰ区 SD1	No.1	2	ロクロ右回り
3	土師器 皿	復 4.8 復 3.3 1.9	底部4分の1	ナデ	ナデ	良	灰白	灰白	石英、角閃石、長石、輝石、黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区 SD1	i 層	23	
第25図 1	土師器 皿	 1.5	5分の1	ナデ 底部　糸切り	回転ナデ	良	灰白	灰白	石英、黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	6	
2	土師器 皿	 1.3	5分の1	ナナメ方向ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	9	赤色顔料が少し残っている
3	土師器 皿	 2.6	4分の1	ナデ	ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	8	
4	土師器 皿	 2.0	4分の1	回転ナデ	ナデ	良	橙	橙	角閃石、石英の砂粒を含む	Ⅰ区	1層	10	
5	土師器 高坏	 残 5.5	脚部小片	ヘラケズリ後ナデ	ナデ、指頭圧痕	良	にぶい橙	にぶい黄橙	石英、角閃石、長石、黒、赤色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	11	
6	須恵器 坏	 復 6.7 残 2.2	底部小片	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ ナデ	良	灰	黄灰	2㎜以下の白、黒色砂粒を多く含む	Ⅰ区	1層	40	
7	須恵器 坏	 残 1.8	底部のみ完形	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	青灰	青灰	2㎜以下の黒、白色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	18	
8	須恵器 坏	 残 3.8	底部小片	回転ナデ 底部　ケズリ後ナデ	ナデ	良	黄灰	灰黄	1㎜以下の白、黒色砂粒を多く含む	Ⅰ区	1層	24	
9	須恵器 皿	 1.5	5分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰白	黒色粒、石英を多く含む	Ⅰ区	1層	7	
10	土師器 香炉蓋	 残 1.9	口縁部小片	ナデ	ナデ 指頭圧痕	良	淡黄	淡黄	長石、黒色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	31	
11	陶磁器 椀	 残 3.3	口縁部小片	回転ナデ	回転ナデ	良	にぶい黄褐	にぶい黄褐	0.1㎜程度の白、黒色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	25	施釉
12	龍泉窯 青磁椀	 残 3.3	口縁部小片	回転ナデ	回転ナデ	良	灰オリーブ	灰オリーブ	長石、輝石、赤、褐色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	29	外面に連弁状の文様あり 施釉
13	陶磁器 椀	 残 3.0	口縁部小片	回転ナデ	回転ナデ	良	オリーブ灰	オリーブ灰	0.1㎜程度の白、黒色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	26	施釉

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第25図 14	白磁 椀	残 2.4	口縁部 小片	回転ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰白	角閃石、長石、輝石、砂粒を含む	Ⅰ区	1層	30	内・外面に二本線の染付が施されている 施釉
15	陶磁器 椀	残 2.7	口縁部 小片	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	良	灰白	灰白	長石、輝石、砂粒を含む	Ⅰ区	1層	28	施釉
16	陶磁器 椀	残 3.4	口縁部 小片	回転ナデ	回転ナデ	良	にぶい赤褐	にぶい赤褐	0.1㎜程度の白、黒色砂粒を含む	Ⅰ区	表土一括	27	施釉
17	陶磁器 皿	残 2.0	底部 小片	回転ナデ　ヘラケズリ　ハケメ	回転ナデ、連弁文	良	灰白	灰白	長石、黒色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	12	施釉
第26図 1	土錘	縦 4.8 幅 1.3 厚さ 1.2 孔径 0.5	ほぼ完形	指ナデ 全体に鉄分が付着している		良	灰黄褐		0.5㎜程度の白、褐色砂粒を含む	Ⅰ区	埋土一括	39	刺網系
2	土錘	縦 3.5 幅 1.5 厚さ 1.5 孔径 0.5	完形	指ナデ 指押さえ		良	浅黄橙		2㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	38	袋網系
第30図 1	縄文 深鉢	残 6.9	小片	ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4㎜以下の長石、角閃石、輝石、雲母を含む	Ⅱb区 S009	一括	179	
第31図 1	縄文 深鉢	残 3.8	小片	ナデ、沈線	ナデ	良	浅黄橙	褐灰	0.5～2㎜の石英、砂粒を含む	Ⅱb区 S015	埋土一括	80	内面黒色処理
2	弥生 甕	残 6.7	小片	口縁端部　刻目 口縁部　ナデ 胴部　ハケメ後ナデ、沈線あり	ナデか	良	にぶい褐	にぶい褐	0.5～7.5㎜の雲母、石英を多く含む	Ⅱb区 S015	埋土一括	81	外面に黒斑あり
3	弥生 甕	残 6.5	小片	ナデ	ナデ	良	にぶい褐色	橙	0.5～7㎜の角閃石、石英、砂粒、長石、雲母を含む	Ⅱb区 S015	No.5	6	
4	弥生 甕	残 5.8 残 5.8	小片	口縁部刻み目突帯文　ナデ	ナデ	良	灰褐	にぶい黄橙	0.5～3㎜の輝石、長石を含む	Ⅱb区 S015	埋土一括	5	外面すす付着
5	縄文 深鉢	残 6.8	小片	ナデ	ナデ	良	灰褐	にぶい黄橙	0.5～2㎜の角閃石、輝石、長石を含む	Ⅱb区 S015	1層	4	
6	弥生 甕	復 6.3 残 4.2	5分の1	ミガキ 底部　ミガキ	ナデ	良	明赤褐	赤灰	0.5～2㎜の黒色粒、石英、長石を多く含む	Ⅱb区 S015	埋土一括	7	外面に黒斑あり
第35図 1	須恵器 甕	復 47.5 残 9.4	口縁部 4分の1	回転ナデ タタキ後ナデ	回転ナデ	良	黒	オリーブ黒	0.5㎜以下の長石、雲母を含む	Ⅱb区 S014	No.1 No.3	10	灰かぶり 胎土分析サンプル№1
2	縄文 深鉢	残 5.7	小片	ナデ 穿孔	ナデ 穿孔	良	灰黄褐	黒褐	2㎜以下の褐、灰、黒色砂粒を含む	Ⅱb区 S013	埋土一括	190	外面から穿孔
3	土師器 高坏	残 6.6	5分の1	ナデ ヘラケズリ後ナデ	坏部　ナデ 脚部内　ヘラケズリ後ナデ	良	橙	褐灰	0.5～5㎜の角閃石、石英、長石、砂粒を多く含む	Ⅱb区 S013	No.16	8	脚部内に指頭圧痕あり
4	須恵器 平底瓶	14.4 15.7 残 21.8	3分の1	タタキ　自然釉 底部　ヘラケズリ	回転ナデ	良	浅黄	灰黄褐	0.5㎜以下の白、褐、黒色の砂粒を含む	Ⅱb区 S014	1層	11	ヘラ文字　外面に自然釉　胎土分析サンプル№2

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第37図 1	土師器 坏	11.9 6.9 4.7	ほぼ完形	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	浅黄橙	橙	1㎜以下の黒、白、灰色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	埋土一括	146	
2	土師器 坏	12.9 5.9 4.7	5分の4	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	浅黄橙	にぶい橙	1～9㎜の褐色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.32	145	
3	土師器 坏	13.0 7.0 4.7	ほぼ完形	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	にぶい黄褐	にぶい黄橙	2㎜以下の灰、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.11, 16,52	144	
4	土師器 坏	復 12.4 7.2 4.6	底部ほぼ完形	回転ナデ 底部　回転ヘラ切りか	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の灰、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.27, 30	142	
5	土師器 坏	復 13.6 復 7.0 4.1	2分の1	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後ナデ 板目跡あり	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	灰黄	灰黄	1㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.28, 29,31	143	
6	土師器 坏	 残 3.2 	小片	回転ナデ 回転ヘラケズリ	摩滅している	良	浅黄橙	浅黄橙	3㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.30	140	
7	土師器 坏	 残 3.8	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	橙	橙	2㎜以下の褐、白、灰色、赤色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.40	137	
8	土師器 坏	 残 3.0	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の、褐、白色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.45	138	
9	土師器 坏か	 残 1.2	小片	ヘラケズリ 底部　ヘラ切りか　ヘラ記号あり	回転ナデ	良	浅黄橙	灰白	1㎜以下の黒、褐、白色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	埋土一括	134	
10	土師器 坏	 残 1.5	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.3	141	
11	土師器 坏	 残 1.8	小片	回転ナデか 底部　摩滅している	摩滅している	良	灰白	灰白	2㎜以下の灰色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.6	139	
12	土師器 甕	 残 1.7	小片	ナデ	ナデ	良	暗灰黄	暗灰黄	3㎜以下の角閃石、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 S008	No.42	136	
13	土師器 甕	復 26.0 残 11.3	口縁部4分の1	タタキ後ヨコ方向のハケメ 口縁部　ハケ後ナデ	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	良	にぶい橙	にぶい黄橙	1～3㎜の白色砂粒、石英、角閃石を多く含む	Ⅲ区 S008	埋土一括、No26,43	133	
14	土師器 甕	 復 21.6 残 8.8	小片	ハケメ	ヘラケズリ	良	にぶい黄褐	にぶい黄褐	4㎜以下の褐、白、黒色砂粒、石英を含む	Ⅲ区 S008	埋土一括、No14,15	135	
第38図 1	須恵器 坏	復 13.2 残 5.0	坏部5分の3	回転ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	橙	浅黄橙	3㎜以下の黒、白、灰色砂粒を含む	Ⅲ区 S017	一括	148	高台はがれる
2	土師器 甕	 残 2.8	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	浅黄橙	にぶい橙	2.5㎜以下の灰、黒、白色砂粒を含む	Ⅲ区 S017	一括	147	すす付着
第39図 1	弥生甕	 残 6.5	小片	口縁端部　指頭圧痕　口縁部ナデ 胴部　突帯3条	ナデ	良	灰褐	にぶい橙	0.5～2㎜の長石、角閃石、砂粒を含む	Ⅱb区 S011	No.17	13	突帯あり口縁部に指頭圧痕

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法 外面	整形手法 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
第39図 2	縄文 深鉢	残 4.1	小片	沈線	摩滅している	良	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1㎜以下の角閃石、石英、褐色砂粒を含む	Ⅱb区 S011	埋土 一括	71	
3	須恵器 甕	18.0 残 4.9	口縁部 4分の1	回転ナデ タタキ　格子文	回転ナデ タタキ　同心円文	良	灰白	灰	1㎜以下の長石、輝石を含む	Ⅱb区 S011	埋土 一括	14	灰かぶり 胎土分析サンプル №6
4	土師器 坏	復 13.1 7.2 3.3	2分の1	ナデ　ケズリ 底部　ヘラ切り 後ナデ	ナデ	良	橙	橙	0.5～5.5㎜の黒・赤色粒、石英、砂粒、長石を含む	Ⅱb区 S011	埋土 一括	15	
5	須恵器 椀	復 13.0 8.0 4.9	2分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	灰	灰	0.5～2㎜の黒色粒、石英、砂粒、長石を含む	Ⅱb区 S011	埋土 一括	16	外面灰かぶり 胎土分析サンプル №3
6	須恵器 坏	9.7 残 1.3	小片	回転ナデ 底部　ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	良	灰	褐灰	0.5 ～ 4㎜ の黒・赤色粒、砂粒、長石を多く含む	Ⅱb区 S011	埋土 一括	17	
第41図 1	縄文 深鉢	残 6.2	小片	山形押型文	ナデ	良	にぶい 黄橙	灰黄褐	4㎜以下の長石、角閃石を含む	Ⅲ区	1層一括	164	
2	縄文 深鉢	残 6.7	小片	山形押型文	ナデ	良	灰黄褐	にぶい 黄橙	5㎜以下の長石、角閃石、石英、雲母を含む	Ⅲ区 Q7G	1層一括	162	
3	縄文 深鉢	残 4.4	小片	山形押型文	ナデ	良	にぶい 褐	橙	0.5～3㎜の石英、角閃石、赤色砂粒を多く含む	Ⅱb区	1層一括	72	
4	縄文 深鉢	残 4.8	小片	山形押型文	ナデ	良	橙	橙	0.5～3.5㎜の石英、角閃石、黒、赤色砂粒を多く含む	Ⅱb区 M4G	1層一括	73	
5	縄文 深鉢	残 6.7	小片	楕円押型文	ナデ	良	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	5㎜以下の長石、角閃石、石英、雲母を含む	Ⅲ区 P7G	1層一括	163	
6	縄文 深鉢	残 6.1	小片	楕円押型文 山形押型文	ナデ	良	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	3㎜以下の長石、角閃石、輝石、石英を含む	Ⅱa区	1層一括	181	
7	縄文 深鉢	残 4.2	小片	山形押型文 爪型文	ケズリ	良	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	4㎜以下の長石、角閃石、雲母を含む	Ⅲ区 Q7G	1層一括	180	
8	縄文 深鉢	残 5.7	小片	楕円押型文	ナデ	良	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1.5㎜以下の長石、角閃石、石英、赤色粒を含む	Ⅲ区	1層一括	165	
9	縄文 深鉢	残 6.2	小片	ナデ　列点文 沈線	ナデ	良	明褐色	明褐色	2㎜以下の長石、石英、黒色粒を含む	Ⅱa区	1層一括	182	
10	縄文 深鉢	残 4.8	小片	ナデ　突帯 列点文	ナデ	良	にぶい 黄橙	灰	5㎜以下の長石、角閃石、輝石、赤色粒を含む	Ⅲ区	1層一括	172	
11	縄文 深鉢	残 3.5	小片	ナデ　突帯 列点文	ナデ	良	黄灰	黄灰	1㎜以下の長石、角閃石、雲母を含む	Ⅲ区	1層一括	178	
12	縄文 深鉢	残 6.3	口縁部 小片	貼り付け突帯 列点文 ナデ	ナデ	良	灰褐	橙	7㎜以下の砂粒、小石を含む	Ⅱb区 N6G	1層一括	33	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第41図 13	縄文 深鉢	残 4.2	小片	ナデ　沈線	ナデ	良	オリーブ黒	灰黄褐	5㎜以下の長石、角閃石、石英、雲母を含む	Ⅰ区	1層一括	167	
14	縄文 深鉢	残 4.4	小片	沈線文	ナデ	良	黒褐	にぶい橙	6㎜以下の長石、角閃石、輝石、雲母を含む	Ⅲ区 P7G	2層一括	171	
15	縄文 深鉢	残 2.8	小片	列点文	ナデ　沈線	良	にぶい褐	褐灰	1㎜以下の長石、角閃石、輝石、雲母を含む	Ⅲ区 Q5G	1層一括	173	
16	縄文 深鉢	残 3.3	小片	文様	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5㎜以下の長石、角閃石、輝石を含む	Ⅲ区 R5G	1層一括	175	
17	縄文 深鉢	残 6.0	小片	沈線	摩滅しているがナデか	良	橙	橙	0.5～3㎜の長石、角閃石、石英を多く含む	Ⅱb区	1層	84	
18	縄文 深鉢	残 4.6	小片	沈線	ナデ	良	にぶい橙	橙	0.5～3㎜の長石、角閃石を多く含む	Ⅱb区 L5G	1層	77	
19	縄文 深鉢	残 4.3	小片	文様	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の長石、輝石を含む	Ⅲ区 Q5G	1層一括	174	
20	縄文 深鉢	残 3.9	小片	文様	ナデ	良	灰褐	灰黄褐	1㎜以下の長石、角閃石、石英を含む	Ⅲ区 R5G	1層一括	177	
21	縄文 深鉢	残 4.5	小片	ナデ　沈線	ナデ	良	にぶい黄橙	灰黄	1.0㎜以下の長石、石英、雲母を含む	Ⅰ区	1層一括	166	
22	縄文 深鉢	残 4.5	小片	山形押型文後ナデ	摩滅しているがナデか	良	にぶい黄橙	灰黄褐	0.5～3.5㎜の石英、角閃石、黒、赤色砂粒を多く含む	Ⅱb区 L6G	1層一括	83	内面に黒斑あり
23	縄文 深鉢	残 3.6	小片	突帯　列点文	ナデ	良	黒褐	灰黄褐	1㎜以下の長石、角閃石を含む	Ⅲ区 R5G	1層一括	176	
24	縄文 深鉢	残 3.2	小片	突帯	ナデ	良	褐灰	にぶい黄橙	1㎜以下の長石、輝石、石英を含む	Ⅲ区 Q5G	1層一括	170	
25	縄文 深鉢	残 3.3	小片	沈線による平行線	摩滅しているがナデか	良	にぶい黄橙	橙	0.5～1.5㎜の石英、黒色砂粒を多く含む	Ⅱb区 L5G	1層一括	82	外面に黒斑あり
26	縄文 深鉢	残 2.8	小片	沈線	ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	0.5～4.0㎜の長石、雲母、石英、赤色砂粒を多く含む	Ⅱb区 N4G	1層	79	
27	縄文 深鉢	残 2.6	小片	ナデ 沈線　刺突文	ハケメ後ナデ	良	橙	にぶい橙	0.5～3㎜の石英、角閃石、黒色砂粒を多く含む	Ⅱb区 N6G	1層一括	75	
28	縄文 深鉢	残 2.5	小片	沈線	ナデ	良	にぶい黄橙	灰	0.5～1㎜の長石、砂粒を含む	Ⅱb区 L6G	1層	76	
29	縄文 深鉢	残 2.9	小片	ハケメ後ナデ 沈線文あり	粗いナデ	良	にぶい褐	にぶい褐	0.5～2.5㎜の石英、小石、砂粒を多く含む	Ⅱb区 N5G	1層一括	74	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第41図 30	縄文 深鉢	残 2.5	小片	沈線	ナデ	良	にぶい 褐	にぶい 赤褐	0.5～2㎜の石英、角閃石、長石を含む	Ⅱb区	1層	67	
第42図 31	縄文 小型深鉢	9.8 3.8 10.7 6.3	ほぼ完形	ミガキ後にナデ 沈線あり	ミガキ後にナデ 底部にクレーター状の跡あり	良	褐灰	褐灰	0.5㎜以下の砂粒を多量に含む	Ⅱb区	1層	3	黒色磨研　口縁部にリボン状の突起 沈線あり
32	縄文 深鉢	18.5 5.6 10.2	ほぼ完形	ミガキ後にナデ 沈線あり	ミガキ後にナデ	良	にぶい 赤褐	褐灰	2㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅱa区 J5G	1層一括	202	黒色磨研 沈線の凹部分の一部に赤彩
33	縄文 浅鉢	復 15.0 残 2.7	口縁部 6分の1	ミガキ 沈線	ミガキ 沈線	良	黒褐	褐灰	3㎜以下の白、褐色砂粒、雲母、黒曜石、石英を含む	Ⅱb区	1層	61	黒色磨研
34	縄文 深鉢	残 2.5	小片	ミガキ	ミガキ	良	黒褐	黒褐	1㎜以下の石英、黒、白砂粒を含む	Ⅲ区 南サブトレンチ	2層一括	161	黒色磨研
35	縄文 深鉢	残 2.3	小片	ナデ	ナデ	良	浅黄橙	にぶい 黄橙	1㎜以下の褐、灰色砂粒を含む	Ⅱa区	1層	198	口縁部下は継ぎ目で欠落している
36	縄文 深鉢	残 3.9	小片	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	良	黄灰	黒褐	1㎜以下の白、灰色砂粒を含む	Ⅱa区	1層	199	
37	縄文 深鉢	残 2.7	口縁部 7分の1	列点文	ナデ	良	黒褐	灰黄褐	1㎜以下の長石、輝石を含む	Ⅰ区	1層一括	169	
38	縄文 深鉢	残 3.9	口縁部 小片	ケズリ後ナデ 沈線あり	ケズリ後ナデ	良	黄灰	黄灰	0.5～2.5㎜の小石、石英、角閃石を含む	Ⅱb区	1層	54	外面にすす付着
39	縄文 深鉢	23.5 残 9.5	口縁部 3分の2	ナデ	ナデ 口縁端部に沈線あり	良	暗灰黄	灰黄	0.5㎜以下の細砂粒を含む	Ⅱb区	1層	35	黒色磨研　口縁部にリボン状突起
40	縄文 深鉢	6.2 残 4.1	小片	ミガキ後ナデ 沈線	摩滅のため調整判別不能	良	暗灰	にぶい 黄橙	長石、石英、輝石、砂粒、雲母を含む	Ⅱb区	埋土 一括	1	黒色磨研 39と同一個体か
41	縄文 深鉢	復 23.6 残 4.6	口縁部 小片	ミガキ後ナデ 胴部　ミガキ	ミガキ後ナデ 胴部　ミガキ	良	黒	黒	1㎜以下の角閃石、石英、雲母、白色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	57	黒色磨研
42	縄文 深鉢	復 16.6 残 3.6	小片	ミガキ 沈線	ミガキ	良	灰黄	灰黄	0.5㎜以下の長石、雲母を含む	Ⅲ区	1層	92	
43	縄文 深鉢	残 3.4	小片	ナデ 穿孔	ナデ 穿孔	良	褐灰	褐灰	1㎜以下の褐、白、黒色砂粒、石英、雲母を含む	Ⅱb区	1層	191	内側から穿孔
44	縄文 深鉢	残 9.3	口縁部 小片	ナデ	ナデ 口縁端部に1条沈線あり	良	にぶい 橙	にぶい 橙	6㎜以下の砂粒、小石を含む	Ⅱb区	1層	26	
45	縄文 深鉢	残 5.9	口縁部 小片	ナデ	ナデ	良	灰赤	にぶい 赤褐	2㎜以下の砂粒を含む	Ⅱb区 N6G	1層	28	
46	縄文 深鉢	残 9.3	小片	ケズリ 口縁端部　ナデ	ミガキ　ナデ	良	黒褐	にぶい 黄橙	6㎜以下の褐、灰色砂粒、雲母、石英、角閃石を含む	Ⅱa区	1層一括	204	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第42図 47	縄文深鉢	残 4.4	底部 5分の2	ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	灰黄褐	0.5～3㎜の長石、角閃石、赤色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	94	
48	縄文深鉢	復 7.8 残 6.8	底部 5分の2	ケズリ	ケズリ	良	褐灰	褐灰	1㎜程度の石英、角閃石、褐色の石を多く含む	Ⅱb区	1層	24	黒斑あり
49	縄文深鉢	復 11.0 残 4.0	底部 4分の1	ケズリ 底部　ナデか	ケズリ	良	にぶい橙	黒	1㎜以下の白、黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	95	内面黒色処理
第43図 50	縄文深鉢	復 47.4 復 50.5 残 23.3	10分の1	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	良	橙	橙	0.5～5.0㎜の長石、輝石、角閃石赤色粒を多量に含む	試掘 5TP	土坑埋土一括	213	平成15年度試掘時出土遺物、本調査時Ⅲ区
51	縄文深鉢	復 38.0 残 21.6	口縁部 8分の1	突帯より上部に強いナデ 下部は粗いケズリ	ケズリ　ナデ	良	明赤褐	黒褐	4㎜以下の褐、灰、黒色砂粒を含む	Ⅱ区 中央ベルト	1層一括	201	
52	縄文深鉢	復 33.8 残 6.1	口縁部 6分の1	ミガキ	ミガキ	良	灰黄	黒褐	0.5～1.5㎜の長石、輝石、角閃石を多く含む	Ⅲ区	1層	93	
53	縄文深鉢	残 12.3	胴部 8分の1	ミガキ　ナデ	ミガキ　ナデ	良	黒褐	褐灰	3㎜以下の黒、白、灰色砂粒を含む	Ⅲ区 Q7G	1層	155	
54	縄文深鉢	39.2 残 19.9	小片	ハケメ後ナデ	ミガキ	良	灰褐	明赤褐	0.5～6㎜の長石、角閃石、石英、砂粒を多く含む	Ⅱb区 L6G	1層一括	85	外面、内面両方から穿孔
第57図 55	弥生甕	復 12.2 残 3.3	口縁部 小片	ナデ	摩滅しているがミガキ後ナデか	良	にぶい赤褐	明赤褐	0.5～3㎜の小石、砂粒、角閃石を含む	Ⅱb区	1層	55	
56	弥生甕	残 12.6	小片	刻み目突帯 ナデ　ハケメ 沈線	ハケメ後ナデ	良	にぶい橙	明褐色	4㎜以下の石英、雲母、黒色粒を含む	Ⅱa区	1層一括	184	
57	弥生甕	残 4.9	小片	ナデ	ナデ	良	橙	にぶい褐	0.5～4㎜の角閃石、石英、砂粒を多く含む	Ⅱb区	1層	30	
58	弥生甕	残 9.3	小片	ハケメ　ナデ 刻み目突帯	ハケメ後ナデ	良	黒	にぶい黄橙	6㎜以下の長石、石英、黒色粒を含む	Ⅱa区	1層一括	183	
59	弥生甕	残 4.6	底部 2分の1	ケズリ　ハケメ後ナデ	ナデ	良	にぶい橙	褐灰	2㎜以下の白、黒、灰、褐色砂粒、石英を含む	Ⅲ区	1層	96	
60	弥生甕	7.0 残 11.2	底部のみ完形	ハケメ 底部　ナデ ヘラケズリ	ナデか	良	にぶい黄褐	褐灰	1～5㎜の褐色の砂粒を含む	Ⅱb区	1層	9	
第58図 61	土師器鉢	40.0 残 12.7	口縁部 4分の1	ハケメ	ハケメ	良	黒褐	にぶい褐	0.5～4㎜の赤色粒、角閃石、石英を多く含む	Ⅱb区 K5G	1層一括	34	
62	土師器鉢	復 28.5 残 5.4	小片	ハケメ後ナデ ハケメ	ハケメ後ナデ ヘラケズリ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～6.5㎜の石英、角閃石、黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	99	
63	土師器鉢	残 4.6	口縁部 小片	ナデ	ナデ	良	黒褐	にぶい黄橙	0.5～3㎜の長石、輝石、角閃石を多く含む	Ⅱb区	1層	60	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第58図 64	土師器 鉢	残 3.7	小片	ナデ 粗いナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～4.5㎜の石英、角閃石、赤色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	97	
第59図 65	土師器 甕	復 28.0 残 7.2	口縁部4分の1	口縁部付近ナデ 胴部　ハケメ	口縁部付近ナデ 胴部　タテ方向のケズリ	良	浅黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の褐色砂粒を含む	試掘3TP	1層一括	211	平成15年度試掘時出土遺物、本調査時Ⅱｂ区
66	土師器 甕	復 27.4 残 5.8	口縁部6分の1	口縁部付近ナデ 胴部　ハケメ	口縁部付近ナデ 胴部　タテ方向のケズリ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1.5㎜以下の白、黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	102	
67	土師器 甕	復 27.2 残 9.8	口縁部5分の1	口縁部付近ナデ 胴部　ハケメ	口縁部付近ナデ 胴部　タテ方向のケズリ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	試掘3TP	1層一括	212	平成15年度試掘時出土遺物、本調査時Ⅱｂ区
68	土師器 甕	復 19.4 残 7.3	口縁部4分の1	口縁部付近ナデ 胴部　ハケメ	口縁部付近ナデ 胴部　タテ方向のケズリ	良	にぶい橙	にぶい黄橙	1.5㎜以下の白、黒、褐色砂粒、石英、角閃石を含む	Ⅲ区	1層	101	
69	土師器 甕	復 15.7 残 9.1	口縁部5分の1	口縁部付近ナデ 胴部　ハケメ	口縁部付近ナデ 胴部　タテ方向のケズリ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～4㎜の褐、黒色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	100	
70	土師器 甕	残 5.0	口縁部小片	口縁部付近ナデ 胴部　ハケメ	口縁部付近ナデ 胴部　タテ方向のケズリ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 Q7G	2層一括	156	
71	土師器 甕	残 3.9	小片	口縁部ナデ 胴部　ハケメ後ナデ	口縁部　ハケメ後ナデ 胴部　ナデ	良	にぶい橙	浅黄橙	0.5～4㎜の赤色粒、角閃石、長石、石英を多く含む	Ⅱｂ区	1層	29	外面すす付着
72	土師器 甕	残 8.1	口縁部小片	口縁部ナデ 胴部　ハケメ 指頭圧痕あり	口縁部ナデ 胴部　ケズリ	良	にぶい黄褐	黄褐	5㎜以下の砂粒を含む	Ⅱｂ区	1層	25	
73	土師器 甕	残 7.6	口縁部小片	ナデ	ナデ 胴部　ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の砂粒を含む	Ⅱｂ区	1層	27	
74	土師器 甕	残 5.0	小片	ナデ	口縁部　ナデ 上方向のケズリ	良	浅黄橙	灰黄褐	4㎜以下の黒、灰、白、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 Q6G	1層一括	160	
75	土師器 香炉？	復 4.6 残 3.0	底部5分の1	ナデ	ナデ	良	にぶい黄橙	浅黄橙	4㎜以下の黒、灰、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 Q6G	1層一括	152	脚部欠損 3方向に脚
76	土師器 甕	10.2 残 4.1	小片	ハケメ後ナデ 底部　摩滅している	粗いナデ	不良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～3㎜の石英、角閃石、砂粒を多く含む	Ⅱｂ区 M7G	1層	66	
77	土師器 甕	8.0 残 4.1	底部2分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～5㎜の小石、赤色砂粒を含む	Ⅱｂ区	1層	48	
78	土師器 甕	7.4 残 5.5	小片	ヘラケズリ後ナデ 底部　ナデ	ケズリ　指頭圧痕あり	良	橙	橙	0.5～4㎜の黒色粒、角閃石、石英、砂粒、長石を含む	Ⅱｂ区	埋土一括	2	
79	土師器 甕	8.0 残 3.0	底部のみ完形	ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	3.5㎜以下の赤色粒、角閃石、輝石、石英を含む	Ⅱｂ区	1層一括	23	
80	土師器 壷	復 13.0 残 5.1	口縁部小片	タテ方向ハケメのちナデ	ヨコ方向ハケメのちナデ	良	橙	にぶい橙	0.5～3.5㎜の石英、雲母，黒色粒を含む	Ⅱｂ区	1層	12	ヘラ記号

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第60図 81	土師器 坏	復 12.1 6.5 4.2	3分の2	回転ナデ 底部　回転ヘラ切りか	回転ナデ	不良	浅黄橙	灰白	3㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	117	
82	土師器 坏	12.2 7.2 4.5	4分の3	回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～2㎜の長石、黒赤色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	46	
83	土師器 坏	復 12.4 復 5.8 4.3	3分の1	回転ナデ　ヘラケズリ 底部　ヘラ切りか	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	1～5㎜の灰、白、褐色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	125	
84	土師器 坏	11.8 5.9 4.0	3分の2	胴部　回転ナデ 底部　回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～2㎜の長石、黒赤色砂粒を含む	Ⅱb区 K6G	1層	47	ロクロ右回り
85	土師器 坏	復 12.2 復 7.5 3.0	3分の1	回転ナデ、ヘラケズリ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	橙	橙	2㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅱb区 L6G	1層	53	
86	土師器 坏	復 14.0 復 8.0 4.1	7分の1	回転ナデ 底部　回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 Q7G	1層	157	
87	土師器 坏	復 16.0 残 5.2	口縁部 4分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	にぶい黄橙	浅黄橙	1～2㎜の褐、白色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	113	
88	土師器 坏	復 12.0 復 6.7 5.6	3分の1	回転ナデ　ヘラケズリ 底部　回転ヘラケズリか	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の褐、白、黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	121	
89	土師器 坏	復 15.6 残 5.9	口縁部 3分の2	回転ナデ	回転ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	2㎜以下の褐、白、黒色砂粒、角閃石を含む	Ⅲ区	1層	126	
90	土師器 坏か	復 14.8 残 4.5	口縁部 3分の1	回転ナデ 回転ヘラケズリか	回転ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	118	
91	土師器 坏	復 12.0 残 2.8	口縁部 8分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	にぶい赤褐	浅黄橙	1㎜以下の白、褐色砂粒、角閃石を含む	Ⅲ区	1層	103	外面赤彩
92	土師器 坏	復 15.0 残 4.5	口縁部 3分の1	回転ナデ 回転ヘラケズリか	黒色処理	良	浅黄橙	暗灰	2㎜以下の黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	119	内面黒色処理
93	土師器 椀	復 15.4 復 7.8 5.6	2分の1	回転ヘラケズリ 底部　回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい橙	2㎜以下の褐、灰色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	130	
94	土師器 坏	 9.0 残 3.3	底部ほぼ完形	回転ナデ　調整不明	黒色処理	良	にぶい黄橙	黒	2㎜以下の褐、白、灰色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	131	内面黒色処理
95	土師器 坏	 復 8.4 残 1.8	底部 2分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	ナデ	良	浅黄橙	にぶい橙	1㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 P7G	1層一括	150	
96	土師器 坏	 復 7.6 残 1.8	底部 2分の1	回転ナデ 底部　ケズリ後ナデ	黒色処理	良	にぶい黄橙	黒	3㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	129	内面黒色処理
97	土師器 坏	 6.2 残 2.8	底部ほぼ完形	回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	浅黄橙	にぶい橙	1～2㎜の黒、褐色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	114	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第60図 98	土師器 坏	 7.7 残 2.8	底部 4分の3	回転ナデ 底部　ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ 後ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	2㎜以下の褐、白、黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	123	
99	土師器 坏か	 復 6.4 残 2.9	底部 2分の1	回転ナデ　ヘラケズリ 底部　ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ 後ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の褐、黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	122	
100	土師器 坏	 6.6 残 2.7	底部 4分の3	回転ナデ 底部　ヘラ切り	回転ナデ 底部　回転ナデ 後ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	120	
101	土師器 坏	 6.2 残 3.3	4分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り	回転ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～4㎜の石英、角閃石、赤色砂粒を含む	Ⅱb区 M6G	1層一括	64	
102	土師器 坏	 6.8 残 3.9	3分の2	回転ナデ 底部　ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～2㎜の長石、砂粒を含む	Ⅱb区	1層	18	
103	土師器 坏	 3.1 残 2.9	2分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～1.5㎜の長石、黒、色砂粒を含む	Ⅱb区 M6G	1層一括	63	底部にヘラ記号
104	土師器 坏	 復 6.4 残 1.9	底部 5分の2	回転ナデ 底部　ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰黄	1㎜以下の砂粒を含む	Ⅲ区 Q6G	1層一括	153	
105	土師器 坏	復 15.0 復 6.8 5.8	2分の1	回転ナデ 底部　ナデ ヘラケズリか	黒色処理 ミガキ 底部　ナデ	良	浅黄橙	暗灰	2㎜以下の褐、灰色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	128	内面黒色処理
106	土師器 皿	 復 7.2 残 3.5	底部 3分の1	回転ナデ 底部　ナデ ヘラケズリか	黒色処理 ミガキ 底部　ナデ	良	にぶい黄橙	暗灰	1㎜以下の黒色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	59	内面黒色処理
107	土師器 坏	 6.8 残 3.3	底部のみ完形	回転ナデ 底部　ナデ ヘラケズリか	黒色処理 ミガキ	良	にぶい橙	暗灰	1㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅱb区 M6G	1層一括	56	内面黒色処理
108	土師器 坏	 復 7.2 残 2.7	底部 3分の1	回転ナデ 底部　ナデ ヘラケズリか	黒色処理	良	浅黄橙	褐灰	1㎜以下の灰色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	127	内面黒色処理
109	土師器 坏	 残 4.5	小片	回転ナデ	黒色処理	良	にぶい黄橙	黒	4㎜以下の褐、白、黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	132	内面黒色処理
第61図 110	須恵器 坏	復 12.5 7.3 4.0	3分の2	回転ナデ 底部付近　ヘラケズリ 底部　ヘラ切り	回転ナデ	不良	浅黄橙	灰白	1～7㎜の褐、黒色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層一括	88	
111	須恵器 坏	復 13.4 復 7.0 3.5	8分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	良	灰	灰	0.5～1㎜の長石、輝石を多く含む	Ⅲ区	1層	110	
112	須恵器 坏	復 13.5 残 4.7	5分の1	回転ナデ 摩滅している	回転ナデ 摩滅している	良	浅黄橙	浅黄橙	0.5～2.5㎜の石英、黒・赤色砂粒を含む	Ⅱb区 M6G	1層	65	内面の一部に自然釉
113	須恵器 坏	 復 7.2 2.4	底部 4分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り 後ナデ	回転ナデ	良	灰	灰黄	1～5㎜の白、黒色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層一括	89	
114	須恵器 坏	 復 9.2 残 2.5	底部 4分の1	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り	回転ナデ 底部　回転ナデ 後ナデ	良	灰	にぶい橙	3㎜以下の褐、白、灰色砂粒を含む	Ⅱ区 中央ベルト	1層一括	206	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第61図 115	須恵器 坏	復 10.4 残 2.9	小片	回転ナデ	回転ヘラナデ 回転ナデ	良	にぶい褐	にぶい黄褐	0.5～6.5㎜の石英、角閃石、長石、輝石を含む	Ⅲ区	1層	106	火ぶくれしている
116	須恵器 坏	復 12.6 復 6.5 5.0	5分の1	回転ナデ 底部ヘラ切り後ナデ底部付近ヘラケズリ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	橙	橙	1～4㎜の白色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層一括	90	胎土分析サンプル№7
117	須恵器 坏	6.8 残 2.8	底部のみ完形	回転ナデ	回転ナデ	良	灰	灰	0.5～1㎜の長石、輝石を含む	Ⅱb区	1層	19	胎土分析サンプル№4
118	須恵器 坏	3.1	5分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰黄	0.5～4㎜の小石、黒、白色砂粒を含む	Ⅱb区 M5G	1層一括	62	
119	須恵器 坏	残 3.5	4分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り後粗いナデ	回転ナデ	良	褐灰	浅黄橙	0.5～2.5㎜の長石、石英を含む	Ⅱb区	1層	50	
120	須恵器 皿	復 16.0 復 10.4 残 2.8	4分の1	回転ナデ 底部　回転ヘラケズリ	回転ナデ	良	灰黄	灰黄	0.5～3㎜の長石、砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層一括	87	ロクロ右回り 胎土分析サンプル№5
121	須恵器 皿	12.4 2.0	5分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	灰オリーブ	灰オリーブ	0.5㎜程度の石英、輝石、砂粒を含む	Ⅱb区	1層	40	
122	須恵器 壷	復 9.2 残 2.9	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	黄灰	黄灰	0.5～1.5㎜の黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	107	
123	須恵器 壷	残 1.8	底部のみ完形	胴部　回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	灰黄褐	にぶい黄褐	5㎜以下の白色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	44	ひだすき有 ロクロ右回り
124	須恵器 坏	残 2.0	底部小片	回転ナデ 底部　回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	良	暗灰	灰	1㎜以下の緻密な砂粒を含む	Ⅲ区 Q7G	1層一括	159	
125	須恵器 坏	残 3.8	底部小片	摩滅している 回転ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰	1㎜以下の黒、白色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	45	内面に自然釉 胎土分析サンプル№9
126	須恵器 高坏	5.2 残 1.4	脚部 2分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	灰	灰黄	0.5㎜以下の黒色砂粒、小石を含む	Ⅱb区	1層	42	
127	須恵器 高坏	残 5.5	脚部小片	回転ナデ	絞り目が見られる	良	浅黄	浅黄	5㎜以下の砂粒、小石を含む	Ⅱb区 N3G	1層一括	32	
128	須恵器 皿	残 2.5	4分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	浅黄	灰黄	1㎜以下の細砂粒を含む	Ⅱb区	1層	20	内面に自然釉
129	須恵器 皿	1.9	小片	胴部　回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	灰黄褐	灰黄褐	2㎜程度の小石、黒色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	41	
130	須恵器 壷	残 2.3	小片	回転ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰白	2㎜以下の黒、白色砂粒を含む	Ⅲ区 P8G	1層一括	151	
131	須恵器 移動式竈	残 5.1	小片	ハケメか 沈線	ナデ	良	にぶい黄橙	橙	0.5～3㎜の長石、角閃石、石英を多く含む	Ⅲ区	1層	98	内面は火を受けている

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法 外面	整形手法 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
第61図 132	須恵器 坏蓋	復 1.5 1.4	3分の1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	良	灰	灰	0.5～2㎜の輝石、砂粒、小石を多く含む	Ⅱb区	1層	39	
133	須恵器 坏蓋	復 14.7 残 3.2	小片	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	良	黄灰	黄灰	0.5～5.5㎜の石英、砂粒を含む	Ⅲ区	1層	108	
134	須恵器 坏蓋	残 2.7	つまみ部分のみ完形	つまみ部　回転ナデ つまみ部付近ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰黄	0.5～1㎜の長石、黒色砂粒を多く含むきめ細かい	Ⅲ区	1層一括	86	
135	須恵器 甕	残 16.5	底部ほぼ完形	格子目タタキ	同心円文当て具痕	良	淡黄	灰赤	1～7㎜の褐、黒、白色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	105	丸底 灰かぶり
136	須恵器 甕	残 2.9	小片	回転ナデ 波状文	回転ナデ	良	にぶい褐	灰黄褐	0.5～2㎜の角閃石、黒色砂粒、小石を含む	Ⅱb区	1層	43	胎土分析サンプル№8
137	須恵器 甕	残 6.6	胴部片	格子目タタキ	回転ナデ	良	灰黄	灰黄	2㎜以下の長石、輝石を含む	Ⅲ区 P7G	1層一括	168	
第62図 138	土師器 坏	残 1.0	小片	ヘラケズリ 墨書あり	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	6㎜以下の褐色砂粒、小石を含む	Ⅲ区 P6G	1層一括	185	墨書土器
139	土師器 坏	残 2.6	小片	回転ナデ 墨書あり	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5㎜以下の褐、灰色砂粒を含む	Ⅱb区 N5G	1層一括	187	墨書土器
140	土師器 坏	残 2.8	小片	回転ナデ 墨書あり	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の褐、黒色砂粒を含む	Ⅱa区 J5G	1層一括	186	墨書土器
第63図 141	土師器 蓋	復 15.8 2.6	3分の1	回転ナデ 回転ヘラケズリか	回転ナデ	良	浅黄色	浅黄色	2㎜以下の白、褐色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	52	擬宝珠つまみあり 技法は須恵器
142	土師器 皿	残 1.9	3分の1	胴部　ナデ 底部　ヘラ切り後未調整	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～1.5㎜の黒色砂粒、石英を含む	Ⅱb区	1層	49	
143	土師器 皿	復 10.0 残 1.5	底部3分の1	ハケメ 底部　糸切り	回転ナデ	良	褐灰	にぶい橙	1㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	70	
144	土師器 坏	7.0 残 1.9	底部のみ完形	ナデ 底部　ヘラケズリ後ナデ	黒色処理	良	にぶい黄橙	暗灰	0.5～1㎜の長石、黒、赤色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	58	内面黒色処理
145	土師器 坏	残 2.0	小片、底部	ナデ 底部に工具痕	ナデ	良	灰白	灰白	0.5～2.5㎜の長石、石英、赤、黒色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	78	
146	土師器 鉢	5.4 残 7.3	底部ほぼ完形	ナデ 底部付近　ヘラケズリ後ナデ	ナデ	良	にぶい橙	浅黄橙	4㎜以下の黒、灰、白、褐色砂粒、小礫を含む	Ⅲ区 Q7G	1層一括	154	
147	瓦質 浅鉢	復 18.7 復 12.0 4.9	底部4分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	暗青灰	淡黄	4㎜以下の黒、灰、白、褐色砂粒、小礫を含む	Ⅲ区 Q7G	1層一括	158	高台はがれる
第64図 148	土製 紡錘車	長さ5.5 幅5.9 厚さ1.3	完形	表面　ヘラ切り後ナデ	裏面　ナデ	良	表面 灰白	裏面 にぶい黄橙	4㎜以下の褐、灰、白、黒色砂粒、石英、雲母を含む	Ⅱb区	1層	189	

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法 外面	整形手法 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
第64図 149	石製 紡錘車	長さ 6.6 幅 6.4 厚さ 1.0	完形	表面と側面はよく磨かれている						Ⅱb区	埋土一括	188	
150	土錘	長さ 4.8 幅 1.2 厚さ 1.1 孔径 0.4	完形	ナデ		良	浅黄橙		1㎜以下の褐、黒色砂粒を含む	Ⅰ区	1層一括	192	刺網系 最大径1.2㎝
151	土錘	長さ 6.0 幅 1.5 厚さ 1.5 孔径 0.4	完形	ナデ		良	にぶい黄褐		1㎜以下の白、黒色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	193	刺網系 最大径1.5㎝
152	土錘	長さ 5.0 幅 1.7 厚さ 1.6 孔径 0.6	完形	ナデ		良	にぶい黄褐		3㎜以下の褐、黒色砂粒を含む	Ⅰ区	1層	194	刺網系 最大径1.7㎝
153	装飾品 土玉	長さ 1.7 幅 1.7 厚さ 1.0 孔径 0.2	完形	ナデ 穿孔		良	明赤褐	明赤褐	1㎜以下の白、黒色砂粒、石英を含む	Ⅱb区	1層	195	表面から棒状工具を刺して孔を穿っている 最大径1.8㎝
第65図 154	土師器 皿	9.4 7.6 残 1.3	2分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　ナデ	良	赤橙	赤橙	3㎜以下の褐色砂粒を含む	試掘 3TP	1層一括	210	平成15年度試掘時出土遺物、本調査時Ⅱｂ区
155	須恵器 皿	復 12.8 復 10.0 2.0	7分の1	回転ナデ	回転ナデ	良	灰白	灰白	0.5～1㎜の長石、黒色砂粒を多く含む	Ⅲ区	1層	109	
156	土師器 皿	復 10.0 復 7.8 1.4	4分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り	回転ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	5㎜以下の白、黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	115	
157	土師器 皿	復 9.0 復 6.4 1.8	2分の1	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	回転ナデ	良	橙	橙	1㎜以下の白、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 P6G	1層一括	149	
158	土師器 皿	復 9.6 復 5.8 1.3	4分の1	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	灰白	浅黄橙	1㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅰ区	埋土一括	207	
159	土師器 皿	復 9.8 8.0 1.5	3分の1	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り後にナデ	回転ナデ 底部　ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の褐、灰、黒色砂粒を含む	Ⅱa区	1層	196	
160	土師器 皿	9.9 8.5 1.3	ほぼ完形	回転ナデ 底部　回転ヘラ切り	回転ナデ 底部　回転ナデ後ナデ	良	浅黄橙	浅黄橙	1㎜以下の黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区 R6G	1層	116	
161	土師器 皿	8.4 6.4 1.3	ほぼ完形	回転ナデ 底部　回転ヘラケズリ後ヨコ方向のナデ	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の褐、黒色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	124	
162	土師器 皿	9.0 6.8 1.7	完形	回転ナデ 底部　糸切り	回転ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	0.5～3.5㎜の赤色粒、石英を多く含む	Ⅱb区	1層一括	21	焼けひずみあり
163	土師器 皿	復 9.8 復 7.8 1.5	4分の1	回転ナデ 底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅱb区	1層	51	
164	土師器 皿	復 9.8 復 7.6 1.1	6分の1	回転ナデ ヘラ切り後ナデ 底部　ヘラ切り	回転ナデ	良	橙	浅黄橙	1㎜以下の白、黒、褐色砂粒を含む	Ⅲ区	1層	104	
165	土師器 皿	8.0 6.3 1.2	4分の3	回転ナデ　底部付近　ヘラケズリ　底部　ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 底部　ナデ	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の褐色砂粒を含む	試掘 4TP	1層一括	209	平成15年度試掘時出土遺物、本調査時Ⅱｂ区

挿図番号	器形	計測値（cm） 口径．底径．胴径．器高	残存度	整形手法		焼成	色調		胎土	出土遺構	出土層位	実測番号	備考
				外面	内面		外面	内面					
第65図 166	土師器 皿	復 9.5 6.6 1.8	2分の1	回転ナデ 底部　回転糸切り	回転ナデ	良	浅黄橙	にぶい橙	2㎜以下の長石、砂粒を含む	Ⅱb区	1層一括	22	内面にすす付着
167	土師器 皿	10.5 7.5 1.9	2分の1	回転ナデ 底部　糸切り後ナデ	回転ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の褐色砂粒を含む	Ⅱa区	1層	197	内面に黒変色している部分あり
168	土師器 皿	復 8.8 復 6.6 1.5	2分の1	回転ナデ 底部　糸切り	回転ナデ	良	橙	橙	1㎜以下の砂粒を含む	Ⅱb区 L4G	1層一括	38	
169	土師器 皿	6.8 5.6 1.7	完形	回転ナデ 底部と胴部の境に工具痕 底部　糸切り後ナデ	回転ナデ 底部　ナデ	良	橙	にぶい褐	2㎜以下の砂粒を含む	Ⅱb区 O6G	1層一括	31	
170	土師器 皿	復 8.6 復 7.0 1.4	4分の1	ナデ 底部　回転糸切り	ナデ	良	橙	橙	0.5㎜以下の長石、雲母を多く含む	Ⅱb区	1層	69	
171	土師器 皿	復 7.2 復 6.0 1.4	3分の1	ナデ 底部　回転糸切り	ナデ	良	にぶい橙	にぶい橙	0.5㎜以下の長石、雲母を多く含む	Ⅱb区	1層	68	
172	青磁椀	復 16.2 残 5.1	口縁部 8分の1	回転ナデ	回転ナデ後ヘラカキ文様を施す	良	灰オリーブ	灰オリーブ	きめが細かい	Ⅱa区	1層一括	203	施釉
173	青磁椀	復 8.2 残 4.0	口縁部 6分の1	回転ナデ	回転ナデ 口縁端部付近にヘラカキあり	良	灰	灰	きめが細かい	Ⅱ区 中央ベルト	1層一括	205	施釉
174	青磁椀	 残 4.2	口縁部 小片	回転ナデ	回転ナデ	良	オリーブ灰	灰	きめ細かい	Ⅲ区	1層一括	91	施釉
175	陶磁器 椀	 残 3.7	口縁部 小片	回転ナデ	回転ナデ	良	暗オリーブ	灰オリーブ	なめらかである	Ⅲ区	1層	112	施釉
176	青磁椀	 残 4.3	小片	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ後ヘラカキ文様	良	灰白	灰オリーブ	なめらかである	Ⅲ区	1層	111	施釉 ヘラカキ文様あり
177	青磁椀	 残 3.0	口縁部 小片	回転ナデ	回転ナデ、ヘラカキ	良	灰オリーブ	灰オリーブ	きめの細かい 1㎜以下の黒色粒を含む	Ⅱb区	1層	37	ヘラカキ 施釉
178	青磁椀	 復 5.4 残 1.3	底部 2分の1	回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り	回転ナデ、ナデ、ヘラカキ	良	オリーブ灰	オリーブ灰	きめが細かい	Ⅰ区	1層一括	208	ロクロ右回り 施釉
179	白磁椀	 残 1.3	底部 小片	染付け	回転ナデ	良	明オリーブ灰	明オリーブ灰	きめの細かい 1㎜以下の黒色粒を含む	Ⅱb区 M4G	1層一括	36	施釉

第３表　石器観察一覧表

挿図番号		実測番号	器　種	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	出土地点	出土層	備考
第27図	1	15	打製石鏃	黒曜石	1.10	0.80	0.30	0.10	試掘	酸化鉄層下	桑ノ木津留
	2	11	打製石鏃	黒曜石	1.10	1.30	0.30	0.30	Ⅰ区	１層	針尾？
	3	9	打製石鏃	黒曜石	1.20	0.80	0.25	0.20	Ⅰ区	１層	不純物多
	4	14	打製石鏃	チャート	1.40	1.20	0.30	0.50	Ⅰ区	１層	
	5	16	打製石鏃	チャート	1.40	1.60	0.20	0.30	Ⅰ区	１層	
	6	7	打製石鏃	チャート	1.50	1.30	0.30	0.30	Ⅰ区	１層	
	7	8	打製石鏃	チャート	2.40	1.40	0.30	0.80	Ⅰ区	１層	
	8	5	打製石鏃	チャート	2.20	1.60	0.50	1.35	Ⅰ区	１層	
	9	13	縦型石匙	チャート	6.40	2.10	0.90	10.90	Ⅰ区	１層	
	10	10	石匙	安山岩	4.30	7.40	1.40	28.10	Ⅰ区・SK14	覆ⅱ層	
	11	17	スクレイパー	チャート	3.50	5.45	0.80	15.70	試掘		
第28図	12	1	打製石斧	輝緑凝灰岩	13.90	5.40	0.70	74.10	Ⅰ区・SD10	覆ⅶ層	
	13	2	打製石斧	安山岩	11.65	5.90	1.60	120.10	Ⅰ区	１層	
	14	4	打製石斧	安山岩	9.60	6.00	1.50	108.20	Ⅰ区	１層	
	15	6	打製石斧	蛇紋岩	14.60	10.40	1.80	306.70	Ⅰ区・SD10	覆ⅳ層	
第29図	16	3	打製石斧	輝緑凝灰岩	25.90	9.50	1.70	478.70	Ⅰ区・SD10	覆ⅶ層	
	17	12	円盤状石器	安山岩	10.80	10.80	2.10	30.72	Ⅰ区・SD10	覆ⅱ層	
第30図	2	8	打製石鏃	黒曜石	2.27	1.58	0.68	1.58	Ⅲ区 S009	覆土	桑ノ木津留
第32図	1	50	打製石斧	安山岩	8.00	5.30	2.05	101.00	Ⅱb区S015	覆ⅱ層	
第33図	1	1	打製石鏃	チャート	2.70	1.75	0.40	1.10	Ⅲ区 S018	覆ⅰ層	
第34図	1	44	打製石斧	安山岩	14.50	8.40	2.30	272.00	Ⅲ区 S004	硬化面	
第36図	1	64	凹石	花崗岩	10.80	10.80	5.50	802.00	Ⅱb区S013	覆ⅰ層	
第40図	1	53	打製石斧	安山岩	8.10	4.90	2.00	86.00	Ⅱb区S011	覆ⅰ層	
	2	41	玉	蛇紋岩	4.60	3.20	1.60	22.80	Ⅱb区S011	覆ⅰ層	
第44図	1	5	打製石鏃	チャート	2.45	1.80	0.40	1.30	Ⅲ区	１層	
	2	4	打製石鏃	黒曜石	1.90	1.20	0.40	0.57	Ⅱａ区	１層	桑ノ木津留
	3	30	打製石鏃	黒曜石	2.40	1.45	0.50	1.07	Ⅱｂ区	１層	桑ノ木津留
	4	31	打製石鏃	チャート	1.80	1.90	0.35	0.75	Ⅱｂ区	１層	
	5	33	打製石鏃	黒曜石	2.80	1.35	0.30	0.54	Ⅱb区L６G	１層	姫島
	6	37	打製石鏃	黒曜石	2.10	1.35	0.35	0.49	Ⅱａ区	１層	腰岳
	7	3	打製石鏃	チャート	1.65	1.30	0.45	0.73	Ⅲ区P６G	１層	
	8	15	打製石鏃	頁岩	1.47	1.05	0.26	0.24	Ⅱb区K５G	１層	針尾
	9	27	打製石鏃	黒曜石	1.50	1.65	0.45	0.67	Ⅲ区P７G	１層	桑ノ木津留
	10	18	打製石鏃	黒曜石	1.73	1.08	0.37	0.54	Ⅱａ区	１層	日東
	11	17	打製石鏃	黒曜石	1.19	1.11	0.25	0.22	Ⅱａ区	１層	桑ノ木津留
	12	10	打製石鏃	黒曜石	2.07	1.39	0.25	0.50	Ⅲ区	１層	腰岳
	13	2	打製石鏃	チャート	2.30	1.80	0.35	1.13	Ⅲ区N７G	２層	
	14	20	打製石鏃	黒曜石	1.42	1.78	0.48	0.68	Ⅱａ区	１層	桑ノ木津留
	15	19	打製石鏃	黒曜石	1.63	1.44	0.42	0.65	Ⅱａ区	１層	桑ノ木津留
	16	16	打製石鏃	黒曜石	1.30	0.89	0.34	0.24	Ⅱａ区	１層	桑ノ木津留
	17	26	打製石鏃	黒曜石	1.30	1.40	0.40	0.46	Ⅱb区K５G	２層	桑ノ木津留
	18	9	打製石鏃	黒曜石	1.03	1.24	0.33	0.30	Ⅲ区	１層	阿蘇４

挿図番号		実測番号	器　種	石　材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土地点	出土層	備考
第45図	19	22	打製石鏃	黒曜石	2.15	1.62	0.36	1.15	Ⅱｂ区	１層	腰岳
	20	38	打製石鏃	チャート	1.60	1.65	0.30	0.60	Ⅰ区F３G	１層	
	21	39	打製石鏃	チャート	1.90	1.70	0.55	1.12	Ⅱａ区	１層	
	22	25	打製石鏃	黒曜石	1.10	0.95	1.50	0.11	Ⅱａ区	１層	桑ノ木津留
	23	23	打製石鏃	黒曜石	1.15	1.22	0.41	0.36	Ⅱｂ区	１層	桑ノ木津留
	24	7	打製石鏃	黒曜石	2.29	1.67	0.66	1.59	Ⅲ区	１層	桑ノ木津留
	25	6	打製石鏃	黒曜石	1.82	1.26	0.38	0.55	Ⅲ区	１層	桑ノ木津留
	26	36	打製石鏃	チャート	3.70	1.40	0.40	1.75	Ⅱa区G２G	撹乱土	
	27	29	打製石鏃	黒曜石	2.30	2.00	0.40	0.98	Ⅱb区M６G	１層	腰岳
	28	11	打製石鏃	安山岩	2.30	1.51	0.36	0.76	Ⅱｂ区	１層	
	29	32	打製石鏃	黒曜石	2.60	1.50	0.40	1.02	Ⅱb区L６G	１層	姫島
	30	14	打製石鏃	チャート	2.08	1.90	0.38	0.92	Ⅱb区M６G	１層	
	31	21	打製石鏃	黒曜石	2.10	1.54	0.38	0.63	Ⅱａ区	１層	針尾
	32	24	打製石鏃	黒曜石	2.40	1.25	0.36	0.76	Ⅱb区M５G	１層	腰岳
	33	35	打製石鏃	チャート	2.20	1.60	0.40	0.73	Ⅱb区M４G	１層	
	34	34	打製石鏃	チャート	1.50	1.78	0.40	0.65	Ⅱｂ区	１層	
	35	28	打製石鏃	黒曜石	1.20	1.50	0.30	0.38	Ⅱb区M４G	１層	腰岳
第46図	36	12	磨製石鏃	頁岩	2.10	1.50	0.25	0.69	Ⅱｂ区	１層	
	37	13	磨製石鏃	頁岩	1.70	2.40	0.20	0.55	Ⅱb区L５G	１層	
	38	66	打製石斧	安山岩	10.10	5.60	1.60	106.00	Ⅱｂ区	１層	
	39	47	打製石斧	安山岩	17.30	5.10	2.30	325.00	Ⅱｂ区	１層	
第47図	40	48	打製石斧	安山岩	12.20	6.45	2.00	150.00	Ⅱ区中央ベルト	１層	
	41	45	打製石斧	安山岩	11.40	6.90	1.50	117.00	Ⅱb区M６G	１層	
	42	46	打製石斧	安山岩	13.60	6.70	1.80	152.00	Ⅱb区L６G	１層	
第48図	43	49	打製石斧	安山岩	14.30	4.90	1.85	125.00	Ⅱｂ区	１層	
	44	43	打製石斧	安山岩	13.80	5.70	2.40	117.00	Ⅱｂ区	１層	
	45	52	打製石斧	安山岩	9.50	5.50	1.60	95.00	Ⅲ区	１層	
第49図	46	42	打製石斧	安山岩	15.00	5.60	1.20	112.00	Ⅱｂ区	１層	
第50図	47	51	打製石斧	安山岩	10.80	5.30	1.80	137.00	Ⅲ区	１層	
第51図	48	54	磨製石斧	堆積岩	9.70	6.75	3.50	329.00	Ⅲ区P７G	１層	
	49	55	磨製石斧	堆積岩	7.40	5.50	3.65	151.00	Ⅱｂ区	１層	
	50	60	磨製石斧	砂岩	8.80	5.70	3.50	220.00	Ⅱａ区	１層	
	51	56	磨製石斧	頁岩	8.90	5.40	3.60	166.00	Ⅰ区	１層	
第52図	52	40	石匙	安山岩	4.50	5.90	0.80	14.17	Ⅰ区	１層	
第53図	53	65	石錘	安山岩	8.50	5.90	2.10	159.00	Ⅱb区N５G	１層	
第54図	54	63	磨石	砂岩	8.50	7.40	4.40	480.00	Ⅱb区K６G	１層	
	55	57	磨石	砂岩	12.40	5.40	4.40	464.00	Ⅰ区	１層	
	56	59	磨石	砂岩	12.30	3.00	2.30	141.00	Ⅲ区	１層	
	57	61	磨石	安山岩	11.00	4.20	2.00	155.00	Ⅱｂ区	１層	
第55図	58	58	磨石	砂岩	18.90	6.70	3.00	632.00	Ⅲ区	１層	
第56図	59	62	磨石	砂岩	13.20	10.10	5.40	1100.00	Ⅱb区K６G	１層	

第４章　理化学分析

小枝遺跡出土須恵器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

熊本県球磨郡あさぎり町小枝遺跡では、縄文時代から中世にいたる各時代・時期の遺構・遺物が確認されている。今回の分析調査では、小枝遺跡から出土した須恵器を対象として、その材質（胎土）の特性を明らかにし、小枝遺跡から至近の距離に位置する下り山窯跡出土試料との比較を行うことにより、小枝遺跡における下り山窯跡産須恵器の供給状況や他地域窯跡製品流通の可能性など、当時の須恵器製作と流通にかかわる基礎資料を作成する。

１．試料

試料は、小枝遺跡から出土した須恵器片13点と下り山窯跡出土の須恵器片３点の合計16点である。試料にはサンプル№１～16が付されている。このうち、№14～16が下り山窯跡出土試料である。小枝遺跡出土試料には様々な器種が含まれており、その内訳は甕５点、平底瓶１点、坏６点、皿１点である。各試料の器種、挿図番号などは、一覧にして表１に示す。

２．分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、特に薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片及び微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。ただし、須恵器のようにもともと砂粒の含有が少なく、また高温焼成による砂粒の溶失なども想定される土器については、蛍光Ｘ線分析により、胎土中の砂粒だけではなく、素地を作っている粘土も含めた特性を把握することが必要である。また、蛍光Ｘ線分析は、機器分析による数値データで表されることから、客観性、再現性がよいという利点がある。ここでは、まず基礎的な試料のデータを整えることを目的とし、蛍光Ｘ線分析による胎土分析を行う。分析は、波長分散型蛍光Ｘ線装置を用いたガラスビード法による定量分析である。以下に手順を述べる。

ａ）測定元素

測定元素は SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の10元素及びLOIである。

ｂ）装置

理学電機工業社製RIX1000（FP法のグループ定量プログラム）

ｃ）試料調製

試料を振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕し、105℃で４時間乾燥させた。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付け理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A １）

溶剤及び希釈率；融剤（ホウ酸リチウム）5.000g：試料0.500g

剥離剤；LiI（溶融中１回投入）

溶融温度；1200℃　約７分

d）測定条件

X線管；Cr（50Kv －50mA）

スペクトル；全元素K_α

分光結晶；LiF，PET，TAP，Ge

検出器；F － PC，SC

計数時間；PeaK40sec，Back20sec

3．結果

結果を表２に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した（図１～３）。

a）化学組成中で最も主要な元素（SiO_2，Al_2O_3）

b）粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石、斜長石）の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素である CaO、Na_2O、K_2O の３者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石及びカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合（$Na_2O + K_2O$）／（$CaO + Na_2O + K_2O$）を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 K_2O/（$Na_2O + K_2O$）を縦軸とする。

c）輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO_2、Fe_2O_3、MgO を選択し、Fe_2O_3を分母とした TiO_2、MgO の割合を見る。

また、これらの散布図では、小枝遺跡出土試料と下り山窯跡出土試料とを分け、さらに各図において小枝遺跡出土試料を器種ごとにそれぞれ異なる記号で示した。以下に各図の状況を述べる。

1）SiO_2－ Al_2O_3散布図（図１）

№７と11の２点以外の試料は、互いに分離が悪く、１つの集団とみることができる。№７は、この集団より SiO_2 の低い位置にあり、№は、この集団より SiO_2 の高い位置にある。

2）長石類主要元素の散布図（図２）

特に組成の離れた試料や、組成のまとまったグループは認められず、１つの集団とみることができる。

3）有色鉱物主要元素の散布図（図３）

TiO_2 と MgO の高い領域に№３、５、６、８－10のグループ、TiO_2 と MgO の低い位置にそれ以外の試料が１つのグループをなして広がっている。

4．考察

上述した図１～３における試料の分布から、他の試料とは異質な組成を示す試料を分離し、複数の図において共通した領域にプロットされる試料を同じグループに属するとみると、今回の試料は、以下のようなグループ分けをすることができる。なお、各試料の属するグループ名は、表１に併記した。

1）A類

図３において、TiO_2 と MgO の低い領域に分布する試料のうち、No.７と11を除いた試料からなるグループ。今回の試料では、最も多く、また下り山窯跡試料もこれに含まれる。

2）B類

図３において、TiO_2 と MgO の高い領域に分布する試料からなるグループ。

3）C類

図１において、集団には属さない２点の試料のうち、SiO_2の低い領域に位置する No.７をC類とする。

4）D類

図１において、集団には属さない２点の試料のうち、SiO_2の高い領域に位置する№11をD類とする。

ここで、上述した胎土分類と器種との対応関係は次のようになる。甕では５点の試料のうち３点がB類であり、残り２点はA類とD類、坏では６点の試料のうち３点がA類であり、２点がB類、１点がC類である。平底瓶と皿は、１点ずつであるが、前者はA類、後者はB類である。

以上、４種類の土器胎土と出土遺跡、器種との対応を述べたが、下り山窯跡試料と同一グループに分類されるA類の試料を下り山窯跡産の可能性のある土器とすれば、今回の小枝遺跡出土試料の中で下り山窯跡産の可能性のある試料は、半数よりやや少ない５点であり、また器種では坏がやや多い傾向にある。一方、下り山窯跡産の可能性が低いとみられるB類、C類、D類の試料は、半数を超える８点であり、器種では甕がやや多い傾向にある。

現時点では、産地の候補である下り山窯跡試料の分析結果が３点であり、上記の分類と推定もあくまで途中経過である。これまでの他地域の分析事例などから、１基の窯跡試料で組成のばらつく範囲が比較的広いことも予想される。また１窯跡群でも、操業時期などによって素地土に変化があることも予想される。したがって、今後、本地域の遺跡出土試料とともに、窯跡出土試料についてより多くの分析例を蓄積しながら胎土の分類を整備し、その分類と考古学的所見との比較を重ねていくことで、さらに詳細な製作・流通の実態解明がはかれるものと期待される。

表１．試料一覧

サンプル№	器種	挿図番号	備考（肉眼観察による所見）	胎土
1	甕	第35図１	未接合同一個体	A
2	平底瓶	第35図４	未接合同一個体、下り山産と思われる。	A
3	坏	第39図５	接合同一個体	B
4	坏	第61図117	未接合同一個体	A
5	皿	第61図120	接合同一個体	B
6	甕	第39図３	未接合同一個体	B
7	坏	第61図116	接合同一個体	C
8	甕	第61図136	未接合同一個体	B
9	坏	第61図125	未接合同一個体	B
10	甕	実測なし	内面赤色の一群	B
11	甕	実測なし	土師器のような色調の一群、焼成は須恵器そのもの	D
12	坏	実測なし	軟質焼成の一群	A
13	坏	実測なし	典型的な青灰色、焼成良好	A
14		実測なし	下り山窯跡資料	A
15		実測なし	下り山窯跡資料	A
16		実測なし	下り山窯跡資料	A

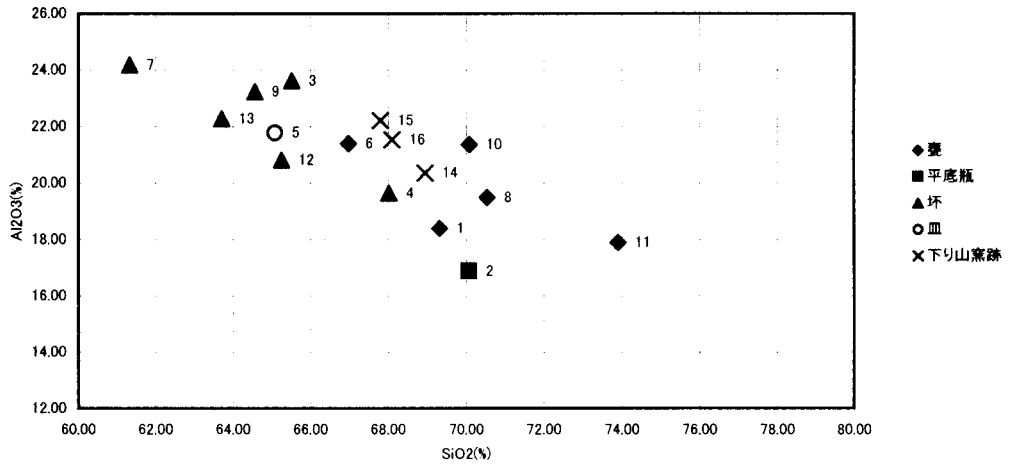


図1. SiO2-Al2O3散布図

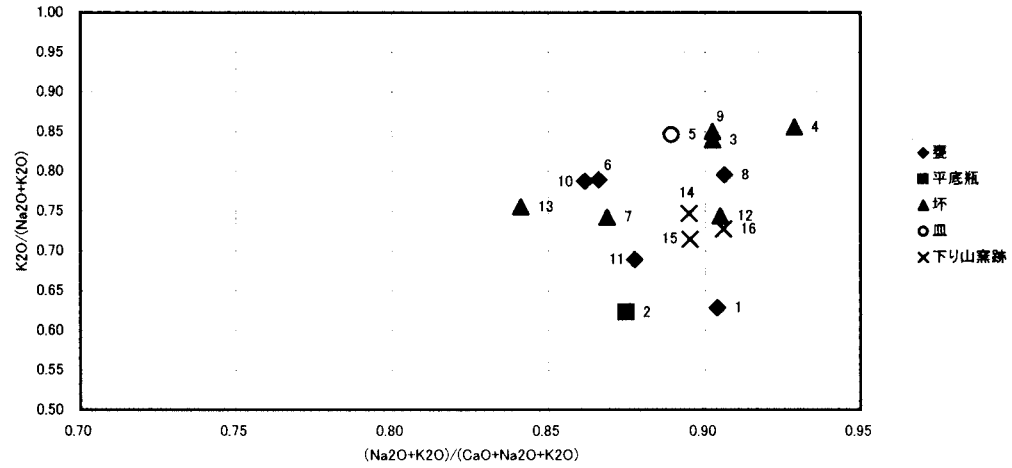


図2. 長石類主要元素の散布図

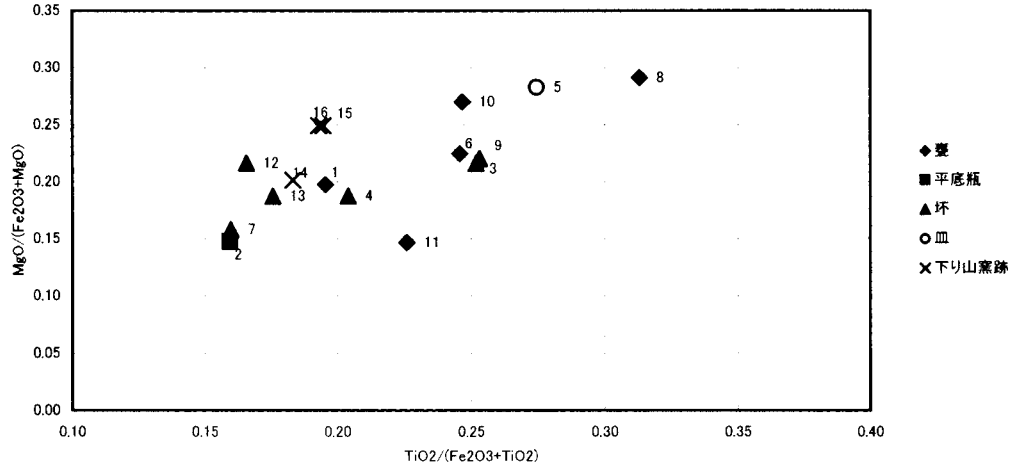


図3. 有色鉱物主要元素の散布図

表２．蛍光Ｘ線分析結果（化学組成）

サンプル No.	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Ig.loss	合計
1	69.31	0.69	18.41	2.84	0.01	0.70	0.45	1.57	2.66	0.02	3.34	100.00
2	70.07	0.92	16.89	4.85	0.02	0.84	0.43	1.13	1.87	0.05	2.93	100.00
3	65.52	1.05	23.63	3.12	0.01	0.86	0.33	0.49	2.56	0.03	2.40	100.00
4	68.02	0.92	19.65	3.59	0.01	0.83	0.24	0.45	2.67	0.04	3.58	100.00
5	65.08	0.95	21.78	2.51	0.01	0.99	0.34	0.42	2.31	0.05	5.56	100.00
6	66.98	1.00	21.41	3.07	0.01	0.89	0.50	0.68	2.55	0.03	2.88	100.00
7	61.33	1.03	24.19	5.42	0.03	1.02	0.44	0.75	2.16	0.02	3.61	100.00
8	70.54	0.92	19.50	2.02	0.02	0.83	0.35	0.69	2.69	0.04	2.40	100.00
9	64.56	1.03	23.24	3.04	0.02	0.86	0.34	0.47	2.67	0.03	3.74	100.00
10	70.08	0.92	21.37	2.81	0.02	1.04	0.50	0.66	2.45	0.03	0.12	100.00
11	73.90	1.10	17.91	3.77	0.02	0.65	0.31	0.69	1.53	0.03	0.09	100.00
12	65.25	0.79	20.82	3.98	0.04	1.10	0.44	1.07	3.11	0.04	3.36	100.00
13	63.70	0.95	22.28	4.46	0.04	1.03	0.68	0.88	2.72	0.05	3.21	100.00
14	68.94	0.87	20.37	3.88	0.02	0.98	0.33	0.71	2.10	0.02	1.78	100.00
15	67.80	0.80	22.23	3.31	0.03	1.10	0.48	1.17	2.93	0.03	0.12	100.00
16	68.10	0.82	21.54	3.43	0.03	1.14	0.45	1.18	3.15	0.03	0.13	100.00

＊単位は重量％

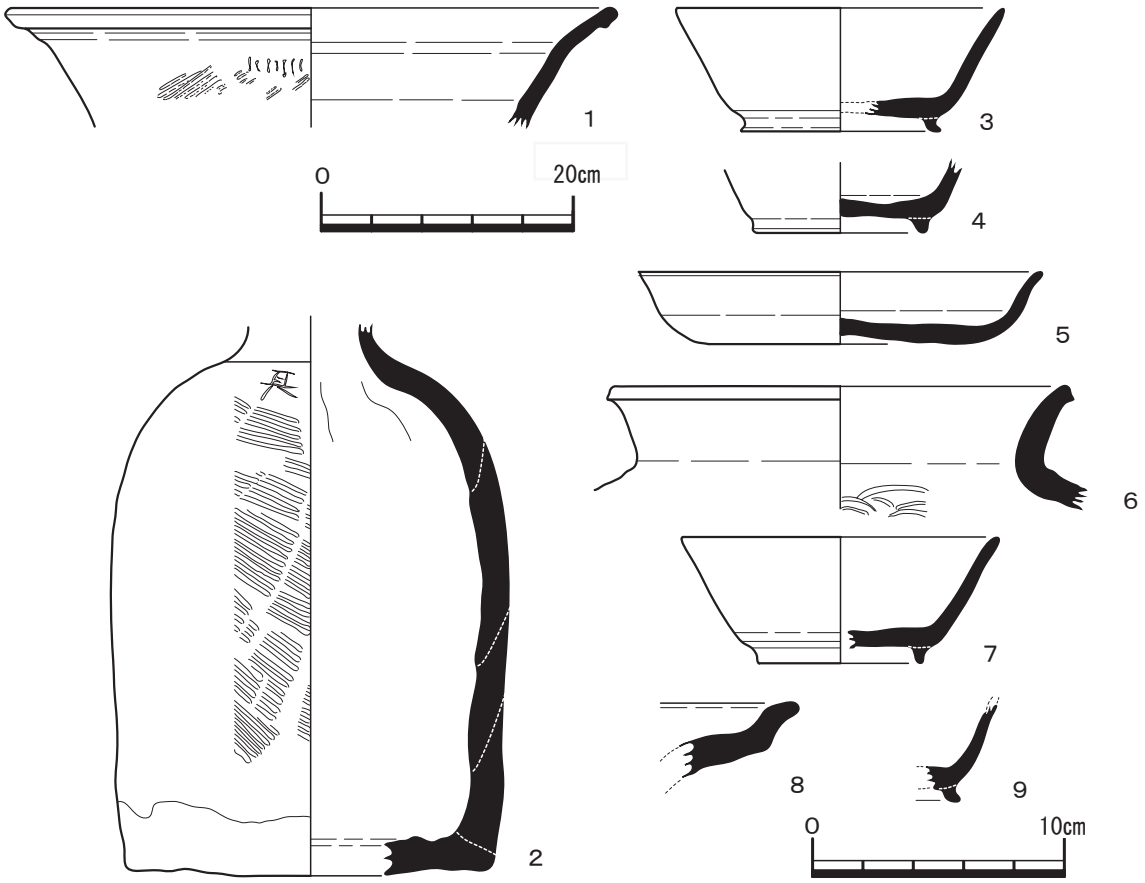


図4．試料実測図（表１に対応）

第５章　総括

調査の概要

小枝遺跡は、熊本県球磨郡あさぎり町深田（旧深田村）字小枝に所在する遺跡である。小枝遺跡からは縄文時代、弥生時代、古代、中世と様々な時代の遺物・遺構がみつかった。今回の調査は、熊本県球磨地域振興局土木部工務課による一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴うもので、遺跡の記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は平成13年度に第１次調査を、平成16年度に第２次調査を実施した。

調査の成果

発掘調査は、基本的な考古学的手法を用いて行った。４級基準点測量、遺構実測、空中写真撮影などは業者に委託したが、調査担当者が現地で指示を出し、それぞれ精度の高いものとなるように努めた。

本遺跡の基本層序は、地表から順に表土、客土、１層、２層、３層、４層、５層となる。このなかで、遺物や遺構が確認できたのは１層と２層である。１層は流れ込みの遺物包含層であり、遺物が多量に出土する。２層はアカホヤ２次堆積層で、縄文後・晩期の遺物、遺構を含む。３層は縄文早・前期の層に相当するが、小枝遺跡では３層で遺物、遺構とも確認できなかった。

遺構は、縄文時代、弥生時代、古代、中世のものを検出した。

住居跡は１軒しか確認できなかった（S013）。旧地形の状況では、住居を建てることができるような場所はⅡｂ区の平坦部分しかなかったということがいえるため、地形を有効利用したと思われる。この部分は、住居が廃棄された後に、土坑、道路状遺構などがつくられていることから、本遺跡においては重要な地形的要素を持っていたのだろう。

また、土師器焼成土坑（S008）からは、古代の土師器の良好な一括資料を得ることができた。これまで、球磨地域での土師器焼成土坑の確認例はほとんどないため貴重な成果といえる。器種は坏11点、甕３点で、坏はすべて口縁がやや外反するか直行し、底部はヘラ切り後に若干のナデを施すタイプ、甕は外面を横あるいは斜め方向にハケメ調整し、内面は下から上にケズリを施すタイプで、坏と甕のそれぞれが形態的、製作技法的にも共通した特徴をもっている。製作者は複数いたと思われるが、共通した技法のもとに製作したものと思われる。球磨地域の土師器編年研究などにも利用できる一括資料といえる。

道路状遺構（S011）は、側溝を持つタイプの道路状遺構で、軸も南北方向にまっすぐ延びている。この遺構の構築にあたっては方位などの測量が行われているものと考えられる。使用された当時、ある程度重要な意味合いを持った道路であったのだろう。

集石は15基検出した。いずれも掘り込みのないタイプで、石は焼けたものはなかった。集石は２層上面からの検出が多く、時期は１～10号集石が縄文後・晩期、11～15号集石が縄文時代早期に位置づけてよいだろう。これらの集石は、住居や道路状遺構と同じく、本遺跡でも平坦な部分に位置している。Ⅱｂ区とⅢ区の比較的平坦な部分が、やはり本遺跡において重要な生活空間であったことを示している。

遺物は、縄文土器、弥生土器、古代・中世の土器、石器が出土した。ただ、遺物の大半は１層の遺物包含層からの出土である。

縄文土器は、晩期のものが大半を占めている。黒色磨研土器と粗製土器が中心である。黒色磨研土器は非常に丁寧な処理を施してある。第42図31のように器形的におもしろいものも出土している。縄文早期と思われる押型文土器も出土したが、それが伴う遺構は確認できなかった。

石器は、打製石斧に石材の荒割り時の工夫の跡が確認できるものがある。また、打製石斧は柄に抉りを入れているものが多く、この形態のものが多いことは本遺跡の打製石斧の特徴といえるだろう。石器の石材は、石斧のようなやや大きめのものは地元の石を使用していると思われる。石鏃のような小型品も、桑ノ木津留や日東などの比較的近くの産地の黒曜石を使用しているが、腰岳、姫島などの遠方の黒曜石も存在することは注目すべきである。石器組成をみると、石鏃が最も多く、食料加工用の石器は少なかった。そのため弓矢を用いた狩猟や、弓矢で球磨川の魚を捕ることが多かったと考えられる。

土師器は、墨書土器が出土した。土師器の坏は、S008出土のものと器形・調整が類似するものが多いため、同様の技術を持った人たちが本遺跡の周辺で生産していたと推測できる。また、これらの土師器は明らかにロクロ成形したものであるため、須恵器製作集団が関与していたことも考えられる。本遺跡東方にある高山には未調査の須恵器窯跡、瓦窯跡が存在するということなので、それらにも関係してくる課題といえる。

中世の遺物は、灯明皿と陶磁器が出土した。これらは西に隣接する中世城の深田城や、本遺跡の東方にある中世城の高山城と関連のある遺物だと思われる。

理化学分析

発掘調査で出土した須恵器のうち13点は、胎土蛍光Ｘ線分析を行った。その結果、球磨郡錦町の下り山窯跡産と推定される須恵器が数点あることを確認できた。これらの須恵器は肉眼観察においても下り山窯跡産と考えていたもので、蛍光Ｘ線による胎土分析結果は肉眼観察による産地推定を裏付けるものであった。

また、下り山窯跡産以外のものについては、肉眼観察では焼成や胎土などから３～４のグループに分けることができる。これは胎土蛍光Ｘ線分析でも同様の結果が出ていることからも裏付けられる。この各グループの相違は、産地の違いによるものと思われる。球磨地域では古代になると下り山窯跡をはじめ、いくつかの窯跡が成立し須恵器生産を開始する。そのため下り山窯跡産とされたもの以外は、球磨地域内の別の窯跡の製品であるとも考えられる。ただ、他地域の須恵器の特徴をもつものも出土していることから、球磨地域外の生産地から供給されたものもあると考えられる。

球磨地域は、古墳時代中期（TK216～ TK208型式）の須恵器が確認されており、熊本県内で最も早い段階に須恵器が導入される地域の一つである。しかし、球磨地域で須恵器生産が開始されるのは古代からであるため、球磨地域への須恵器の流通状況を検討するためにも、須恵器の生産地推定は重要な課題であるといえる。

文献に見る平河氏

士野雄貴

平河氏は中世の肥後国（現熊本県）球磨郡内に割拠した一族である。

自身の「良峯姓先祖書」[1]に曰く、桓武天皇の皇子である良岑（峯）安世に由来するという「良峯」を一族のクランネームとした良峯氏は、康平六年（1063）に球磨郡へ下向したという[2]。その後七郎依高に至って荒田寺（現熊本県球磨郡―特記ない限り以下県名・郡名は省略―錦町木上字荒田の福田寺か）別当となり、彼の４人の子が深田太郎盛高・山田次郎東高・平河三郎師高（隆）・横瀬四郎高実として「深田」（現あさぎり町深田字深田か）・「山田」（現山江村山田か）・「平河」（現錦町木上字平川か）・「横瀬」（現多良木町黒肥地字大園付近か）にそれぞれ分立したという[3]が、そのうち三郎師高に「領」とあり、またこれ以後「平河」が一族のファミリーネームとなることから、師高が一族の惣領となったことが判る。師高はその後、おそらくは平家に左袒して一旦は源氏の不興を買うものの、文治三年（1187）六月十六日にその所領を安堵され、同年十二月三日に天野遠景より施行されたという。

その子息である次郎（平二）師貞（法名観阿）は京都大番役へ出仕し、このことによって当時の「鎌倉御領（永吉三百五十町＋西村百五十町）」預所職であった大江広元から建久三年（1192）、肥後国球磨庄安富領内三善及び西村（現相良村柳瀬字西村か）両所の預所職を安堵され、同八年（1197）の球磨郡における荘園整理[4]に伴い球磨郡永吉及び西村両所地頭職となるというが、この時には一族の分立がさらに進んでいたようで、建永二年（1206）の「某下文」[5]に「四郎師忠」という人物が登場する。この人物は少なくとも目良生（現錦町木上字目郎か）・永池（現あさぎり町免田西字永池か）とほか一所を領地しており、貞永元年（1232）九月には宗家師良の幕府へ提出した書状に連署するほどの一族、目良生村地頭師頼の先祖だと考えられる。なおこの貞永元年連署状によれば、宗家である次郎師良（師貞の子で少なくとも承久二年（1220）には永吉地頭職にあったようである）、及び前述の目良生地頭師頼のほか、中神村（現人吉市中神町か）地頭良高・平野村（現錦町木上字平野か）地頭師久の両名がいたらしく[6]、平河氏一族が中球磨地方に広範な領地を所有していたことが窺われる。

師良の次は三郎良貞（氏）、法名を観蓮と称し、建長二年（1250）に領地を継承する。また同五年（1253）には氏息良円（俗名不詳）も師良から領地を譲られているが、しかし一方では永吉地頭職が同三年（1251）にはじめて押領されるなど、平河氏の領主権が脅かされはじめる。それは、元仁二年／嘉禄元年（1225）に鎌倉御領預所職を大江広元から継いだ近衛中将（藤原）実春朝臣（北条泰時の娘婿か）が、同じく球磨郡内の西村地頭職[7]を得ていた須恵尼から狼藉の咎によってその職を召上げて賀来又二郎（法号念阿）へ給した際に、（平河氏職分である）永吉地頭職も併せて給したというもので、一旦は収束したと思われるものの文永二年（1265）に入って再び混領が行われたため、良貞は四郎師時とともに同年提訴、相論が行われたようだが、その裁決が下されたのは弘安六年（1283）七月三日と、実に20年近くもかかっている[8]。この時は平河氏の勝訴に終わり、時の引付頭人であった北条業時は永吉庄の地頭ならびに名主職を良貞らへ返付するよう命じるが、その後同年十月、鎌倉御領預所職は豊前前司（少弐）景資へ給される。その景資が同八年（1285）、霜月騒動によって滅亡すると、次いで同職に就いた備前前司入道（名越宗長）は同九年（1286）、西村のことは先例にならって領掌せよと命じ、これによって良貞は永吉地頭職を取り返すものの、宗長の代官であった竹井次良右衛門（法名行性）は命令を無視（平河氏の言い分によれば当時の引付奉行であった越中次郎（法名郡連）と行性が結託したという）、弘安六年の幕府決定を否定してしまう[9]。

これを受けて良貞は正応二年（1289）、行性と郡連を相手に相論を展開するが、しかしおそらくは敗訴したため、今度は平河弥五郎（法名道照）が永仁年中（1293～99）に幕府へ越訴する。その案件は惣越訴御内

へ移管され、担当の奉行諏方左衛門（法名直性）が審理に入るものの直性は途中で異動となり、代わって担当した二番御手の奉行明石民部大夫（法名行連）は元亨元年（1321）、やはりその言い分を却下したため、道照は翌年改めて越訴に及んでいる[10]が、その後の裁判の行方については史料の欠如から判明しない。

以後の平河氏の動向は、相良氏との関係を中心としたものに移行していく。

史料上、両氏の関係が最初に確認されるのは建長四年（1252）三月二十五日付の「人吉庄南方寅岡名地頭職相伝系図」[11]で、同状によれば相良長頼の子息長貞が「平河三郎」を名乗っているとあるものの、平河氏の名は「師」や「貞」が多く、また史料上「長」を名に持つ人物は認められず、誰のことを指しているのかは判らない[12]。

次いで両氏の関係が見受けられるのは「人吉庄南方松延名田数得田米田付け雑物等実検注進状」[13]で、徳治二年（1307）三月付の同状において、人吉庄内松延名の預所として「良峯師種」の名がある。

さらに文保二年（1318）四月三日付の「息女阿夜仁譲与状案」[14]では、入道連仏（相良長頼）の娘である尼妙阿（俗名牛）が、人吉庄南方寅岡名地頭職を娘の良峯氏（俗名阿夜、先の「人吉庄南方寅岡名地頭職相伝系図」によれば法名光妙）へ譲渡しており、妙阿の嫁ぎ先が良峯氏、すなわち平河氏であったことを窺わせている。同様のことは暦応三年（1340）の「良峯氏女代広安軍忠状」[15]にも表れており、両者の間にこのような婚姻関係が進展していったものと推察されるなど、この時点での両氏の関係はおおむね良好であったと見られる。

南北朝期に入ると、争乱の世相を表すかのように合戦の記事が多くなる。貞和二年（1346）九月二日には筑後経尚の八代出陣に際し、人吉庄一部地頭平河小三郎師頼（前述の良峯師種の子孫か？）が従軍、葦北庄田河（現葦北郡芦北町田川）内の関所にて合戦に及び、同十五日の合戦に際しては右太股を負傷するなど奮戦している[16]。

次いで文和元年（1351）には、平河三郎貞世・八郎貞家兄弟が六月九日豊前国赤庄（現福岡県田川郡赤村か）内の笠松・八月七日大宰府近郊の吉野と転戦した後に神嶽城を守護し、同年十一月十二日の椿忠隈合戦に際しては兄貞世が戦死、弟貞家も右足甲に傷を負うが、同月二十四日の大宰府合戦にては峯薬師堂城を攻略し、敗走する敵を竹曲まで追撃、その際さらに左小手を負傷している。貞家はその後浦城（同太宰府市宰府？の浦ノ城か）攻略に参加した後、翌同二年（1352）正月二十二日の合戦の際にも活躍し、二月二日の菊池後攻め合戦へも参戦していることが判る[17]。

一方で、平河氏が肥後国外にも所領を有していたことが確認できる。日向国真幸院（現宮崎県えびの市内か）など少弐頼尚跡を給された平河又三郎師里、同国三俣院（同北諸県郡三股町内か）内の地を給された平河小三郎師頼などで、彼らは康永四年（1345）、近隣の領主との間に濫妨沙汰を引き起こし、それを訴えるべく上洛した使者を待ち伏せして殺害に及んでいる[18]。

だがその後、「相良定頼并一族等所領注文」[19]に見られるように、平河氏は永吉庄の半分百七十五町を相良定頼へ給される形で失ってしまう。これは永吉庄が少弐頼尚の下にあったからで、その時期については同状に年号が付されていないため正確には判らないものの、しかし同状には「一色殿御下文目録」との裏書が認められることから、その作成年代は建武三年（1336）一色範氏の九州赴任から延文三年（1358）一色直氏の上洛までの間にかけてであろう。これに加えて「相良氏系図」[20]によれば相良定頼は正平十二年（1357）、日向国内の地を賜ったとあり、前出の注文には「（少弐）頼尚跡」は永吉庄のほか日向国にも及んでいたことが記されているから、これらの頼尚没官領が定頼へ給されたのであれば、平河氏が（同じく頼尚没官領である）永吉庄の半分を失ったのはこの時（すなわち延文二年／正平十二年）である可能性が指摘できよう。

そのことを裏付ける可能性として、面田氏の存在がある。藤原氏[21]を名乗る面田氏は文和二年（1353）九月二十八日、和泉国二条堀河院の東にて面田を名字とし、その後安芸国を経て文安六年（1449）に球磨郡

永吉庄内の面田村（現あさぎり町免田付近か）へ移ってきたという[22]が、球磨郡内における同氏の所領は自身が下向してくる以前の延文三年（1358）九月二十八日にまで遡り[23]、その所領について「孫三郎あと」、「又三郎のあと」、「五郎三郎あと」などとあって、いずれも没官領であることを窺わせている[24]。

以降、平河氏は漸次相良氏の下風へ立たされる。永和元年（1375）八月十二日、菊池郡水嶋（現菊池市七城町水島か）に在陣し、近郊の目野嶽（現山鹿市鹿央町米野岳か）を経て肥前国横大路（現佐賀県神崎郡吉野ヶ里町城原の横大路城か）・同小城（同小城市小城町の小城城か）へ転戦している平河三郎左衛門尉師頼は、（相良）近江守前頼をして「惣領」と称しており[25]、そのことを裏付けているといえよう。さらに応永二年（1395）には平河尾能三郎が相良実長より名字書出を受け（高頼）[26]、さらに同三十四年（1427）には平河式部が相良前続から人吉庄屋な瀬（現相良村柳瀬か）・永吉庄深田などの各所で給分を受けており[27]、以後平河氏は相良氏の被官として近世を迎える。

付記　「平河文書」１号文書について

今回中心的に取り上げた「平河文書」が、肥後国球磨郡における中世期の動向を示す好史料であることは周知のところだが、同文書の１号文書「良峯師高所領譲状案」に関してはその内容に疑問のある由、翻刻本である『熊本県史料』をはじめ工藤敬一氏[28]により示唆の見られるところである。

『熊本県史料』による本状の原文は以下の通りである（文章の構成上横書きに改めた）。

平川三郎師高重代所領田数　注文

一所　肥後国求麻郡永吉庄之内横瀬　十二町三十六石

一所　同郡永吉庄之内青山之村田地廿六町　八十四石三十貫

一所　同郡同庄之内目田之村十四町五反　三十九石十貫

一所　同郡同庄之内山田之村田地四十町一反　百十石五十貫

一所　同郡同庄之内黒田之村田地三十九町五反　百石四十貫

一所　同郡同庄之内原田之村田地廿七町四反　四十九石三十貫

一所　同郡同庄之内深水六町　三十九石

一所　同郡同庄之内をうかき田地八町二反　□□五石十貫

一所　同郡同庄之内平野之村田地十三町二反　四十七石十二貫

一所　同郡同庄之内永池之村田地八町五反　三十五石十三貫

一所　同郡同庄之内中神之村田地十九町　五十六石二斗三十貫

一所　同郡同庄之内渡之村田地五町　十九石九貫

一所　同郡同庄之内目良生之村田地四十町七反　三百三十石六十貫

一所　同郡同庄之内深田之村之内田地五十町　三百石五十貫

一所　同郡同庄之内河辺之村田地八町　五十九石いた三百　三十貫

一所　同郡同庄之内尾瀬之村さつし十束くす五升いた五十

一所　同郡同庄之内高野瀬之村さつし廿束、あつかみ三帖、いた百、くす五升

一所　同郡同庄之内五木之村さつし三百束、いた千五百、うるし三百

一所　同郡同庄之内田代之村鹿かハ三枚、いた千、茶五十斤うるしつつ百五十、

一所　同郡同庄之内はしかミ之村鹿かハ三まい、いた五百九十、うるし二百五十、茶五十斤、

右於此村（々脱カ）者、師高希代相伝之私領也、然於譲嫡子師貞等訖、於子々孫々、無他嫡子可為領知、自然沙汰之時者、此目録以可致沙汰之状如件、

于時建久二年五月三日
永吉地頭良峯師高在判

以下は読み下しである。日付と見出し以外の漢数字はアラビア数字に置き換えた。
平川三郎師高重代所領田数　注文
一所　肥後国求麻郡永吉庄の内横瀬（現熊本県球磨郡多良木町黒肥地字大園付近か）　12町36石
一所　同郡永吉庄の内青山の村（不明[29]）田地26町　84石30貫
一所　同郡同庄の内目田の村（現あさぎり町免田か）14町５反　39石10貫
一所　同郡同庄の内山田の村（現山江村山田か）田地40町１反　110石50貫
一所　同郡同庄の内黒田の村（現錦町木上字黒田か）田地39町５反　100石40貫
一所　同郡同庄の内原田の村（現人吉市上原田町・下原田町か）田地27町４反　49石30貫
一所　同郡同庄の内深水の村（現相良村深水か）６町　39石
一所　同郡同庄の内をうかきの村（現人吉市中神町大柿か）田地８町２反　石高不明
一所　同郡同庄の内平野の村（現錦町木上字平野か）田地13町２反　47石12貫
一所　同郡同庄の内永池の村（現あさぎり町免田西字永池か）田地８町５反　35石13貫
一所　同郡同庄の内中神の村（現人吉市中神町か）田地19町　56石２斗30貫
一所　同郡同庄の内渡の村（現球磨村渡か）田地５町　19石９貫
一所　同郡同庄の内目良生の村（現錦町木上字目郎か）田地40町７反　330石60貫
一所　同郡同庄の内深田の村（現あさぎり町深田か）の内田地50町　300石50貫
一所　同郡同庄の内川辺の村（現相良村川辺か）田地８町　59石　いた（板）300　30貫
一所　同郡同庄の内尾瀬の村（現球磨村大瀬か）さつし（雑枝？）10束　くす（葛？）５升　いた50
一所　同郡同庄の内高野瀬の村（現球磨村神瀬か）さつし20束　あつかみ（厚紙？）３帖　いた100　くす５升
一所　同郡同庄の内五木の村（現五木村頭地か）さつし300束　いた1500　うるし（漆）300
一所　同郡同庄の内田代の村（現相良村四浦字田代か）鹿かハ（皮）３枚　いた1000　茶50斤　うるしつつ（筒？）150
一所　同郡同庄の内はしかミの村（現相良村四浦字初神か）鹿かハ３枚　いた590　うるし250　茶50斤
右この村（々）においては、師高希代相伝の私領なり、然らば嫡子師貞らにきっと譲るにおいて、子々孫々において、嫡子他なく領知すべく、自然沙汰の時は、この目録をもって沙汰致すべきの状件のごとし、
于時建久二年五月三日
永吉地頭良峯師高在判

一見すると、これらの領地は（平河）師高希代相伝の私領であり、師貞以下嫡子一族に継承されるもので、嫡子の他には継承すべきでなく、（しかし万が一）そのような継承問題が生じた際にはこの目録を証拠として使用すべきこと、という概要の譲状のように見えるが、一体に鎌倉期における所領譲状の形式というのは「譲り渡す●●の事云々」という書き出しであり、譲状としては書式がおかしい印象を受ける。

また、嫡子師貞に譲られるべき領地の中に「横瀬」「山田」「深田」の各村が数えられているが、これらの各村については同文書の12号文書「良峯姓先祖書」では「山田」は師高の兄である次郎東高に、「深田」は長男である太郎盛高が、そして「横瀬」は弟の四郎高実によってそれぞれ継承されているにも関わらず、これらのすべてを師高が「希代相伝の私領なり」として領地し、嫡子師貞へそっくり譲り渡しているのは不自

然であろう[30]。

また嫡子師貞の譲られるべきこれらの領知であるが、それらの村内のどの田地であるのか、などの具体的な情報には一切触れられておらず、所領目録としてはあまりにも漠然としているように思われる。あるいは本状は目録の大見出し的なもので、本来は細目が添付されていたのがそれのみ散逸してしまったという可能性もあるが、文末に署名在判が付されていることから同状だけで単独の書類であると見て良く[31]、とすればこのように曖昧な内容では相続に際しての証拠にはなり得ないのではあるまいか。

さらに、「平河文書」には４号・５号文書として鎌倉幕府を相手取った訴訟関係の文書が伝わっていることは本文においてすでに触れたが、それらの両状において平河氏が本状の主旨（すなわち平河氏私領の建久二年相続）を示唆した痕跡はなく、また証拠書類として本状が副進された形跡もない。

以上の点から、本状「良峯師高所領譲状案」は、後世に作成されたいわゆる偽文書である可能性が高いと考えられる。その成立年代については、自身の名字が「平川」と表記されており、他史料においてそれ（すなわち平河氏が「平川」と表記される事例）が確認されるのは永和三年（1377）が初例であることから、その頃（14世紀後半）以降ではないかと思われる。

本状の存在が要求された背景については判らない。当該時期の球磨郡における政治的動向を見ると、内的要因として少弐頼尚の没落に際する永吉庄半分の失陥、外的要因として（時代は少し下るものの）文安五年の内訌が可能性として高いようには見受けられるが、それを示唆する史料はない。

（紙幅の都合上、一部を除き今回は文献そのものを挙げることができなかった。また本文中に触れた各文献のほか、平河氏には「平川相伝由緒書」及び「平川氏系図」等の史料が存在しているらしいが、それらに接する機会を得なかったためここでは取り上げなかった。ご了承いただきたい。）

1）「平河文書」12（『熊本県史料』中世篇３、以下特記なき限り出典は同一）

2）『新訳　求麻外史（以下『外史』）』（青潮社、1972）。

3）『外史』では平河師高の父を右衛門義高としている。

4）当該地域の荘園の変遷等については工藤敬一『荘園公領制の成立と内乱』（思文閣、1992）に詳しい。

5）「永池文書」１（『熊本県史料』中世篇３）

6）「平河文書」５

7）「平河文書」４・５や「相良家文書」に写の伝わる「当国惣国図田帳」の建保四年（1216）条には「鎌倉御領五百町」の内永吉三百五十町を平河平二、西村百五十町を須恵小太郎家基の領知するところとしており、一見すると平河氏の云う「永吉西村両所地頭職」と撞着しているように見える。事実、実春朝臣による（建長三年の）横領は平河氏領西村と須恵氏領西村とを混同したことが原因であるようだが、『永吉内西村は別の地にこれあるなり（永吉内西村在之別之地也）』（「平河文書」４）という判決や、また平河・須恵両氏の間に「西村」を巡る相論の生じた形跡は認められないことから、現地において両者は蓋し区別されていたと見られる（私見だが前者は本文で触れた通り現相良村柳瀬字西村、後者は現錦町大字西一帯ではないかと考える）。

8）「平河文書」４・５

9）「平河文書」５

10）「平河文書」５

11）「平河文書」２

12）天文十一年に長順という人物が一人いるのみだがすでに永池相良氏を称している（「永池文書」６）。

13）「相良家文書」37（『大日本古文書』家わけ五之一）

14）「相良家文書」48中

15）「相良家文書」96

16）「相良家文書」125

17）「平河文書」6・7

18）「相良家文書」119

19）「相良家文書」161

20）『新撰事績通考』巻之十五

21）「免田文書」14～17（『熊本県史料』中世篇３）

22）「免田文書」4

23）「免田文書」1

24） 但し、本状にある「孫三郎」は上相良氏の多良木孫三郎経頼だとも考えられ、これらの没官領が直ちに平河氏のそれであると断定することは出来ない。

25）「永池文書」2

26）「永池文書」3

27）「平河文書」8・9

28） 註４参照。

29）『多良木町史』（1980）では現相良村四浦字晴山に比定しているが、「平河文書」３の「沙弥観阿平河師良譲状案」には青山村内と見られる田地名として「黒田女房五反田」などと見え、現錦町字黒田に近い球磨川流域のいずれかではないかと思われる。

30） 12号文書も真偽についてやや曖昧な印象を受けるが、同状で惣領以外の領知するところとなった各地については（他史料に表れる限り）惣領の領有外である点からすると、少なくとも平河氏一門による領地の相続状況に関しては事実であると見て良いであろう。

31） 原書を実見に及んでいないため断定は出来ないが、本状を翻刻した『熊本県史料』においては「切継あり」「写」などの脚注は見られず、さらには署名在判も「異筆」とはされていない。

その他参考文献（順不同）

『熊本県文化財調査報告書第22集　蓮花寺跡・相良頼景館跡』（1977）
『同第30集　熊本県の中世城跡』（1978）
『同第102集　山田城跡』（1989）
『同第112集　山田城跡Ⅱ・Ⅲ』（1990）
『同第172集　蔵城遺跡』（1999）
『同第197集　灰塚遺跡（Ⅱ）　――熊本県球磨郡深田村字灰塚所在の遺跡――』（2001）
『ワイド版　角川新版日本史辞典』（角川書店、1997）
『日本城郭大系　第18巻』（新人物往来社、1979）

参考ウェブサイト（順不同）

「Promised　Land －歴史資料館～公家の歴史～」 http://www.geocities.jp/okugesan_com/index.html
「Reichsarchiv ～世界帝王事典～」 http://nekhet.ddo.jp/
「城跡探索『兵庫県のお城』」 http://www.ne.jp/asahi/siro/tansaku/

付録　平河氏関係年表

凡例

・年号は元号を主に、西暦を（　）内に添えた。但し、西暦は略式換算である。

・元号が２つある場合には史料中に見える方を採用した。

・記事中の月日は旧暦である。

・「この年？」とあるのは推定を示す。

・（　）内の記事は出典史料に疑問点のあるものを示す。

・史料の番号は出典書籍中において付されたものである（「平河４」とは『熊本県史料　中世篇３』所収の「平河文書」第４号文書であることを表している）。

年　号	記　　事
康平６ （1063）	この年　良峯師澄、球磨郡へ下向という 『求麻外史』
久寿元 （1154）	この年　平河三郎師高（隆）、現あさぎり町深田西に有智山寺（内山萬福寺）を建立という 平河12（『熊本県史料』中世３）
文治３ （1187）	6．16　平河師高、源頼朝より所領を安堵されるという 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
文治５ （1189）	7．17　平河次郎師貞、京都大番役へ勤仕するよう命ぜられるという 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
建久２ （1191）	(5．3　平川師高、領地を子息師貞へ譲与) 平河１（『熊本県史料』中世３）
建久３ （1192）	この年　平河師貞、大江広元より球磨庄安富領内三善ならびに西村両所の預所職を安堵されるという 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
建久８ （1197）	この年　鎌倉御領永吉300（350の誤記）町地頭に「良峯師高子息平紀（「河」の誤写か）平次」の名あり 相良２（『大日本古文書』家わけ５－１）
建永２ （1206）	3．14　平河四郎師忠、領内の目良生・永池ほか一所分の所当を京都へ送るよう命ぜられる 永池１（『熊本県史料』中世３）
承久２ （1220）	この年　永吉検済目録帳等事に地頭「良峯師良」の名ありという 平河４（『熊本県史料』中世３）
嘉禄元 （1225）	この年　永吉預所職、大江広元より近衛中将羽林実春朝臣へ移るという 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
貞永元 （1232）	9．11　平河次郎師良・目良生村地頭師頼・中神村地頭良高・平野村地頭師久、連署状を提出という 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
暦仁２ （1239）	この年　永吉検済目録帳等事に地頭「良峯師良」の名ありという 平河４（『熊本県史料』中世３）
建長２ （1250）	この年　平河師良、子息三郎良貞（法名観蓮）へ領地を譲与という 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
建長３ （1251）	この年　永吉預所近衛中将羽林実春朝臣、永吉地頭職を押領という 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
建長４ （1252）	(3．25「人吉庄南方寅岡名地頭職相伝系図」に「平河三郎長頼」の名あり) 平河２（『熊本県史料』中世３）
建長５ （1253）	この年　平河師良、子息良円（俗名不詳）へ永吉庄内青山村の田地を譲与 平河３（『熊本県史料』中世３）
文永２ （1265）	この年　平河良貞・四郎師時、永吉の混領を受け羽林実春と相論という 平河４・５（『熊本県史料』中世３）
弘安６ （1283）	7．3　平河良貞、羽林実春との相論に勝訴 平河４・５（『熊本県史料』中世３） 10月　永吉預所職、羽林実春より豊前前司少弐景資へ移るという
弘安８ （1285）	この年　平河良氏（貞）、（大）宰府にて勤仕という 平河４・５（『熊本県史料』中世３） この年　永吉預所職、霜月騒動によって少弐景資より備前前司名越宗長へ移るという 平河５（『熊本県史料』中世３）
弘安９ （1286）	この年　名越宗長の代官竹井二良右衛門（法名行性）、弘安６年の判決を否定 平河５（『熊本県史料』中世３）
正応２ （1289）	この年　平河良貞、行性・引付奉行越中次郎（法名郡連）と相論 平河５（『熊本県史料』中世３）
永仁年中 （1293 ―1299）	平河弥五郎（法名道照）、幕府へ越訴 平河５（『熊本県史料』中世３）

年　号	記　　事
徳治２ (1307)	３月　人吉庄松延名の預所に「良峯師種」の名あり 相良37（『大日本古文書』家わけ５－１）
文保２ (1318)	4．3　相良長頼の娘牛（法名妙阿）、人吉庄南方寅岡名地頭職を娘阿夜（良峯氏、法名光妙）へ譲与 相良48（『大日本古文書』家わけ５－１）
元亨元 (1321)	５月　引付奉行明石民部大夫（法名行連）、道照の越訴を棄却 平河５（『熊本県史料』中世３）
元亨２ (1322)	この年　平河道照、改めて幕府へ越訴 平河５（『熊本県史料』中世３）
嘉暦元 (1327)	9．25　（平河宮内左衛門？）観覚の「すミ殿」宛て書状あり 相良50（『大日本古文書』家わけ５－１）
建武３ (1336)	4．22～　相良定頼、南朝方へ呼応した相良経頼・橘佐渡八郎らを山田城で迎撃、木枝城へ追いつめる 相良82（『大日本古文書』家わけ５－１）
暦応３ (1340)	6．19　多良木孫三郎・内河彦三郎以下の南朝方、木上城へ籠城 相良91（『大日本古文書』家わけ５－１） 8．6　相良孫次郎定長・八郎景宗、筑後経尚の経頼ら討伐に際し荒狩倉城から木枝城まで同行 相良102・103（『大日本古文書』家わけ５－１） 8．10　相良十郎三郎助広（良峯氏の父）、築地原合戦で戦死 相良96（『大日本古文書』家わけ５－１） 12．10　これより先、相良定長・景宗、木枝・山田など永吉庄内の諸城を警固 相良104・105（『大日本古文書』家わけ５－１）
康永４ (1345)	9．6　日向国馬関田庄預所平河又三郎師里ら、同国吉田村にて濫妨に及ぶ 9．16　平河弥三郎、師里らの濫妨を提訴すべく上京中の坂兵部房覚英を備後国内で殺害 相良119（『大日本古文書』家わけ５－１）
貞和２ (1346)	9．2　平河小三郎師頼、筑後経尚の八代出陣に従軍、葦北庄田河にて合戦 9．15　平河師頼、合戦に参加し右太股を負傷 相良125（『大日本古文書』家わけ５－１）
文和元 (1351)	6．9　平河三郎貞世・平河八郎貞家、豊前赤笠松討伐に参加 8．7　平河貞世・貞家、筑前宰府防衛に参加 11．12　平河貞世、筑前椿忠隈合戦にて戦死（貞家は負傷） 11．24　平河貞家、筑前宰府合戦に参加 平河６・７（『熊本県史料』中世３）
文和２ (1352)	2．2　平河貞家、肥後菊池後攻合戦に参加 平河６・７（『熊本県史料』中世３）
文和３ (1353)	11．1　これより先、相良孫三郎定長、南朝方の球磨郡侵攻に際し永里村及び深田城において合戦 相良162（『大日本古文書』家わけ５－１）
正平12 (1357)	この年　相良定頼、日向国内の地を賜るという 相良系図（『新撰事績通考』巻15） この年？（平）河左近允、永吉庄半分175町を失う 相良161（『大日本古文書』家わけ５－１）
延文３ (1358)	9．28「免田坪付帳」（面田氏の球磨郡における所領の初見） 免田１（『熊本県史料』中世３）
永和元 (1375)	10．16　平河三郎左衛門尉師頼、相良前頼に従って菊池郡水嶋に在陣 永池２（『熊本県史料』中世３）
永和３ (1377)	10．28　平川兵庫允師門、相良右頼・前頼らとともに北朝方への一揆契約に連名 禰寝文書二（『九州史料叢書』18）
応永２ (1395)	12．23　平河尾能三郎、相良実長より名字書出を受ける（高頼） 永池３（『熊本県史料』中世３）
応永34 (1427)	4．7　平河式部、相良前続より所領を給分される 平河８・９（『熊本県史料』中世３）
永享10 (1438)	３月　平河氏の面田氏への給分あり（これより先か） 免田４（『熊本県史料』中世３）
文安６ (1449)	球磨郡永吉庄面田に面田氏下向すという 免田４（『熊本県史料』中世３）
寛正３ (1462)	12．9　平河助八、相良長続より名字書出を受ける（師詮） 永池４（『熊本県史料』中世３）
文明２ (1470)	3．25　平河氏の面田氏への給分あり（これより先か） 免田７（『熊本県史料』中世３）
文明17 (1485)	２月　平川但馬守、相良為続より所領を給分される 平河10（『熊本県史料』中世３）
長享元 (1487)	12．23　平河三郎、相良長輔（長毎）より名字書出を受ける（高吉） 永池５（『熊本県史料』中世３）
天文11 (1542)	11．25　相良永池三郎、相良長唯（義滋）より名字書出を受ける（長順） 永池６（『熊本県史料』中世３）
永禄２ (1559)	5．23　相良頼房（義陽）より平川与三衛門尉宛て書状あり 平河11（『熊本県史料』中世３）
天正19 (1591)	9．20　相良永池助七、相良頼房（長毎）より名字書出を受ける（頼忠） 永池７（『熊本県史料』中世３）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	こえだいせき
書　　名	小枝遺跡
副 書 名	一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ号	第237集
編 集 者 名	木村　龍生（きむら　りゅうせい）
発 行 機 関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862－8609　熊本県熊本市水前寺６－18－１　TEL096－383－1111（代表）
発行年月日	2007年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （m²）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小枝遺跡（こえだいせき）	熊本県球磨郡（くまもとけんくまぐん） あさぎり町（あさぎりまち） 深田西（ふかだにし）	43509	030	32° 14′ 40″	130° 52′ 16″	2001.05.15 ～ 2001.06.14	750m²	県道建設
						2004.06.22 ～ 2005.02.10	2,000m²	県道建設

所収遺跡	種別	時代	遺構	遺　物	特注事項
小枝遺跡	集落	縄文時代後・晩期	集石 溝 土坑	縄文土器 石器	
		弥生時代	土坑	弥生土器	
		古代～中世	竪穴式住居 道路状遺構 土器焼成土坑 溝 土坑	土師器 須恵器 土錘 紡錘車 陶磁器片	

写　真　図　版

小枝遺跡空中写真（南西より）

図版　2

第 2 次調査全景

第 1 次調査完掘状況（北より）

SD10完掘状況（南より）

SD10土層断面

SK14完掘状況（東より）

図版　4

SD 1 完掘状況（西より）

SD 1 土層断面（1）

SD 1 土層断面（2）

SD 1 土層断面（3）

SD 1 遺物出土状況

遺物出土状況（1）

遺物出土状況（2）

遺構検出状況

図版　6

小枝遺跡遠景
（高山より）

小枝遺跡遠景
（岡留神社より）

第 2 次調査前状況

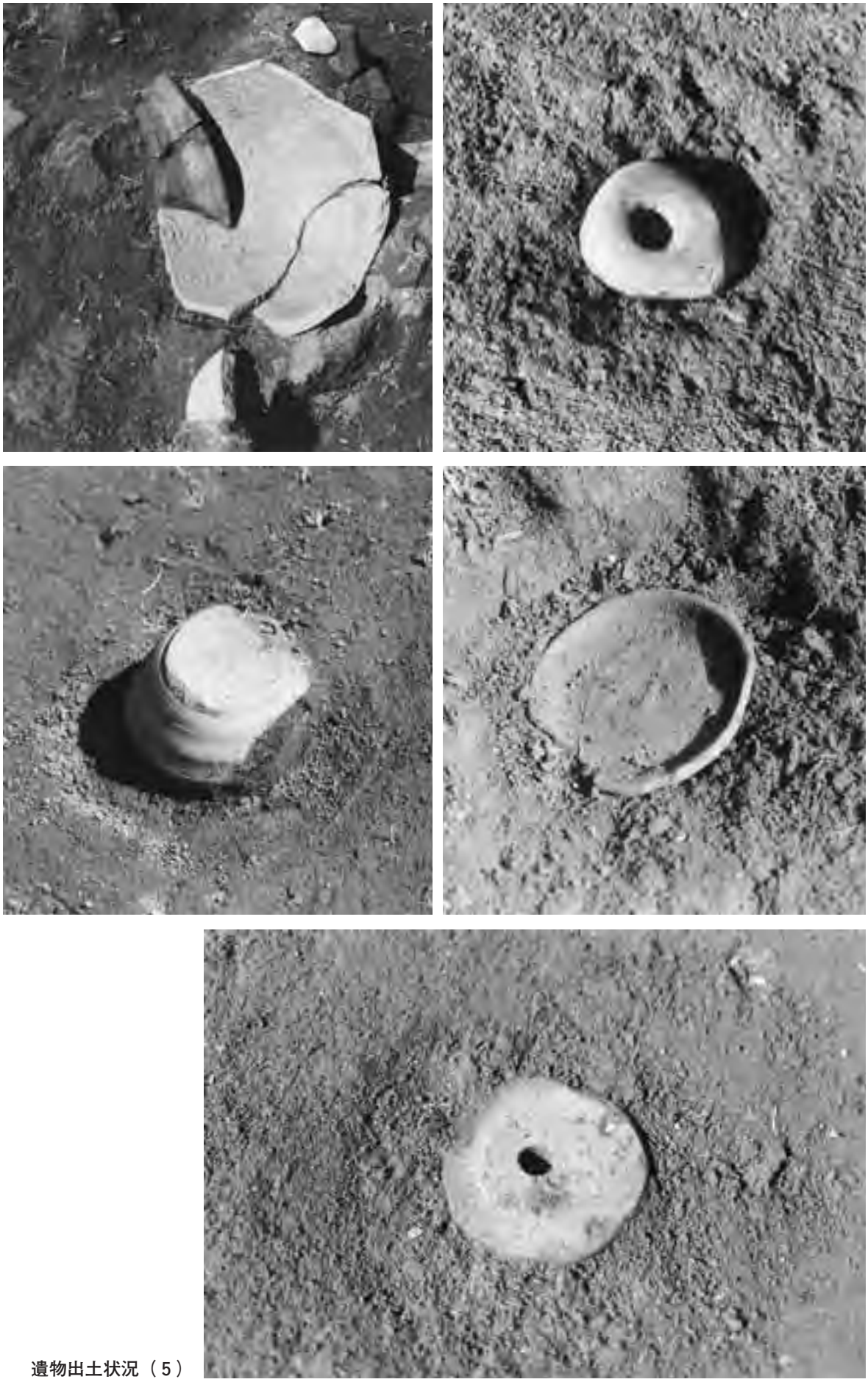
遺物出土状況（1）

遺物出土状況（2）

遺物出土状況（3）

図版　8

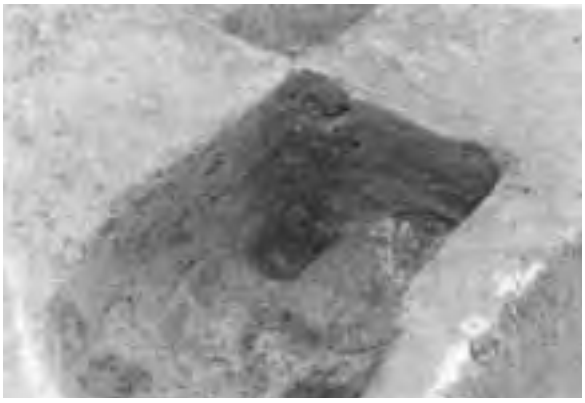
遺物出土状況（４）



遺物出土状況（５）

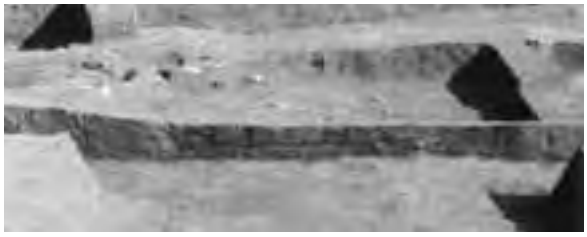
図版 10

S015完掘状況（南より）



土層断面（左：北西より、右：南東より）

S020完掘状況（北東より）



S013完掘状況（南より）
S013東西方向土層断面（南より）
S013南北方向土層断面（西より）

S013遺物出土状況（１）

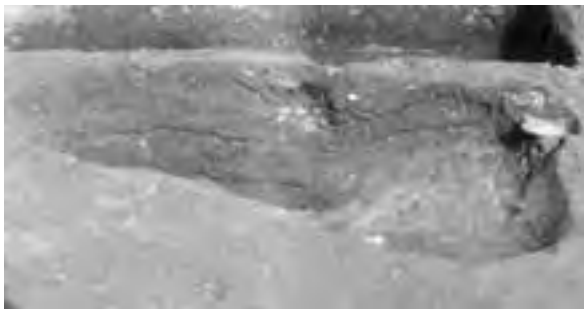
図版 12

S013遺物出土状況（２）

S014完掘状況（南より）

S014土層断面（南より）

S008完掘状況（南東より）



S008南北方向土層断面

S008東西方向土層断面

S008検出状況（南東より）

図版 14

S011完掘状況（南より）

S011完掘状況（北より）

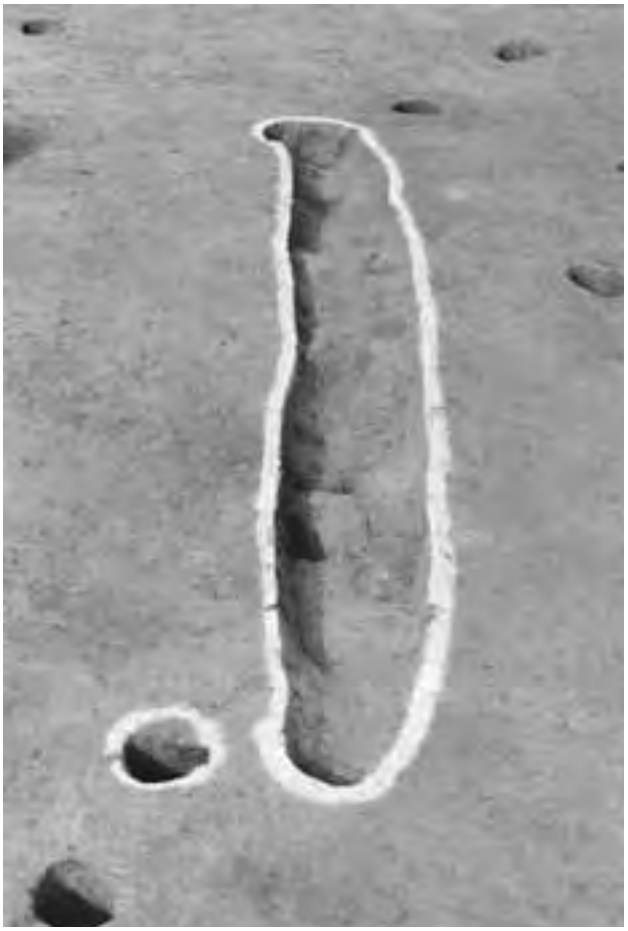
S011土層断面

S017完掘状況（西より）

S012（東より）

S003（北より）

図版 16

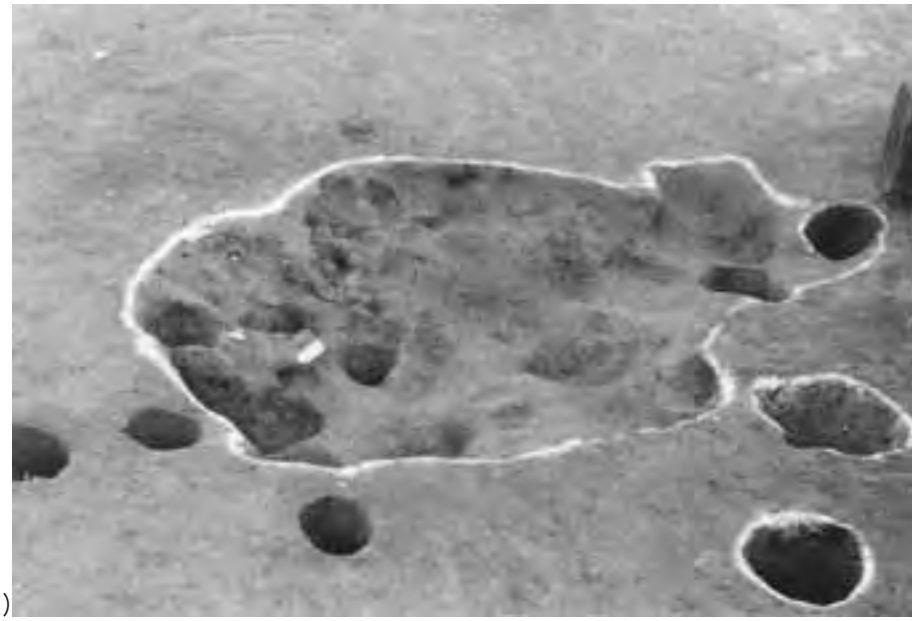


S001土層断面

S001完掘状況（南より）

S016土層断面

S016完掘状況（南より）



S019完掘状況（南東より）

S019土層断面（南より）

S019土層断面（北より）

図版 18

S021完掘状況（南より）

風倒木土層断面

1号集石

2 号集石

3 号集石

4 号集石

図版 20

5 号集石

6 号集石

8 号集石

10号集石

11号集石

12号集石

図版 22

13号集石

14号集石

15号集石

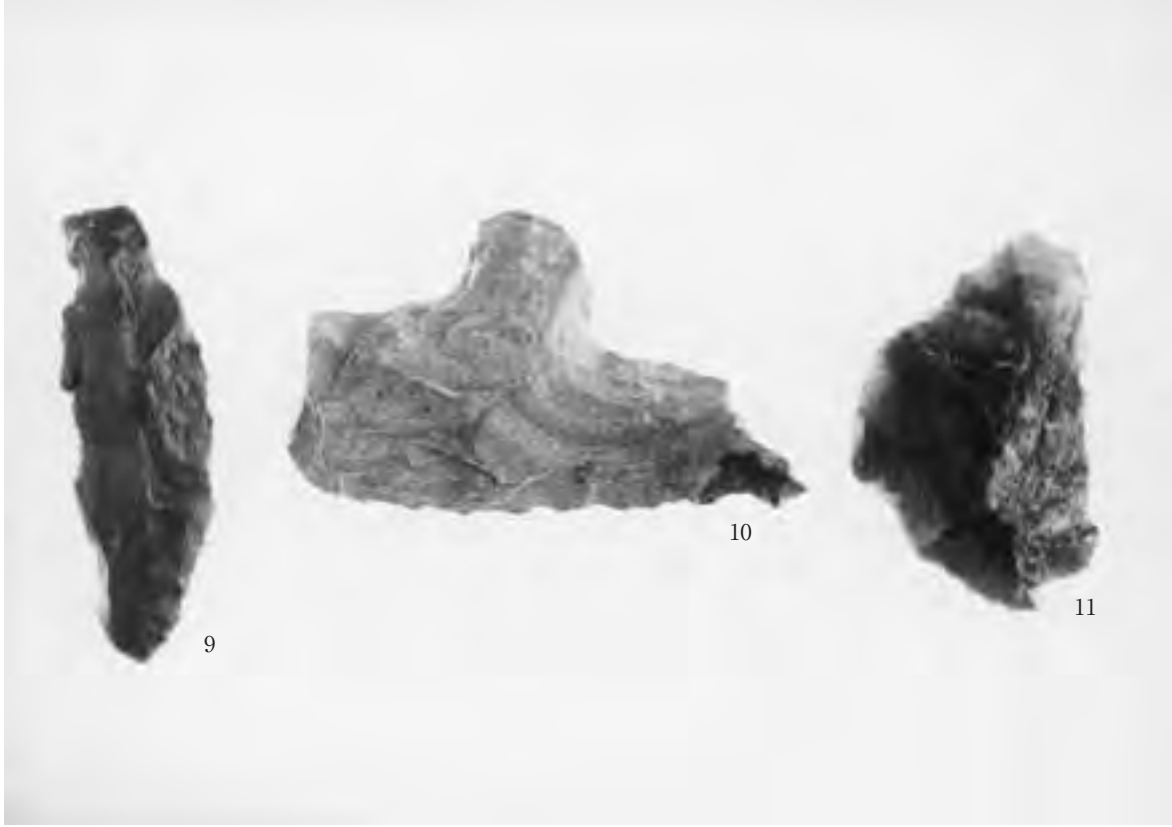
SD10、SD89出土遺物

SK14、SD 1 出土遺物

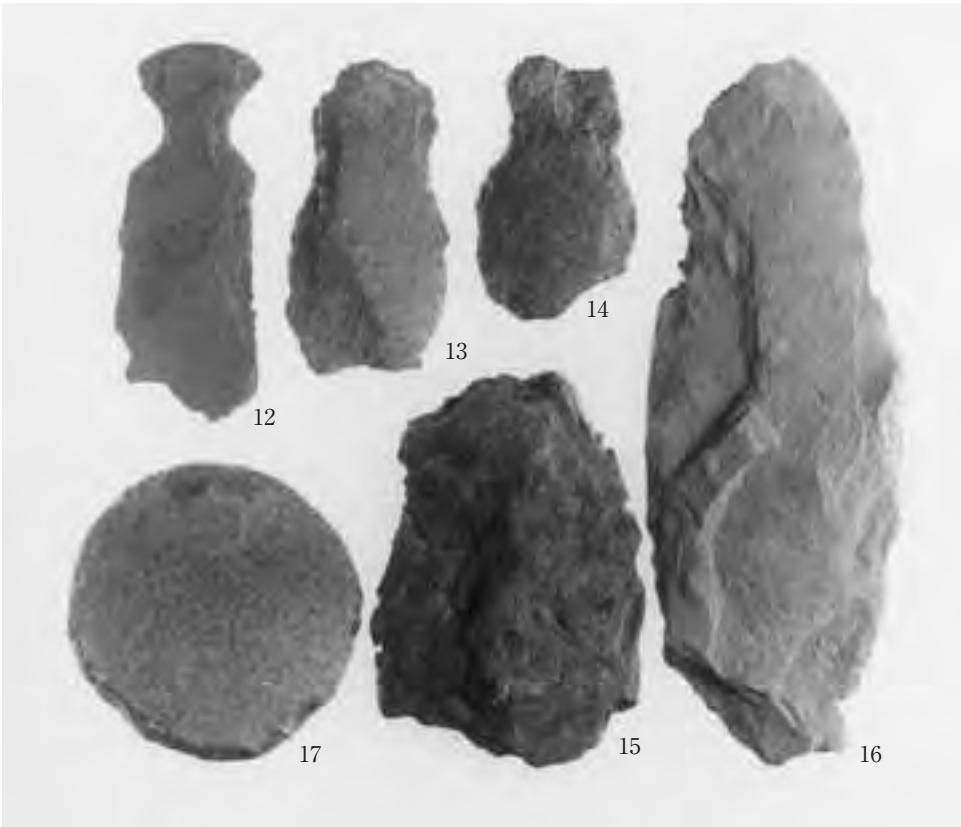
図版 24

遺構外出土遺物（土師器、陶磁器）

遺構外出土遺物（石鏃）



遺構外出土遺物（石匙、スクレイパー）



遺構外出土遺物（打製石斧、円盤状石器）

図版 26

S009、S015出土遺物

S018、S004出土遺物

S013、S014、S017出土遺物

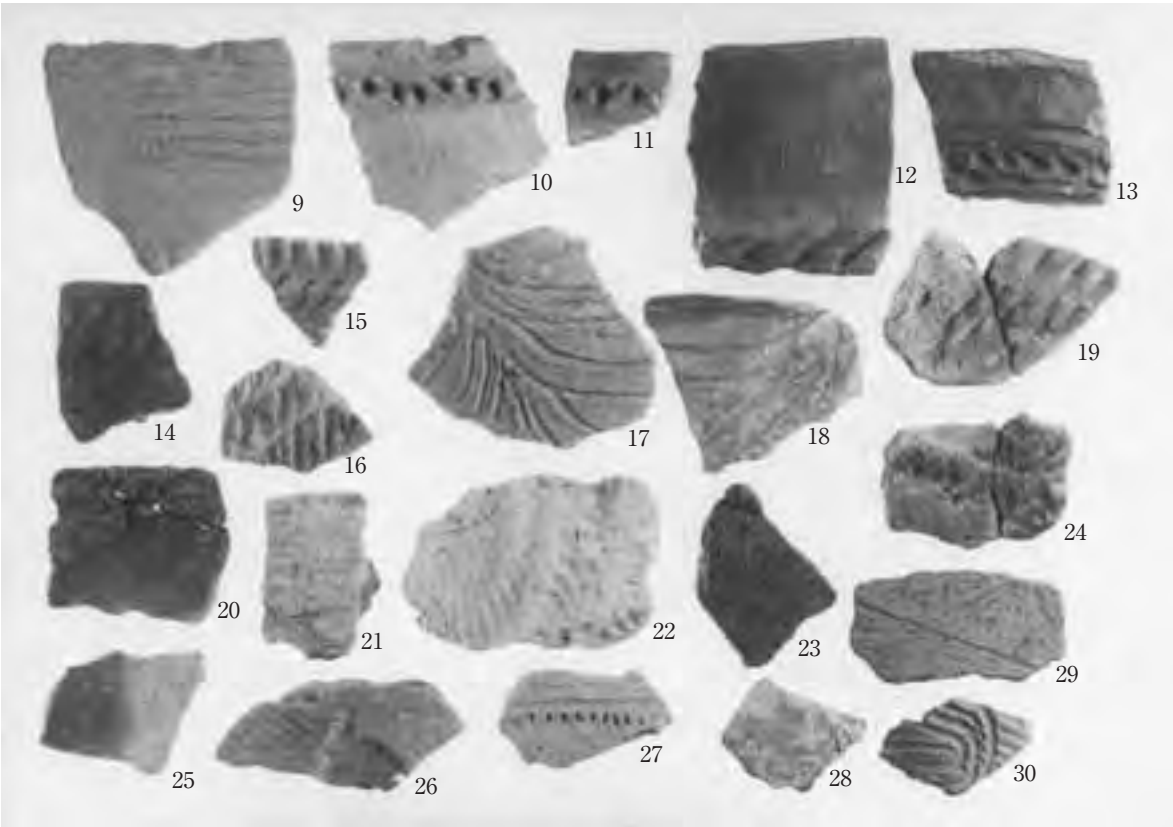
S008出土遺物

図版 28

S008出土遺物

S011出土遺物

遺構外出土遺物（縄文早期土器）

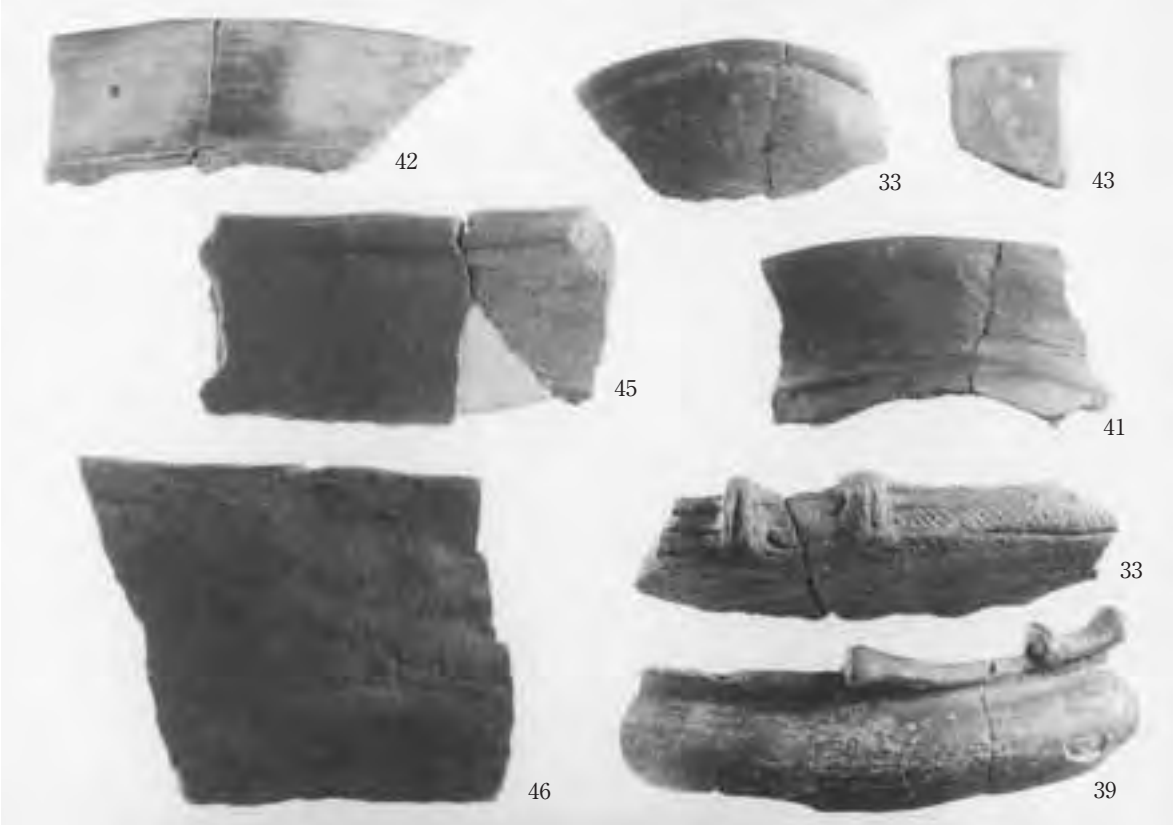


遺構外出土遺物（縄文土器１）

図版 30

遺構外出土遺物（縄文土器 2 ）

遺構外出土遺物（縄文土器 3 ）



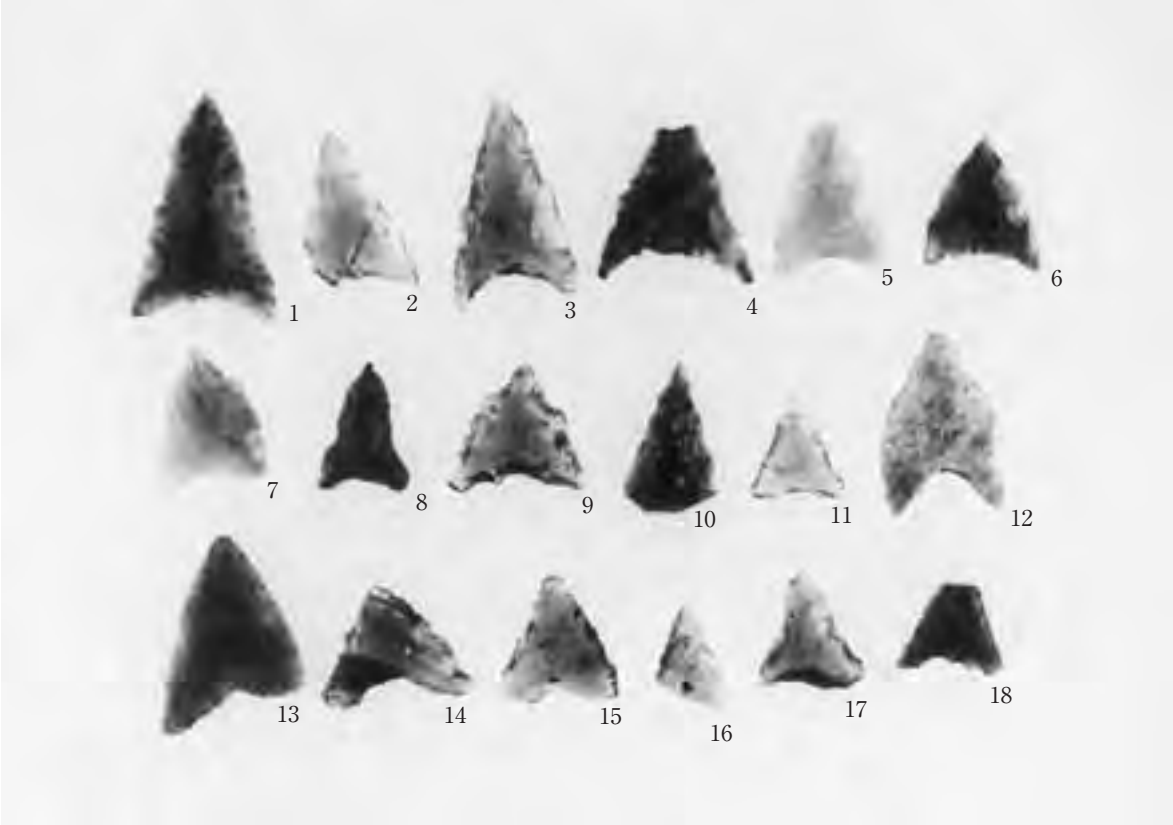
遺構外出土遺物（縄文土器４）

遺構外出土遺物（縄文土器５）

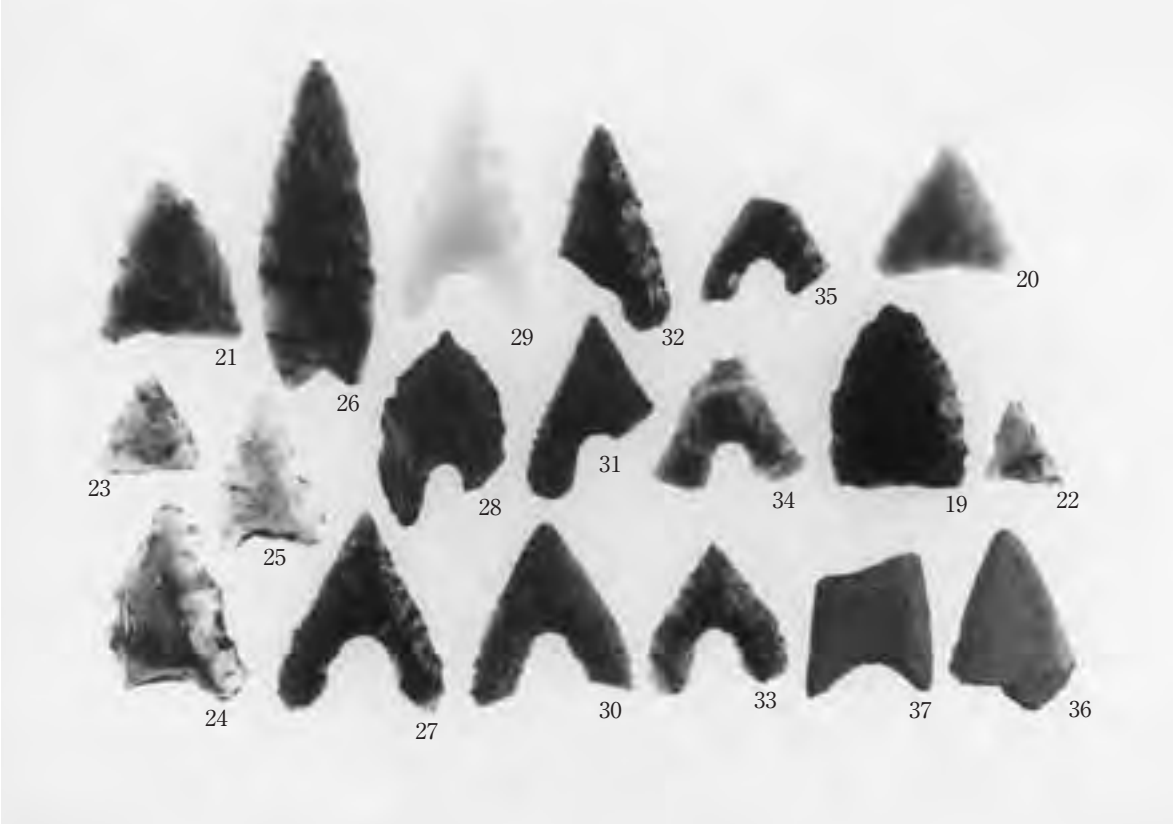
図版 32

遺構外出土遺物（縄文土器 6 ）

遺構外出土遺物（縄文土器 7 ）



遺構外出土遺物（石鏃１）



遺構外出土遺物（石鏃２）

図版 34

遺構外出土遺物（打製石斧）

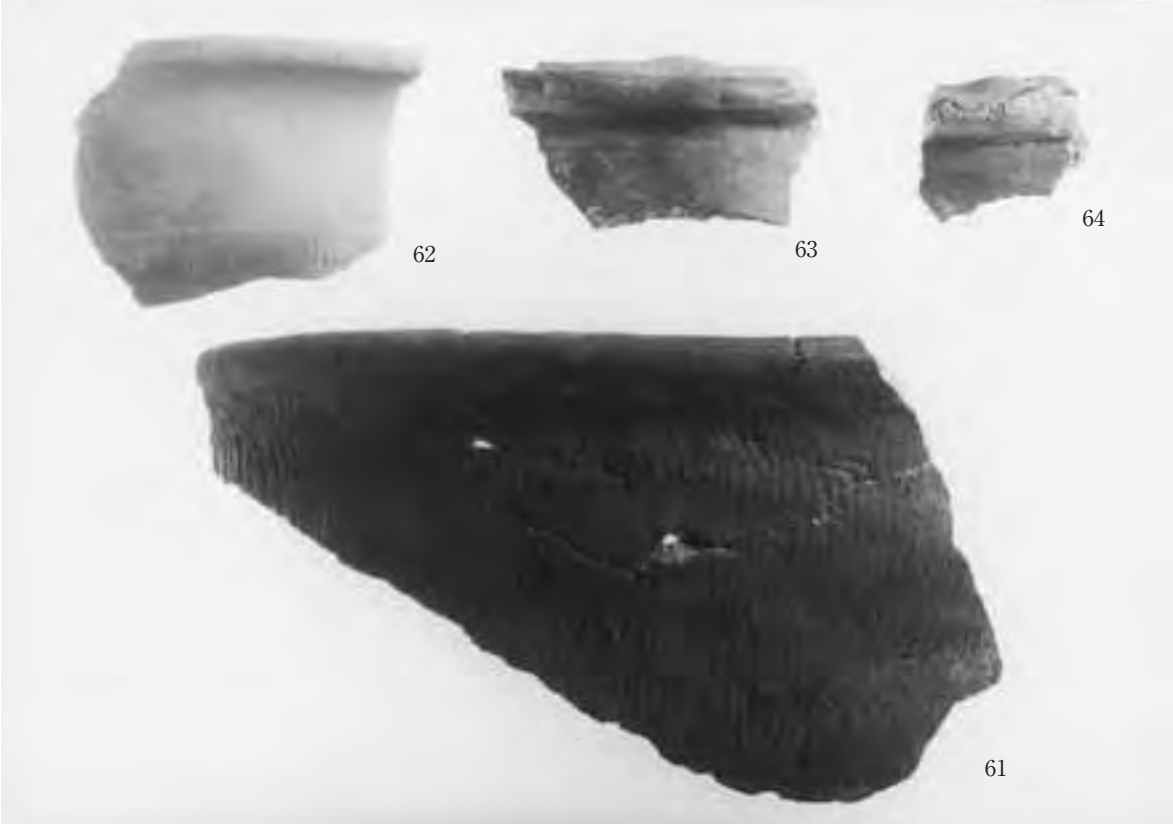
遺構外出土遺物（打製石斧、磨製石斧）

遺構外出土遺物（石匙、石錘、磨石）

遺構外出土遺物（磨石）

図版 36

遺構外出土遺物（弥生土器）



遺構外出土遺物（土師器甕１）

遺構外出土遺物（土師器甕 2 ）

遺構外出土遺物（土師器甕 3 、香炉）

図版 38

遺構外出土遺物（土師器坏）

遺構外出土遺物（黒色土器）

遺構外出土遺物（墨書土器）

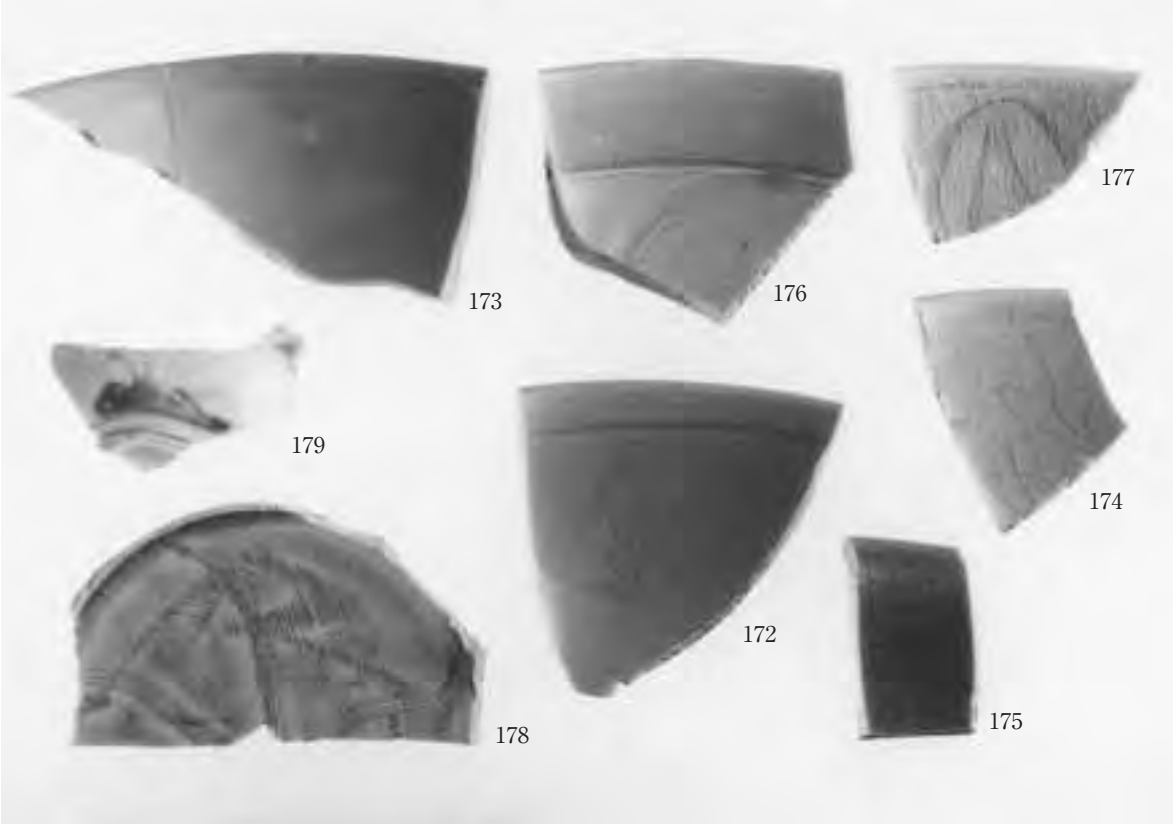
遺構外出土遺物（土師器）

図版 40

遺構外出土遺物（須恵器）

遺構外出土遺物（土錘、土玉、紡錘車）

遺構外出土遺物（灯明皿）



遺構外出土遺物（陶磁器）

熊本県文化財調査報告第237集

小　枝　遺　跡

一般県道小枝深水線緊急地方道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成19年３月23日

編集・発行　熊本県教育委員会
〒862－8609（教育庁専用）
熊本市水前寺６丁目18番地１号
TEL 096－383－1111（代表）

印　　刷　シモダ印刷株式会社
〒862－0951
熊本市上水前寺２丁目16－16
TEL096－383－5512（代表）

Cultural Series of *Kumamoto* Prefecture NO. 237

The Koeda Site

2 0 0 7

Board of Education, *Kumamoto* Prefecture

18 教委 教文

② 0 0 1

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 237 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：小枝遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日